始

63

324-344

帝國圖書館藏

基督教の宇宙觀及び人生觀

大正
2. 6. 24
内交

序

近時基督教に關する著譯書の世に公にせらるゝもの甚だ少しとせず、然れども其重なるものは論文若くは演說の編輯に成るものに過ぎず從て其傳ふる所は斷片的眞理のみ勿論偶には基督教を組織的に叙述せんと試みたるものなきに非ずと雖然かも其多くは神學上の學說を說明したるものに過ぎず而してともに時勢の要求に答ふる所以に非ざるを如何せん、

基督教の文學が斯く時勢と沒交涉なるの時に當りて我國科學哲學の普及進步は實に驚くべきものあり而して時勢は基督教に向て近世の科學哲學の立場よりして基督教の根本思想を說明せん事を求む此故に若しも基督教にして科學哲學の素養ある人士を「漁」せんと欲せば宜しく舊來の非科學的なる二元的解釋を放棄して科學的なる一元の解釋を確取せざる可からず

予の此書や此必要に應せんが爲めに著作せられたるものにして基督教の根本

思想――……人生觀宇宙觀神觀――を近世の科學哲學に基きて說明したるものに外ならず、若し夫れ基督敎の敎義およびそが哲理に至りては他日の著を待ちて論明する所あらんと欲す

大正二年五月

著者識

注意六則

一、本書は近世の科學哲學の立場よりして基督敎の根本思想を說明せんと試みたものなれば之れを基督敎哲學の序論と稱するも可なり

二、本書には內外の引用書目を揭載したり之れ讀者をしてかゝる研究に便ならしめんが爲なり

三、本書は普通の讀者にも解し易からしめんが爲めに通俗を旨とせり

四、本書の解說は著者が所信を有の儘に縷述したるものなれば舊來の有神說若くは神學說と一致せざる所あるべきや必せり

五、但し著者は自己の意見を積極的に陳述するのみにして他說を非難攻擊するの弊を避けたり

六、著者は有らゆる宗敎を神の顯現の一部分若くは一程度と信ずるが故に有らゆる宗敎を尊敬し敢て佛敎學者の轍に倣ひて他宗他敎を誹謗するの愚を爲さず

基督教之宇宙觀及人生觀

一名宇宙人生の一元的解釋

第一章　人間の眞相

要目

人生の謎――釋迦の遯世――人生は迷か現實か――人間とは何ぞや――一休和尚の歌――玄宗の歌――人生の無常と人生の意義――人は神の子なり――人間神子觀と進化說――ハックスレーの述懷――カーチナルマンニング――ダッフィルドの評論――進化說の主張――生物の起源――『種原論（オリヂンオフスペシス）』――人猿同祖說――ハックスレーの主張――生物同源說――基督教人間觀の二大理由――進化は人間の價値を增大す――下等動物の高尙偉大――フイスクの基督教と進化說の意見――二種の人間觀――唯物的人間觀の缺陷――動物界の道德――靈的人間觀――其着眼――孔子ソクラチス釋迦――セキスピアの『ハムレット篇』――理想的人間觀――パスカルの言――ミカエルアンヂエロ――人間の可能性――ケヤードの基督教哲學――人が神に像造られたりとの意味――人は無限の一要素を有す――其事實――自己の有限を知るは其一――

有限を超越する能力あるを自覺するは其二——唯心說の立場

第二章　古今人生の二觀

人生問題——ハイネの詩——バウロケーラスの人生問題——人生問題は最重要の問題なり——人生問題の答は其人の宗敎なり——二種の人生觀——樂天觀——創世記の樂天觀——印度古代の樂天觀——リチャードガルブの『古代印度哲學』——リグウェダの二詩——バビロン、及びアシリヤの天地開闢說——プレトーの樂天觀——易の天地觀——堯帝時代古老の歌——詩經大雅篇——李太白の詩——樂天派の哲學者——ライブニック——ミルトン——樂天觀は人生の一面——波羅門敎の厭世觀——釋迦出家の由來——無常經の厭世觀——修證義——テーロルの『聖死』（ホーリー・ダーイング）——人生は苦患境なり——ミル、ショウペンハベル——世界は出來得丈最惡の世界なり——『意志及觀念としての世界』（ウール・エント・アンド・ヴィーデス）中に說かれたる厭世哲學——無覺意志と個人——生命は連續せる欺騙也——一切の幸福は虛無——ゲーテの名詩——バイロンの厭世歌——ミルの宗敎論——樂觀悲觀はともに一面の眞理——二觀の短評——兩面の觀察

第三章　人生の解釋

基督敎の樂天觀——樂天觀の兩面——人類一体說——我とは何ぞや——肉体我——遺傳の法則——個人は祖先の混合物——二種の遺傳——言語の能力の遺傳——性向の遺傳——世に創見創作なし——ゲーテの名詩——心的自我——人格者の特質——人格の疾病——エムリボーの實驗二重人格の實例——人格の成分——人格の形成——社會的生活と個人的生活——敎授ウエルニケの說——言語と思想は一なり——ゲーテ——自我獨存の妄想——理想的自我——理想とは何ぞや——リユウケルトの言——一哲人の言——理想の由來——ケプレル發明者は發見者のみ——詩人の創作——祖先と敎育——人は個体としては無意義のみ——個人の役割——個人は祖先の化身社會の縮寫——人類は一体也——バウロケーラスの說——古今聖賢の倫理の極致——人類發達の順序——我は我のみの我に非ず——ゲーテの詩——人類一体の理を提げて宇宙人生を達觀すべし——フエアベルンの『基督敎哲學』——フリントの『有神哲學』——萬有は唯一箇の絕大なる全体の衆部分のみ——萬事皆善し

第四章　人生の解釋

自我永存說——從來の靈魂不滅說の誤謬——唯物說と二元說は共に誤謬——心身不二靈肉一体——小我は實在の海面に浮べる泡沫のみ——オリバーロッヂの說——ロッヂの『信仰の實質』（サブスタンス・オフ・フェース）

ゲーテの格言――肉体は一大心靈の顯現――唯物論の困難――感覺とは何ぞや――ライブニックの非唯物論――古風の哲學者――ハックスレーの『生命の物的基礎』――唯物論の眞理――腦髓と智力――下等動物の例――視覺神經の病失と視覺の消失――腦髓の各部分の各職分――各能力は各其中樞を異にす――言語不隨病――言語中樞の所在――ビチットの『二重意識』――リボーの『人格の疾病』――ブントの心物併行說――二元說は淺薄なり――ヘッケルの『宇宙の謎』――ブントに對する批評――二元說は最後の解決に非ず――人心の一元的要求――心物は一大理性の發現なり――唯物論と二元說の誤謬――世に物質なるものなし――人身の解釋――其說明――生命と有機的組織とは孰れが先きぞや――カントの超然的唯心說――宇宙の本体は勢力なり――有形の諸物は心內暫假の假体――死とは何ぞや――從來の創造說の誤謬――舊來の自我永存說――フイスクの自我永存說――ロッヂの『科學と靈魂不滅』――ヘンリーヂヨルヂの『進步と貧乏』――ケヤードの『基督敎の根本思想』――現世は學校若くは家庭――バウロ――孟子――フリントの說

第五章　煩悶苦惱の原因

自殺者と其原因――煩悶苦惱の原因――佛敎の四聖諦――苦諦――釋迦の說話――集諦――人

慾と苦痛――人慾の起源――無明――十二因緣――苦痛絕滅法――滅諦――道諦――佛敎學者の明言――リチヤードガルブの『古代印度哲學』――法句經――起信論――涅槃經――バウロの財寶觀――人生の苦痛を脫却するの道――人生の無常を達觀する事――四十二章經――修證――萬有に定相なし――苦痛の解脫――基督敎の罪惡觀――人間苦悶と罪惡――其實證――猛々の話――悟道と罪惡――罪惡は智の悟ありて意志の實行なき所に存す――意志の實行なきは何故ぞ――戀と快感――釋迦の道諦――聖賢と罪惡――アワガスチン懺悔錄――バウロの悔恨――孔子――ダビデ――人生の苦悶は一面は無智より一面は罪惡より來る――印度思想と西洋思想の特質――今日の基督敎――罪惡は癩病の如し――我救はれん爲めに何をなすべきか――昔の猶太國の習慣――人類は海中に溺死せんとする人の如し――基督敎の救の兩面――フライデレルの救の學說――バウロが靈力の出所――世界は苦界か樂界か――基督の敎――博士グラントの言――天地皆善し

第六章　宇宙の本体

宇宙の起源は流星にあり――流星の數――流星の河――衝突の結果――サムエルレーングの『將來の問題』――流星とは何物ぞや――隕石――クロール衝突說――流星は暗星の衝突よ

り生じたる斷片——暗星の存在——恒星——アルファ星——光線の速力——半秘以下を動くに過ぎざる恒星——『近世科學』シリアス星の事——宇宙の大——星雲——星体の本質は何ぞや——分光鏡——分光鏡の試驗の結果——物質とは何ぞや——微分子とは何ぞや——一元の解釋——ブロウトの說——クルークスの說——ミンデレヂエフ——多元の根本たる一元——其事實——ケーラスの『根本問題』——同一分子結合の有樣の異同は異物を生ず——元子結合の有樣の異同は諸元素を生ず——電子說——電子發見の次第——電子の微細——オリバーロッヂの電子說分子の小——ソルビー氏の實驗——宇宙は大も無限小も無限——宇宙の根底——電子とは何ぞや——物と力の共存を唱ふるは二元說のみ——唯物論の困難——宇宙はコスモスなり——電子界のコスモス——ハックスレー——物質の本体は勢力なり——其理由——ロックとカント——外界の智識の出所——物体と色——カントの『哲學序論』——吾人は物質なるものを一度も見たる事なし——宇宙の本体は勢力也——萬象は一勢力の假裝——宇宙の本体たる勢力は合理的明智の勢力なりや否や

第七章　宇宙と神の關係

宇宙の實体と謙遜なる科學者——不可思議論者の態度——不可思議論に關するハックスレーの

定義——可知界と不可知界——ハルバルトスペンセルの『哲學原理』——其哲理——カントの哲理——不可思議論の不充分——アウガストコント——コントの星体不可知說と今日の科學——不可思議論者の答——現象界と實在界——現象の現象たるを知るは實在の智識あるが爲めなり——醜美の智識の例——スペンセルが實在に關する言說——不可思議論は矛盾なき能はず——實在の性質——ショウペンハベルの意志說——宇宙の勢力は意力なる所以——人の直接に知る勢力は意力のみ——フエーアベルンの『基督教哲學』——意力は明智の意力——ハートマン——其哲理——進化は目的を有す——ラッドの認識論——大實在者に道德性ありや——ショウペンハベル、ミル、ハックスレー——世界兩面の事實——人生の目的は向上進化に存す——シーレルの詩——人類一体の觀——宇宙の道義法——ヒフテ——ケーラス——人は愛を以て性となす——人界の愛は大實在者の道德性の顯現也——キリストに依れる大實在者の愛の顯現——大實在者は有覺か無覺か——意識とは何ぞや——ラッド——無覺論者の說——其反論——ロッセの有覺哲學——ロッセの勝利——ラッドの宗教哲學——萬有對神——自然神教——其反論——凡神說——其反論——宇宙と神とは二にして一、一にして二

第八章　人類の起源

人類の起源に關する二方面の研究――マネゾーの埃及史（エヂプト）――サムエルレーングの『人類の起源（ヒューマンオリヂン）』――フリンターベトリーの說――メヂス王以前の王――メヂス王の治世――埃及史――金字塔とスウインクス――埃及史は九千年若くは一萬年を溯り得べし――形象文字解讀の由來――アッシリヤ學――カルデヤ國――ベロサスの記錄とバイブルの記事――ポッタ氏及びレーアルド氏――一萬年以前に於ける埃及およびカルデヤの文明――支那及び亞剌比亞――歷史以前の人類は何時頃地球上に出現せしや――科學の敎ゆる所――ケント窟――地層の順序と遺物――ストラグマイト層形成の事――其堆積の割合――ケント窟以外の諸窟――氷原時代――そは何時始まりて何時終はりしや――氷原時代に於ける人類存在の實跡――タルチアリー時代――エオシン時代には人類存在の跡なし――ミオシン時代には類人猿存在したり――プリオシン時代には人類存在の實跡見ゆ――モントアベルルトにて發見せられし遺物――クヲートレフアゲスの斷定――五十萬年以前に人類が存在したる事――夫れよりも更に古き證據――ミオシン時代の證跡――葡萄牙國の地質學者ゼフーリベイロの石器――人類の意義益々擴大せらるる――ジョンフイスクの說――世界の人種は一元か多元か――世界の人種は一種中の變種のみ――アンダルソンの說――世界諸人種の根本人種は黃色人種なり――ローリンソンの說――人類出現の塲所――ダルウインの說――ハックスレーの說――ワレースの說――人類出現の塲所は溫帶の高野――

其亞細亞高原たるの理由――チャバに於て發見せる猿人（エーブマン）の遺骨――ヘッケルの斷定

第九章　宗敎の進化

宗敎は人間界の大事實――グラントの言――總ての宗敎は唯發達の程度の相異のみ――耶佛兩敎徒の誤解――マックスミユーラーの名言――宗敎の優劣は眞理と不眞理との相異に非ず――宗敎は孰れも不見者に對する信仰なり――宗敎の起源――歷史的起源と論理的起源――歷史的起源に關する數種の學說――恐怖と禮拜の起源――サバチエの說――宗敎的拜禮の起源――野蠻人には生死の區別なし――野蠻人が死を自然のものとせざる理由――屍体保存の習慣――ニユーギニア婦人――スペンセルの『社會學原理（プリンシプルスオフソシオロジー）』――屍体禮拜――之れ宗敎の起源也――屍体禮拜を最も原始的なりと云ふ所以の理由――埃及ペルーの木乃伊（ミイラ）崇拜は屍体禮拜の進化したるもの――頭蓋骨保存の風――スペンセルの記事――屍体禮拜の初期は恐怖よりも愛を多量に含む――屍体埋葬の起源――そが粗石時代に存在せし事――エワン氏の證言――歐羅巴に於ては古代は土葬のみ火葬の跡なし――埋葬の廣く行はるゝはそが原始的なるの證據――火葬屍体委棄河中投入は後代の產物――埋葬てふ野蠻なる風習の意義――そは屍体恐怖より起る――フレーザーの說――墓石及び石塚の起源――墓標の起源――ノルデンスキオルドの記事――

墓標より偶像の進化――火葬の起源――原始的崇拜の進化の順序

第十章　宗教の神髓

祖先崇拜の起源――原人には夢と現實との區別なし――ダルウインの說――拜物教の起源――自然禮拜――動植物禮拜――スペンセル、とフレーザー――宗教は人の忘想に過ぎざるには非ざるか――ゼノフアネスの言――禮拜の對象は人の智愚賢不肖によりて差あり――人は何故に神を創造せざる可からざるか――之れ宗教哲學の問題――歷史的起源と論理的起源――サバチエの說、自我と外界の矛盾――そが宗教の起源たる所以――エドワードケヤードの『宗教進化論』――ジョンケヤードの『宗教哲學』――實驗哲學者アヲガストコント――科學哲學宗教は各其傾分を異にす――コントの矛盾――宗教は人性の自然とするも宗教の本尊は人の創造には非ざるか――各宗教は神の顯現の一部也――大洋の水――宗教の進化は神の顯現の進化也――ヘゲルの說――嬰兒と母の譬――所謂預言の發達――ハリスの神の自啓――宗教の異同は神の顯現に應答する人心の發達の程度によりて定まる――世界の各宗教は一の有機的現象――神儒佛の關係――基督教と猶太教――自然宗教と超自然宗教の區別は非なり――有らゆる宗教は神に對する人の渴仰、人に對する神の自啓也――自然と超自然の歸一――多神教凡神教一

神教の優劣――宗教の眞意義は基督教によりて現はる

第十一章　倫理と宗教

人は倫理的動物なり――倫理道德とは何ぞや――倫理の歷史的起源と論理的起源――天性と要件――道德政法說――ルーソーの民約說――其批評――道德與論說――其批評――道德神意說――其批評――道德自外說は倫理道德を說明するに足らず――道德自中說の勝利――何故に道德を行ふや――主美說――其批評――主樂說――其批評――正義說――其批評――道德上の行爲は主觀客觀の兩面より見るを要す――其一例――總ての倫理學者が一致する善意善行――倫理道德の理想――自己の要求と社會の要求――宗教と倫理――教授ペトリーの說――其誤謬――宗教が倫理に與ふる刺激力――倫理思想は宗教と相待ちて進步し來れり――老子――古き佛書の言――基督の教――倫理と宗教の歸一――教授イリーの『基督教の社會的方面』――ヨハチの愛神即愛人說――パウロの愛神即愛人說――宗教と倫理とは一物の兩面――カントの說

基督教之宇宙觀、人生觀要目 終

基督教の宇宙觀及び人生觀

（宇宙人生の一元的解釋）

白石喜之助著

第一章　人間の眞相

傳說に依れば昔し埃及（エヂプト）にスウインクスと名くる怪物が居て通行人に六ヶ敷謎をかけ其謎を解き得たる者は無難に通し解き得ざる者は取て食ふたと云ふ事である、人生は實際六ヶ敷謎ではないか、茫々たる天地の間に生を托す而して苦樂生死循環して果てしなし、旦に呱々の聲を擧げ夕には孤墳一基の主と變ず、生死の間世の煩累と不如意とに煩悶す、人生は抑も何物であるか、世上人生の何物なるを解せざるが爲めに徒らに苦悶し厭世し人生不可解を唱へて悶死する者すら少くない、實に人生はスウインクスの謎である、一青年は

書を予に寄せて「人生果して存在するの價値ありや生は充分なる解答を得るに非ざれば自殺せん事を欲す」と其苦衷を言ひ現はして居る。

人生の謎はスウインクスの謎に比して幾層倍困難複雜なる謎である默示錄には「七の封印せる卷物」に譬へてある而して此卷物を開き封印を解くに堪ゆる者天にも地にも地の下にも一人もなしと書て人間の智力に失望した有樣が記してある、釋迦の遯世は名高き說話ではないか彼が老病死てふ人生の慘事に對して深く痛歎し王位を棄て最愛の妻子を殘して幾年か雪山に冥想苦行し人生の苦痛を脫却せんと試みたのは人生問題の根本に解釋を與へんとしたのである。

人生必竟何物であるか迷であるか眞であるか妄覺であるか事實であるか人生一切の事實を迷である妄覺であると觀ずるのは極端なる唯心說であつて今日の思想界に通用の出來ぬ謬見である、人生一切の事柄は之れを事實と見るの外はない人生に存する苦も樂も生も死も懷疑も煩悶も皆事實である、我等の

要務は人生を無視するに非ずして之を正視し其眞相を知り明らむるにある。人生の何物たるやを究むるに先ちて一言し置くべきは人間とは何ぞやの問題である盖し此問題にして解決せられたらんには人生問題を解く事自ら容易なるべしと思はるゝ

一休和尙の悟道の歌に

○世の中を思ひまはせばくるくるると
　旋り旋りて末はばつたり

是れ人生の無常にして人間が傀儡の如きに過ぎざるを歌ふたのである、玄宗は直接に傀儡を指して人間を歌ふて居る

世の中の人は傀儡（くぐつ）あやつりて
　まはしまはせば後はがつたり

人生の短縮に對する一休玄宗の悟りは尤もの次第である然し人生の短縮は果して人生の無意義を證するものであるか之れ吾人の丁寧に研究せねばならぬ

問題である、

人生の無常は謂ふ迄もなき事であるが然し人生の無常と人間の意義とは別物である、蓋し人生無常なればとて必ずしも無價値なりと稱する事は出來ぬ、見よ巖石は千萬年其形容を更めずと雖一日の生を樂む蜉蝣に比すれば比較的に意義なしとせらるゝではないか董花は之れ一朝の榮に過ぎぬ然かも其美は詩人をして

朝顔につるべとられて貰水

と讃歎せしむるではないか況んや此靈妙なる人間を觀察するに於てをや深き注意を以て其善美を見ねばならぬ

基督教に從へば人は神の子である、創世記には「神其像の如くに人を創造たまへり即ち神の像の如くに之を創造したまへり」とあり、亦詩篇には神が人間を神よりも少しく劣りたるものに創造したまふと謂ふ事が歌ふてある曰く

世人はいかなるものなればこれを聖念にとめたまふや、人の子はいかなるものなればこれを顧みたまふや、只すこしく人を神よりも卑つくりて榮と尊貴とをかうぶらせ云々

路加傳第三章三十七節には「アダムは即ち神の子なり」と書てある四福音書及び保羅の書翰に徴すればイエス及び弟子等が人間を神の子と確信して居られた事は瞭々として火を見るが如しである、此確信が果して事實に適合するや否や、此確信が人生の事實に抵觸せずして寧ろ人間の眞相を發露したるものと見るのが基督教の人間觀の特殊なる點である。

偖而基督教の人間神子觀は近世の進化説に對して如何なる關係を有して居るか、進化説の意見を眞とすれば基督教の人間神子説は滅却さるゝではあるまいか、二三十年前迄は科學者も神學者も然か想像したので科學者は進化説を提げて基督教に反對し神學者は進化説の缺陷を論評して防戰之れ勗めたものである、ハックスレーとグラッドストンの論戰の如き其一證である、然し乍ら夫れは過去の夢と消へ去て今は進化説が基督教の人間觀に大なる援助を與ふる事と成た、然し進化説の始めて唱道せられた時分則ち今より四五十年

前にありては神學者と進化論者の論戰は非常なるものであつた、ハックスレーが『ダルウインの生涯及び書翰中』に寄書したる文中の一節は時勢の變遷を窺ふに足るものがある曰く

實に進化說に對する輿論の現狀、ダルウインの見解が今日學界に有する尊敬、現時自重心ある神學者の默從少くとも沈默、と一千八百五十八年より五十九年頃種原に關する此新說が始めて世に知らるゝに至りし時に於ける各方面の反對論の爆發との間には時勢の變遷極めて甚だしきものありて予自身すらも之を記錄に徵するに非ずんば我記臆を夢には非ざるかと疑はざるを得ざる程なりとす

然も其時代にありては科學者と神學者との雙方の誤解は徒勞なる論戰に無益の骨折をしたのである、カーヂナル、マンニングすらも進化說を

獸的哲學即ち無神にして猿を以て人間の祖先となすものなり

となし天主敎も新敎もともに進化說を

神を廢するの企圖、大なる欺騙、聖書に不信を懷かしむるもの、造物主を戸外に驅逐するもの

と見做し惡魔の福音として嫌惡したのである、エドワード、クロッドが其『進化說の開拓者』に引用せる所にしてドクトル、タツフイルドがブリンストン評論に掲げたる進化說の評論は當時の多數人の思想を言出したるものである曰く

人間の起源に關する進化說は暫時の間は他の滅絕せる科學上の空想と同じく世に行はるべきや必せり、かくて其至當なる論理上の結論と共に此說を受け容るるの人々は、未來に於ては現世に於て「神を知らず而して神の子の福音に服從せざる人々」と其應報を同ふすべし

實に幼稚憐むべき思想であるが當時においては致し方もなき事である然れども最近二十年以來時勢は全く一變して進化說が着々として實證せられ神學上の思想が擴大せられたる結果として進化說と基督敎とは決して矛盾するものに非ざる事が明白と成て來た從て進化說を以て基督敎の援助となさんと欲するものが續々として輩出する樣に成て來た之れ思想の進步として吾人の慶賀せざるを得ざる所である。

今夫れ進化說は如何なる事を敎ゆるかと謂ふに、つまり生物は單純なるものより複雜なるものに變遷進化するものである、かの高等の生物は劣等なる生

物が基礎と成て夫れから進化し出たものである而して其劣等なる生物は更に劣等なる生物より進化し出たものであると謂ふにある、かく高等なるものより劣等なるもの劣等なるものより更に劣等なるものと言ふ順序に其源に追溯して生物の起源を水中に存する單細胞生物に歸するのが近世進化説の歸着點である。

今生物の起源を水中の單細胞生物にありと云ふの理由を一言し置かんに、それは他に非ず濕氣と熱とは生命に主要なるものであるから生命の起源は水中に始まらねばならぬと思はるゝからである、教授モーズレーは一千八百八十五年に『自然』（ネーチユア）雜誌上に於て生物起源の場所を論じ、そが海濱なるべき事を述べて居る曰く

動物てふ家族の一樹が形成せられしは海濱なりしなり、有らゆる地上及び深海の生物は曾て一度は海濱に住したる經歷を經たるものなり而して海濱動物の代表者中には幼蟲狀態の種々なる經過によりて進化の歷史を最も完全に再現するものあり

エドワード、クロッド曰く

動物進化の主要なる要件（水）は亦植物の進化にも主要なる要件なれば植物も亦同じく海濱に發生したるなるべし

而して海濱に始まりし生物は極めて單純なるものにして單細胞生物であるのである、之れが抑も今日萬種の生物の起源をなしたのである。

一般の生物が單純なるものより複雜なるものに進化したとすれば生物の一種たる人間も始めから人間として世界に出でたるに非ずして下等なるものより進化し來たものであるべきは理の當然であるダルウィンは一千八百五十九年を以て思想界の革命書たる『種原論』（オリヂン　オフ　スペシス）を公にし大に進化論を鼓吹したけれども唯一般生物の進化を叙述したるのみで其論歩を人間に迄は進めなかつたのである、然る所進化説を祖述し擴充し適用するに妙を得たるハックスレー等が起て人類進化の事實を論述し人猿同祖説を唱ふる樣に成て來たからダルウインも其第二の大著たる『人間の由來』（ヂツセント　オフ　マン）を出版して人間と下等動物と其体制

を同ふし其心的生活を等ふする所以を明らかにし以て人間進化の事實を指摘したのであるダルウィンと相前後して獨逸のヘッケル英國のスペンセルが進化說を唱へ出した、爾來四五十年間進化說は科學者によりて研究唱道せられて人猿同祖說は今日の所科學界の確說と成たと云ふてもよい位である。

ハックスレーは其著『自然界に於ける人間の位地』に於て人猿の体制の相似たるを詳述し、かくて人猿同祖說の爲めに氣焰を吐て曰く

若しも人間の体制と獸類の体制の相異が獸類と獸類との間の体制の相異よりも大ならずとせば——然らば若しも普通動物の屬と科とが物理上の原因によりて(同一の起源より)生じ來れるものたるの經過を明らかにするを得たらんには人間の起源も亦同じ物理上の原因の經過によりて說明するに極めて充分なりと論結せざる可からず、他語を以て之を言へば若しも斑猴にして普通のプラチリニの漸化に成るものなる事若くは斑猴並びにプラチリニが更に原始的なる一動物より變遷したる分派なる事を明示するを得たらんには然らば——、人間が或は類人猿の漸化に成りし事さなくも類人猿と同一の原始的動物より分派し來れる事を疑ふは甚だ理由なき事なり

之れ實に公平なる議論である而してハックスレーの此著ありて以來生物進化

の事跡は着々として證明せられ人猿同祖說は殆んど有らゆる科學者の承認する所と成た。

既に人猿同祖なりとすれば人と猿とは同族である而して猿は狐猿や蝙蝠と其祖を同ふし狐猿や蝙蝠は昆蟲食獸より分れ昆蟲食獸は更に劣等なる動物より來るとすれば人猿同祖說は亦人獸同祖說となり人獸同祖說は亦人間も動物も結局單細胞生物を同祖とする同族に過ぎずと云ふの結論に達する而して單細胞生物は生活質に由て成るもので此生活質は動植物の基本を組織するものであるから、つまり動物も植物も其出所を同ふする同族者であると言ふ事になる去れば人猿同祖說は一轉して生物同源說に歸着するのである、今暫らく生物同源說を差し措き人猿同祖說に就て稽へんに人が猿と祖先を同ふするとせば『人は神の子なり』てふ基督教の人間觀は消滅し去るではあるまいか、此問に對して予輩は否と答ゆる予輩が否と答ゆる理由に二つある(一)は人間が動物より進化し出でたりとするも既に人間たる以上は其出所の如何によりて

毫も人間たるの價値を損せぬと言ふ事である、蓮は泥中に生じ泥中の汚物を吸收して至美至麗の花を開く誰れか泥土と蓮花とを混同するものがあるか、人も亦此の如しそが出所を動物に採るも既に人間と成た以上は動物に非ずして人間である、出所の賤しきが爲めに人間の價値を疑ふ者は家柄の如何によりて偉人を褒貶する人の如く淺薄極まる謗を免がれぬ、進化論者の領袖ワレースすらも斯く云ふて居る曰く

人類は啻に億兆なる生物の首長たり絶頂たるのみならず又幾分かは特殊なる新階級を成す者と見做さゞるべからず

且つ人間が下等動物より進化し出でたりとせよ人間は昔時の猶太人が信じたる如く一夜造りの受造物に非ずして遼遠の攝理と長久の進化とによりて產出せられたる者で無價の價値ある者なる事が解るではないか換言すれば人間の進化は却て人間が神の子たるの證據となる（二）は若しも人間が下等動物より出でたりとすれば下等動物は通常人の思ふが如く賤しき者に非ずして實に

高尚偉大なるものであると言ふ事である、世人は下等動物を「啞の動物」と稱して輕蔑し之れと祖先を同ふすと云ふを以て人間を侮辱するもの〻如く考ふるけれども、そは非常なる間違である、科學者の主張するが如く下等動物が人間を出したりとすれば下等動物は即ち發達せざる人間であるから實に偉大高尚なる者として尊敬せねばならぬ、非科學的なる人々が人猿同祖說を聞て不愉快に感ずるのは人間の尊ぶべきを知りて未だ動物の偉大高尚なるを知らぬからである、空飛ぶ鳥、地を匐ふ蟲、野に咲く花も靈眼を開て之れを熟視すれば實際絶大巧妙なる絶對者（神）の榮光を表現するではないか進化說は人間を引下げて動物と伍せしむるものではない却て動物を引上げて其眞價を發揮するものである進化說の碩學ジョン、フイスクは其小著『人間の歸趣』に進化說を叙述しそが基督教の人間觀に及ぼす影響を述べて曰く

ダルウインの生物學はコパルニカスの天文學と齊しく神の工と人間の性質に關する吾人の見解を未曾有に高尚ならしむるものなり、進化說は人間を引下して動物と伍せしむるものに非ず、

吾人をして始めて明白に人間の創造と完成とが自然界の動作の目標たる所以を窺知せしむるものなり、こは之れ人生の意義を十倍にし人生をして詩人もしくは預言者が想像せしよりも更に高尚なる位地に進ましめ之をして前よりも一層物界に顯現する創造力の至重目的たるを現はすものなり

果して然らば進化説は基督教の敵に非ずして其援助である、基督教は理想的に人間を名狀し進化説は人間の歴史を説明するのである而して兩々相携へて完全なる人間觀を形造る事が出來るのである

顧ふに世に二種の異なれる人間觀がある、第一は人間を獸類と見做し無道德を以て人間の眞相と見る一派の見方である、此派の人々の中には意見區々に分かれて居るから之を概括して論ずる事は出來ぬけれども無道德の獸的狀態を以て人間の眞相であるべき筈のものと爲すに至ては皆同じである、見よかの本能至上主義の名を冠して劣等なる肉慾の滿足のみを是認し高尚なる本能(良心)は之を忘却し去る一派の人間觀は人間を獸類と見るではないか、かの自然主義の美名の下に獸的慾望の滿足を鼓吹する一派の人間觀も亦人間を獸

類と見るではないか而して世には無數の實際的唯物論者が居る彼等の眼中名利の外何物もなく富貴逸樂を以て理想として居る是等の人々をして人間の理想を遠慮なく言はしむれば必ずや陶朱猗頓を以て其理想也と言ふに相違ないワンダービル、ロスチャイルドも其理想たるを失はぬのである、蓋し人間の眞相を獸的無道德であると觀ずれば自己の富貴安樂のみが其理想でなければならぬのは理の當然である、然し乍がら禽獸を無道德利己主義と見るのは大なる誤謬である浮田氏が其『社會學』に譯載せる所に依れば

禽獸にも美はしき道德がある象は社會的動物の一であるが彼等が森林より出で來る時は一匹の象が先に立ちて偵察をし次に數匹の象が番人となり終に象の全群が出て來ると謂ふ事である北亞米利加の野牛は外敵の恐ありと思ふときは牝牛及び犢を眞中に取圍み牡牛が周邊を守るのである、アビシニヤのバブーンの話は名高い話であるブレームと云ふ動物學者が或時數頭の犬を伴れて今しもバブーンの群が谿を下り山に上りつゝあつた時犬をして其群を襲はしめた、然るにバブーン中の勇悍なる者共は犬と戰ふて犬を逐ひ拂ひ跡に小さなるバブーンの殘されて居るのに氣付かずして向の山上に引上げた、すると犬群は此一匹の小バブーンを取圍で劇しき襲擊

を加へた小バブーンは進退谷つて岩上に攀ぢて呆然たる有樣であつた、之れに氣が付ひたる一匹の大バブーンは山を下て來て徐に圍まれて居る小バブーンの許に往き背を撫でゝ之を慰め意氣揚々として救上げて山に登たと云ふ、スコットランドの海岸に於ける海燕の話も亦有名であるトマス、エドワードといふ動物學者が此鳥を獲んと欲して之れに銃劍を負はしめた、すると仲間の鳥が二匹來て一匹は創傷したる鳥の右翼を咬へ他の一匹は左翼を咬へて之を助け海上を逃げ去つたと云ふ事である

其他之れに類する事實は枚擧に遑なき程澤山ある然らば禽獸を以て無道德となし人間が動物の一種たるの故を以て利己的生涯を人生の眞相なるべしとなすのは大なる誤謬と謂はねばならぬ。

第二の人間觀は則ち基督教的人間觀にして人間の眞相を聖賢の中に發見せんと試みる見方である此派の人々は現在有りの儘の人間を以て人間の眞相とは見ぬ盖し現在の人間は人間の未だ發達せざる者若くは墮落したる者若くは不完全なる者で人間の眞相を發揮したる者ではない、而してかの聖賢と稱する者は多少完全なる人間に近き人々であるから人間の眞相を窺はんと欲せば往

て聖賢を見よと云ふのが此派の人々の立場である去ればソクラテスは私利我慾の人民に比すれば、より多く人間の眞相を發揮したる人である、孔子は桓魋に比すれば、より多く人間の眞相を發揮せる人である、釋迦は煩惱の街に苦患する人々に比すれば、より多く人間の眞相に近い人である、ソクラテスが義の爲めに慫慂として鴆毒を傾け身を眞理に殉し孔子が南船北馬席暖なるに暇あらず一身の榮達を人道の爲めに犧牲に供し釋迦が世の榮華を抛ち身命を托鉢に委して以て慈悲忍辱の敎を說たのは確かに人間てふ者の理想に近いではあるまいか、セキスピアは其『ハムレット篇』に人間を理想的に描寫して左の如く言ふて居る

人間とは如何なる者ぞや、理性に於て斯く迄尊きかな、器能に於て斯く迄無限なるかな、容貌と態度に於て斯く迄著るしく且つ賞むべきかな、行爲に於て天使の如く知覺に於て神の如く萬物の精美にして動物の模範なり

理想的に觀れば人間程尊く偉大なる者はない人間の目安を俗人や利己的人物

に置けばこそ人間が獸類の如く見ゆるも進で人間の先覺たる聖賢の心事潔行を窺へば人間の眞價の無比に大なる者なるを悟るのである、基督敎は人間とは何ぞやの問題に答ふるに往て聖賢を見よと言ふに止まらず更に進んで「來てナザレのイエスを見よ」といふのである、蓋しナザレのイエスは人間中の最も完全なる者人間の眞相を其儘發揮したる者所謂神の人であるから最も理想的に人間を代表したる人である其德行の絶倫にして其品格の偉大なる眞に理想的人物である基督敎は此絶大無比の人物を師表として自己の德性を錬るものであるから人間を神の子と觀ずるのである。

勿論パスカルの言へる如く人間は宇宙間に於て最も脆弱なる者の一である、然し乍ら自己の脆弱なるを知るは實に偉大なる事である千萬年を經過して其形を更めざる巖石は自己の巖石たる所以を自覺せぬ數百年に亘れる亭々たる松柏は自己の長命を自覺せぬ、然かも人間は自己の短命變易を自覺する之れ實に尊い事で人間が脆弱なる身體を提げて尙ほ萬物の靈長たるを得る所以

である。

前にも述べたる如く基督敎は人間を理想的に見る者で其發達し行く可能性（ポッシビリチー）を豫想して人間神子觀を主張するのである、昔者かの大彫刻家ミカエル、アンヂエロはフロレンスの市中を歩で大理石の大塊が途上に横はれるを見「此大理石の裡に天使の活躍するを見る」といふた而して彼は此大理石を磨て稀世の至麗なる天使の像を彫刻したといふ事である今人間は恰かも此大理石の大塊の如くである彼には天使に似たる可能性が含まれて居る、此可能性を發揮し來らば彼は則ち神の子である基督敎の人間神子說は現在有の儘の人間を指すに非ずして其理想的可能性を指して云ふのである基督敎界の碩學ジョン、ケヤードが其基督敎哲學たる『基督敎の根本思想（ファンダメンタル、アイデアス、オフ、クリスチアニチー）』中に此事を論じて左の如く謂ふて居る

人が神に像りて造られたりとの意味は人間の理想的完全を謂ふものにして始めよりして然りといふの意には非ず唯靈的生活の終局を謂ふものなり然れども時間に於て後なるものは思想に於

ては先なる者なり、かの人間歴史の現象なるものは人間に原始より存在する一原力の自現に外ならず然り吾人は人間が其原始的狀態に於て完全なりしと云ふの說を否定すと雖然かも其原始的狀態に於て一原力が其作用を始めつゝありしを疑はず、美術上の大作は其觀念が既に始より存在し居りしを證するに非ずや音樂に於て繪畫に於て其音調に現はれ其紙面に現るゝもの皆始めより存在したる觀念の自現に外ならず將來の樹木の觀念（アイデア）若くは完全なる有機體の觀念は既にそが苗芽若くは不完全なる細胞体中に存在す、此の如くにして吾人は小兒は成人の父なりといふを得べく哲學者、詩人、英雄、を形成する勢力は彼が漸く意識的生活に達する曉より教育と試錬とが之れを醒覺せしむる以前より既に已に彼に潛在したりと言ふを得べし、假令教育と試錬との欠乏が此勢力をして醒起せしむるに至らざる塲合にありても人間の偉大なる不現の理想は彼の精神中に存在す……人間の生活と歴史とに特殊の性質と意義とを與ふるものは神に像りて造られたる人性の理想の活躍と其勢力なりとす、果して然らば人間が神に像りて造られたりとは抑も如何なる事ぞや

ケヤードはかくて人間を理想的に觀察して其發達を理想し此理想を提げて人間を說かんとする而して彼は又人間の現實を指示し以て人間神子說を論證するのである曰く

概して之を言へば人間が神に像りて造られたりといふは人間が靈的存在者にして神が無限なる自顯の靈なるが如く人間も神の靈性および其無限性の反映を有するにあり、一見しては人性が無限若くは無限の一要素を有すといふは針小棒大なる矛盾說の如くに見ゆ、蓋し人間は其形骸を以て論ずれば自然界の一小部分にして而かも自然界の制裁を脫する能はず彼は無限の宇宙間に於ける一小元子に過ぎずして空間の一小點時間の一小分を占有するに止まる、變遷死亡は其運命にして自然界の鐵則は彼の如何ともする能はざる所に屬す、物慾、缺乏、刺激、情慾は彼が下等動物と共有する所なり而して彼の意識的生活を組成する思想感情執意すらも肉体の變化若くは腦髓および神經系統の健不健に由て直接の影響を蒙るを見る、かゝる最小脆弱なる人間が無限の一要素を有すと言ふは之れ矛盾過大の言ひ分には非ざるか

然れども人間中には確かに此要素の存在し居るは事實なり、彼には無限てふ言辭を用ひざれば解釋し能はざる一要素の潛在するあるを認む此要素たるや吾人の靈的生活の原動力を形成するものにして總ての智識、道德、宗敎、の根源をなすものなり、こは之れ吾人をして時間空間の制限以上に超然たらしむるもの自然界の智識の主格にして自然界と經驗とに制限せられざるものなり、こは或意味に於ては無始、無造、無碍なるもの時間に於て終始せざるもの外的全能力によりて神に創造せられたるものに非ずして神自身の永遠の意識と生活とより生れたるもの若

しくはそが反映したるものなり

ケヤードが人間の靈性を神に創造せられたるものとなさず之を神自身の永遠の意識と生活とよりうまれ出でたるもの若くは神自身の反映と解するのは普通の有神説に一歩を進めたる所で近世の凡神的思想を利用して有神の哲理を鮮明したるものである、然し乍ら人間の性質中に無限的要素を有すと云ふは之を事實に徴して説明すれば如何なる事であるかケヤード曰く

人間の性質中に此無限的要素を有すと謂ふの證跡に二あり(一)は人間が自ら自己の有限不完全なるを自覺する事なり、蓋し人間が自己の有限不完全なるを知るは彼が全くは有限者のみに非ざるの證據なりと言はざる可からず、若しも人間にして全然有限なるものならば自己の有限を自覺せざるべき筈なり、然かも彼は之を自覺す之れ彼が有する無限性の然らしむる所ならざるを得んや、吾人は實際自己の不完全なるを認識す之れ吾人に存する理想によりて然るなり、果して然らば純然たる有限不完全者が自己の有限不完全なるを認識すといふは自家撞着の甚だしきものと言はざるを得ず、蓋し有限とは有限者以上に存在する存在者によりて制限せらるゝの謂なれば有限てふ智識は同時に無限てふ智識を含有する事明らかなればなり今試みに茲に一因

人ありて未だ曾て其獄室以外の世界を知らざりしとせよ彼は自己の幽閉せられしを自覺せず亦た自己の紲紲にも氣付かざるべきや必せり、之れと同じく人間の意識が全く自己以内に止まらば彼は自己の實際的存在の狹隘有限なる事を自覺せざるなるべし然かも彼が自己の有限を知り亦感ずるの事實は彼が全く有限者のみには非ざるの證據なりとす、(二)は人間が此の如く唯だ消極的に自己の無限性を發露するに止まらず彼は靈的自覺者として積極的に自己が有限を超絶するの能力ある事を自覺することなり、換言すれば彼は有限の羈絆を脱して無限なる目的に自己を合一せしめ得べきを自覺することなり、夫れ人は兩面を有す一面に於ては彼は他の有限物に異ならず則ち無數の物象中に於ける一物象に外ならず而して他の物象を觀察試驗して種々の科學を建設し得る如く彼を觀察試驗して解剖學生理學心理學を建設し得るなり、然れども一面に於ては人と物体とが大なる相異を有するの事實を忘却すべからず詳しく言へば人は單に宇宙の萬象中に於ける一物象のみには非ず彼は自己の裡に自己と萬有とを存在せしめ亦意味あらしむる所以の原理を有す則ち思想の原理と稱するものにして萬有は皆之に關係し科學は皆之を假定す、彼は萬有の主格にして萬有の形成者、萬有を超絶し萬有を領會する者なり云々

かく唯心説の立場から謂へば宇宙ありて後に人間が生れ來たのではない、人間有て後に宇宙が構成せらるゝのである別言すれば宇宙は神と人との關係に

して人を離れて宇宙があるのではない則ち宇宙は人に對する神の顯現である

此事は以下章を追ふて讀過する中に會得せらるゝであらうと思ふ。

世の人はいかなるものなればこれを聖念にとめたまふや、人の子はいかなるものなればこれを顧みたまふや、只すこしく人を神よりも卑つくりて榮と尊貴とをかうぶらせ、またこれに手のわざを治めしめ萬物をその足下におきたまへり（詩第八篇）

爾曹イエスを見ざれども之を愛し今見ずと雖信じて喜ぶ其快樂は言がたく且つ榮光あり

（彼得前書一章十八）

第二章　古今人生の二觀

前章に於ては人間の偉大高尚なる事則ち神の子たる事を略述した、然し未だ人生を解釋したのではない唯之を解釋するの緒を得た丈である。

人間を神の子と觀しても老病死亡や苦痛輪轉がなくなるのではない世界の事實は依然として存じて人生の解釋を我等に迫るのである。

ハインリッヒ、ハイネは世界の苦痛を描寫するに妙を得たる詩人であるが彼が人生問題に對する詩に左の如く言ふて居る。

海の邊りに荒寥たる暗き海の邊りに
一青年は立ちぬ
彼の胸は悲哀に充ち彼の頭腦は懷疑に滿てり
而して彼は其痛ましき唇もて波浪に問ひぬ
「オー人生の謎を我に解けよ
此殘刻なる古き謎を

多くの頭腦は此謎に苦めり
象形文字の帽子を戴ける頭腦も
タルバン及び僧帽を戴ける頭腦も
假髪せる頭腦も其他幾千の
憫むべき人間の頭腦も之れに苦めり
乞ふ我に告げよ人間の意義如何を
人はそも安くより來り安くに去り行くぞや
金色燦爛たる星晨の向ふには何人が生居するぞや」
波浪は其永久の淙聲を更めず
風は吹き雲は過ぎ行くなり
星は其冷靜無頓着なる閃光を放つなり

而して馬鹿者(青年)はそが返答を期待す、

ハイ子の此詩は驚べき巧妙もて人生問題に失望せる人心を描寫したものである、こは苦痛と失望に滿ちたる絶望の叫聲にして思想家の最も高尚なる熱望(人生を解釋せんとの熱望)を冷笑に附し實在の大問題を解かんとする企圖を

愚人の戯業と見做すものである。

パウロ、ケーラスは其『人生問題』(ホエンス エンド ホエヂー)に於て此ハイ子の詩を引用し且つ左の如く言ふて居る

一見しては此詩人の失望は正當なるが如くに見ゆ吾人は地球上に棲息する脆弱なる生物にして吾人の意の如くならざる境遇に支配せられ食物に饑へ殆んど時々刻々吾人を亡ぼさんとする無數の危難に圍繞せられ種々の物慾に燃され希望と失望に滿ち吾人に快樂を與へ幸福を確保すべしと思はるゝ無數の事物を仰望し時間の無限洋上に浮流して吾人の諸慾望を滿たすに足るべき目標を發見する事なし而して人生問題は起り來るなり、此問題たるや人生の重大問題にして之れに對する答辯の異同は必然に人々の全生涯に異同を與ふるの要因たらずんばあらず

人生問題は單に理論上の問題には非ず、こは實際的にして最も重要なる活問題なり何となれば此問題の解釋は吾人にとりては航海者の羅針盤の如く吾人を導き吾人の生涯てふ船の行路を決定するものなればなり

然り詩人が人生問題に失望するにもせよ、吾人はどうしても此問題を等閑に附し去り不可解の裡に葬る事は出來ぬ、蓋し此問題たるやケーラスの謂ふ如く實際重要至極なる活問題である、世には人生問題以外により多く必要と見

ゆる多くの問題がある然し乍ら人生問題程に永久の必要を有する問題はない、數學上の理論を思考する事は數學者には大なる愉快であらう古代の象形文字を讀む事は考古學者の心血を傾注する所であらう細胞上の現象は細胞學者若くは生物學者の注意を奪ひ去るであらう而して孰れも人間の進歩に必要なる事柄に相違ない、然れども人間界に存する總ての問題中にありて人生に重大なる關係を有する諸問題は皆多少人生問題に係はりを有して居る。

人生問題の答は其人の宗教である「此問題に對する汝の解釋は汝の宗教なり」とは眞を穿てるの語である、宗教は確信である人生の意義に關する人の確信であつて世界に於ける人の態度を決定するもの其生活の羅針盤總ての行爲の源泉である。

人生に對して古來二種の正反對なる意見がある一は則ち厭世觀で二は則ち樂天觀である。

厭世觀とは人生の苦痛、不如意、死滅等の事實を觀察して世界を苦界と見做し人生の存在を害惡なりと觀ずる說である、樂天觀とは此世界を福樂境と見人生を祝福なりと觀ずる說を謂ふのであるが歷史的發達の順序より言へば樂天觀は厭世觀に先ちて發生したるものといふを得べきが故に予は樂天觀から叙述する事にしよう。

顧ふに古代にありては人は概ね樂天觀を懷て居たらしい、創世記には神が天地を創造し給ふや、そが出來上りたる時に之れを見給ふて「善き觀たまへり」と記してある而して原人の棲息せる地をエデンの樂園と名けて其樂しき有樣を記してある、かの厭世觀の淵源地たる印度に於てすらも古代は宇宙人生に對して樂天觀を懷て居たのである、其天地開闢說は愛を以て造化の基礎として居る、リチヤード、ガルプは其『古代印度哲學』(フイロソフヒー・オフ・エンシエント・インヂア)に於て左の如く謂ふて居る

古代の韋陀(ウエダ)時代に於ては人生を樂觀するを以て普通の事となしぬ而して後世印度國民を支配し壓服したる輪廻說の如きは其萌芽だも見出す事能はざりき其時代にありては國民は人生を重荷とは感せず却て最上の幸福と感じ死後永久の生命は善人に對する報償なりとしてこれを熱望したり、然るに何時とはなしに此無邪氣なる人生の樂觀を排して個人的存在は死より死に至る苦

難の旅行なりとの悲觀的信仰這入り來たれり

實にリグウェダ（讃誦と譯せらるゝ章陀の部分にして章陀中の最も古き部分）の中にありて最も古代に屬する讃歌の中には自然界の恩惠を歌ふた詩に乏しくない、今試みにオルデンベルグの著書中より其一二を譯出せんに

女神ウシヤス（曉天）を歌ふた詩に曰く

吾らは爾を觀視す、爾愛慕すべき者よ遙けき彼方に爾は輝くなり
爾の燦然たる光輝は天の高きに達し
壯麗なる光波のうちに爾の胸は現はるゝなり
天の光耀に輝ける天上の曙の女王よ」
赤き牡牛等は爾が爾の壯麗もて天上に廣布せる
其兵車をば引き行くなり
爾が夜を驅逐する事宛かも英雄と弓人と
兵車とが其敵を追ひやるに等し」
麗はしき通路は山上に爾の爲めに設けらる
爾無敵の者よ爾は洋海よりして上り來るなり

されば我等の前途に我等を再生せしむる
財寶を我等に持ち來れかし

亦パルヂヤンヤ（雨神）を歌ふた詩に曰く

騎者が其駒を鞭ちて疾走するが如く
彼は其使者たる雲をば進行せしむるなり
獅子の吼聲は遙かの彼方に起り來る
雨神が雲より雨を流下せしむる時」
パルヂヤンヤの電光は射出し風は吹きすさむ
洪水は天より降下し草木は其嫩芽を發生す
總ての生類に生氣は鼓吹せらるゝなり
雨神が地球上に其種子を散布する時」
彼の命令によりて地球は叩頭俯伏し
彼の命令によりて獸類は生命を得
彼の命令によりて美麗なる花々は花咲き出づるなり
パルヂヤンヤよ願くは我等の强力なる防衛たれ」

爾は大雨を送下しぬ而して今止みぬ
爾は荒野をして跋渉するに便ならしめ
我等の食物として草木を生長せしめぬ
然り爾は人々の祈禱に應答したり

かく古代の印度にありては宇宙人生を樂觀して單純なる樂天觀を結んだのである亞細亞の最大古國の一たるバビロニア及びアッシリアに就て見るも太古は亦同じ樣な單純なる樂天觀を懷て居た近頃土中より堀出されたるアッシリアの王室圖書館中に藏せる石牌瓦筒に徵すれば當時の天地開闢說は

元始には草木も無く花實も無く唯無限無量の大水混沌として漲れるのみ時に造物主其大能を以て世界を創造し給ひしが其造られたる物は皆悉く善盡し美極まれり

といふ事である天地開闢說に於て既に此の如しバビロニヤ及びアッシリアの古人が宇宙人生に對して樂天觀を懷て居た事は怪むに足らぬ。

希臘に在てはプレトーが夙に樂天說を唱へた、ヘヤペルンが其『基督教哲學』(フヰロソヒーオブザクリスチアンリヂオン)に載錄する所に依ればプレトーの樂天說は一言以て之れを言へば左の如くである

最善者の事業は最善ならざる可からず又最善ならざるを得ず此故に彼が創造したる世界は其本性に依りて最美最善なるものなり……而してこは、見ゆる神、知らるべき神の像、最大最善最美にして最も完全なるもの唯獨り生れたる天なりとす

プレトーはかく樂天說を唱へたのであるが之れは世界の事實の方から論結したのではなく先づ神の性質を最善なるものと見て此立場から世界を觀察したものである。

支那の古代に於ても樂天觀が獨り人心を支配して居た樣に思はるゝ易の天地觀は之れ則ち樂天觀ではないか曰く「乾元亨利貞」と而して此「乾元亨利貞」なる語を解釋して左の如く言ふてある

彖曰大哉乾元、萬物資始、乃統天、雲行雨施、品物流形、大明終始、六位時成、時乘六龍、以御天、乾道變化、各正性命、保合大和、乃利貞、首出庶物、萬國咸寧、

而して又文言に曰く

元者善之長也、亨者嘉之會也、利者義之和也、貞者事之幹也、君子體仁足以長人、嘉會足以合禮

禮、利レ物足二以和レ義、貞固足二以幹レ事、君子行二此四德一者

君子の德を天德に比し天德を君子の德に擬す、固より樂天の思想である而して坤の德を述べたる條下に「坤元亨」とある、こは亦左の如く解してある

彖曰、至哉坤元、萬物資生、乃順二承天一、坤厚載レ物、德合二无疆一、含弘光大、品物咸亨

然らば天地の德は實に廣大無邊なるもので人生は從て福樂境である、又易に「樂天知」命故不憂也」といふ言がある、樂天の辭益し易より來るであらうと思はるゝ、かの堯帝時代の古老が「含」哺鼓」腹擊」壤而歌曰日出而作、日入而息、鑿井而飲、畊」田而食、帝力何有二於我哉一」と歌ふたのは單純なる樂天主義の面影を偲ぶではないか。

詩經は支那最古の書物の一なるが其中の大雅篇には文王の德を讃美すると共に天德の大なるを歌ふた文句に乏しくない而して上帝が文王を位に任じ給ふた事を歌ふては

皇矣上帝、臨レ下有レ赫、監二觀四方一、求二民之莫一、維此二國、其政不レ獲、維彼四國、爰究爰度、上帝

耆レ之、憎二其式廓一、乃眷西顧、此維與宅

文王が天意を遵奉して明德を布き天の祝福を享受したるを歌ふては

作レ之屏レ之、其蔜其翳、脩レ之平レ之、其灌其栵、啓レ之辟レ之、其檉其椐、攘レ之剔レ之、其檿其柘、帝遷二明德一、串夷載レ路、天立二厥配一、受レ命既固、

比二于文王一、其德靡レ悔、既受二帝祉一、施二于孫子一

詩經の思想は天は仁なるが故に常に仁者に與みすと云ふ思想である武王を誡むるの句に曰く

無レ念二爾祖一、聿脩二厥德一、永言配レ命、自求二多福一、殷之未レ喪、師、克配二上帝一、宜レ鑒二于殷一、駿命不レ易、

李太白が春夜桃李園に宴するの序は淺薄なる樂天主義を言出したるものと見て然るべきであらう曰く

夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若レ夢爲レ歡幾何、古人秉燭夜遊、良有レ以也、況陽春召レ我以二煙景一、大塊假レ我以二文章一、會二桃李之芳園一、序二天倫之樂事一云々

古來哲學者詩人にして樂天思想を吐露し一世を風靡したる人々に乏しからずライブニツク、ミルトン、ロングフエローの如き是れである、而して哲學と

して樂天觀に合理的論據を與へたる者は實にライブニツクである、今夫ライブニツクの論出したる所に依れば現在の宇宙は其昔神の思想中に存在して居た無數の宇宙の中にて一番善い宇宙を撰擇して創造せられたる所のものであるから「世界は出來得る丈最良のもの」であるといふにある、而して彼は世界の光明面を指摘讃稱したものであるミルトンの詩は世界に產出せられたる美妙なる詩歌の一である彼が麗筆を揮ふて人生樂觀の歌を唱ふたのは確かに不朽の價値ありとせねばならぬ、ロングフエロー亦然り彼が椽大の筆は亦滅す可からざる妙味を發揮して居る、然れども記憶せよ人生の樂觀は人生觀の一面なる事を吾人は他面に於て厭世觀の存在する事を忘れてはならぬ、厭世觀とは此世界を以て不完全極まる苦患境となす觀察である。

波羅門教に從へば此世界は苦惱煩悶の巷である宛かも水車の轉々として果てしなきが如く人生は輪廻して苦界より苦界に輪轉するのである而して世界に於ける殆んど一切の事實は一として人生の痛苦ならざるものなし此痛苦を脫

却せんとならば須らく轉廻の鎖を斷絕し自我を滅して梵天に復歸するにありと說くのである印度教（波羅門教）は世界人生を悲觀するに於て有力なる教である。

佛教は其精髓に於て厭世教と見るべきであるが釋迦牟尼出家の由來を記した

る佛書に曰く

一日悉陀太子苑囿に到らんと欲し車を走らせて東門を出で路に一老衰の人を見る乃はち御人に問ふて曰く是れ何人ぞや身短小にして弱く血肉乾涸し頭髮白く其齒落つ唯杖に依て僅かに步むのみ是何人ぞや是唯其一家に限りて然るや或は又是萬生の免れ難き命數なるや御人答へて曰く彼人は老衰せるなり、是即ち萬生必至の常期のみ、吁嗟生類何ぞ無知なるや其少壯の美に心を奪はれて之に誇る是豈に味劣愚癡の至りならずや御者速に車を反せ老衰を免れ難き此身を以て我豈快樂を追求む可んと、太子復一日遊園に到らんとして西門を出で路に於て熱に苦む病人に遭ふ太子再び御者に問ふて其實を知り歎じて曰く嗚呼身體の强健は唯夢の戲のみ此畏る可き形狀を見る者誰か歡樂を思はんやと其後太子復遊園に到らんとし路にて死骸の布に覆はれて運棺車の上に在り親戚朋友の其傍に哭泣するを見太息して曰く痛しい哉此世や唯暫らく住まるのみ若し老病死の苦なからんには其樂如何ぞや我其還らむ哉我當に解脫を得るの道を求むべきなり

と其後太子北門を出で遊園に到らんとし一の乞食を見る即ち出家行者なり其人逸樂を棄て名利を離れ嗜慾を去り修行に凝りて刻薄の生を度る是は己に克んと務むるなり太子曰く是れ即ち可なり我將に世を遯れて出家行者の生を度らん云々

是れ實に人生の深酷なる觀察ではないか紅顏花の如く意氣山を拔く青春妙齡の男女も一瞬にして老衰死亡の秋風に誘はるゝを思へば釋迦の厭世大に味ありとせねばならぬ『無常經』に之れと相似たる厭世觀が記してある

生者は皆死に歸す容顏盡く衰變し强力の者も疾病に侵さる誠に斯を免るゝ者なし妙高山須彌山も劫盡には散壞す大海の深くして底なきも亦皆枯竭す可し大地日月も時至らば皆盡滅に歸せん未だ曾て一事も無常に呑まれざるはなし上は非想處に生れ下は轉輪王と作り七寶を身に纏ひ千子に圍繞せらるゝとも其壽命の盡る時至れば須臾も停る能はず還て死海の中に漂ひつ緣に隨ひて衆苦を受け、三界の內に循環する事汲井輪の如し亦蠶の繭を作り絲を吐て還て自ら纏ふが如し無上の諸世尊獨覺聲聞衆すら尙は無常の身を捨つ、如何に況んや諸の凡夫をや父母妻子兄弟眷屬目に生死の隔を覩て如何ぞ愁嘆せざらむや是故に諸人に勸む諦に眞實の法を聽き共に無常の處を捨てゝ當に不死の門に行く可し云々

又曰へらく「此老病死皆共に嫌ふ可し、形儀醜惡にして極めて厭ふべし少年

の容貌は暫時停るのみ久しからずして悉く咸な枯悴と爲る假使壽命百歲に滿るも終に無常に逼らるゝを免かれず老病死苦常に隨逐して恒に衆生の爲めに不利を作す」と而して『修證義』にも左の言がある曰く

無常憑み難し知らず露命いかなる道の草にか落ちん身既に私に非ず命は光陰に移されて暫らくも停め難し紅顏のいづくへか去りにし尋ねんとするも蹤跡なし

無常憑み難きは人生の事實である實にテーロルが其『聖死』（ホーリーダイイング）の中に言へる如く人生は泡沫に等し而して人は毎日死につゝある然かも世人が此事實を悟らず煩惱火宅の裡に苦患して自ら覺らざるは殘念なる次第である。

ナポレオンは家より起りて宇內に號令するの君主と成た其意氣の揚々たるものあるは當然である然かも遂に喟然長大息して曰く

此世界には幸福といふが如き者絕えて無し唯一の區別は是れのみ曰く幸福なりと稱する人の生涯は銀地に若干の黑星を有し不幸なりと稱する人の生涯は黑地に若干の銀星を有するのみ

子ルソンも乎貧兒より起て世界に名を轟かす海軍大將となり榮達を一身に擔ふ羨むべき位地に昇進した然かも自分では屢慨然として嗟歎すらく

幸福は斯の世になし、有る者は唯憂患のみ嗚呼我は一日も速かに世を辭して逝かん事を欲す

人生の一面は佛者の證言の如く確かに苦患境である而して古來此事實を叙説したる哲學者に乏しからずと雖ヂェムス、スチワード、ミル及びショウペンハベル程的確の議論を以て樂天觀に肉迫したる學者は少い、ショウペンハベルはライブニッツが其樂天説の標語として「世界は出來得る丈最良の世界なり」てふ一語を以て其厭世説の標語とせる學者である彼が『意志(ウヰルド)および觀念(エンド アイデア)としての世界(ワーチア)』は空前の大著にして厭世説を打ち建つるに於て餘蘊なきものである其議論が餘りに痛快巧妙であるから其一節を譯出する事とせんに第二卷第四十六章に曰く

意志（意志とは彼の哲學が天地の本源となす無覺意志の事なり）は無覺の暗夜より生命に醒覺し來りて際限なき世界に於ける無數の個人間の一個人とはなるなり而して此無數の個人や皆共に競爭苦惱誤謬を事とするものにして其狀宛かも不安の夢中に悒惱するが如し而して皆終に其出で來れる無覺中に復歸するなり、然れどもそが無覺中に復歸する瞬間までは其物慾は非常にして其要求は限なし、成就したる願望は他の新らしき願望を誘起して果てしなし世界に於ける

如何なる滿足を以ても其渴望を醫すに足らず其切望を充足し其心胸の底なき淵を滿たすに足らず乞ふ又思へ人の獲得する滿足とは果して如何なるものぞや、こは之れ「存在」てふ苦痛をば少しく長くするものたるの外何の要なきものに非ずや……人生の萬事は地球上の幸福てふものが失望に終るものたるを示し若くは迷妄に外ならざるを承認せしむるものなり而して其然る所以のものは偏に宇宙組織の性質に其根柢を有すればなり、此故に吾等多數の生命が短縮にして悲痛多きは自然なり、かの比較的幸福なりと見ゆるものも實は然らず且つそは長壽てふものが極めて稀なるが如く極めて稀有なるもの唯之れ人を釣るの誘惑物たるに過ぎず

生命は連續せる欺騙なり大小の事柄に於て皆然り、見よ生命は約束す而して履行することを爲さず適ま之れを履行する場合にも吾等が貪求したる目的物が殆んど願望するに足らざるものたるを示すのみ、此の如くにして或時は希望或時は希望の滿足が吾等を欺騙す、其與ふるは唯之れを取去らんが爲めのみ隔りて之れを見れば樂園の如くなるも吾等躬自ら就て之れを望めば唯幻と消失す此故に幸福は常に將來と過去とに存す而して現在は之れを譬へば猶ほ日光燦然たる原野に次廻はさるゝ一小黑雲の如し其前後は光明の眩ゆきものあるも唯其一小部分のみ陰影を以て掩はるゝなり、去れば現在は永久に不滿足なり而して將來は不確にして過去は回復す可か

らず、實に生命は時毎に日毎に週毎に年毎に大小の敵と共に亦失望と錯誤とを有するを見れば生命なるものは吾人の嫌惡に値する或物を含有するや明らかにして何人も之れを誤認する能はず然かも猶ほ生命は感謝すべきものなりと誤解する者あるを見るは吾人の甚だ領解に苦む所なり、之れに反して人生に存する永久の虚妄失望幷びに生命の組織は皆之れ吾等をして何物も吾等の勉力驅馳競爭に價するものに非ず……則ち一切の幸福は虚無にして世界は遂に破産に終はり而して生命は經費を償ふ能はざる事業の如きものなり……てふ確信を誘起せんと企圖するものなり

彼は斯の如く人生を咀ひ去て首尾一貫徹底透徹せる厭世主義を打ち建てた彼は輕妙の筆を振ふて其厭世主義をやると共に人の詩想に訴へて感情の贊助を仰いだ則ちゲーテの名詩を引用すらく

正に然りそは萬物は虚無より出たれば
そが虚無に歸るは當然の事なればなり
去れば何物も創造せられざるの優れるに如かざる也

彼は彌々進で人生の虚妄哀苦零落に充滿して竟に消滅に終るの事實を指摘し

かくて歌ふて曰へらく

去れば老年と經驗とは相携へて
かくも痛ましき探索のいやはてに
彼を死に導き彼をして悟らしむ
彼の生涯は皆錯誤にてありつる事を

彼は尙ほも進でバイロンの厭世歌を借り來りて歌ふらく

汝が樂める快樂を數へ見よ
苦惱なき汝の日を數へ見よ
汝の生涯は如何なるにもせよ
人生は存在せざるの優れるに如かざるを知らん

さればショウペンハベルは斷言して言ふ、此世界は害惡の府にして一も顧慮すべきものなし故に道の本源に透徹する者は當さに生活の念を斷ち且つ人事を棄て生殖を廢し身死するの後種子を遺すこと無く世界の生類をして一燼して跡無からしむる事をつとめねばならぬと。

ヂエムス、スチワルド、ミルは其著『宗教論』（エスセイス オンリヂオン）に於て樂天說に肉迫し大に厭世說の爲め……寧ろ無神說の爲めに……氣焰を吐て居る曰く

自然界は人間を串殺す時に或は彼等を破壞する事宛かも車輪に懸くるが如く、時に或は彼等を拋ちて猛獸の餌食となし、時に或は彼等を焚殺し、時に或は石もて彼等を壓碎して初代の基督教殉教者の觀をなさしめ、時に或は饑餓を與へ凍寒を感せしめ、時に或は毒物の噴出によりて彼等を傷害す、而して是等の外にも種々樣々なる苛酷の死刑を包藏す、其殘忍なること、ニイロ、ドミシアンの奸智と云ふと雖得て企て及ぶ所に非ず

彼は尙ほも進で死者の怖るべき目錄を作製して依て以て自然が慈悲正義てふものに全く無頓着なる所以を論じ暴風疫病の例證を列擧してそが不正と破壞と死とを持ち來たすの點に於て無政府および虐政に比して幾層倍なる事實を證驗せんと試みた、以上は兩極端なる二個の人生觀を畧述したるに過ぎぬ而して此兩說たるや各一面の眞理を現はして居る然し乍から之れ一面の眞理たるに過ぎずして眞理の全豹を穿ち得たるものではない、人生は一面には樂觀すべき種々の愉快と祝福とを有して居るが又一面には悲觀すべき苦痛と呪咀

とを有して居る、單純なる樂天觀は淺薄であるが厭世觀も亦深遠なる觀察として見る事は出來ぬ世界は樂界なると同時に苦界なると同時に樂界である

「苦は樂の種子、樂は苦の種子」とは能くも人事の有の儘を言表したる名句である、人生若し樂のみならば人間の涙は何の爲であるか人生若し苦のみならば人間の笑は何の爲であるか、樂天說の大家ライブニツクも笑て計り居る事は出來なかつた彼には涙もあり煩悶もあつた厭世說の大斗ショウペンハベルも亦笑なきを得なかつた彼は生命斷滅を主張し乍から疫病襲來の時に周章行李を調べて避難旅行を試みたる事實を思へば兩極端の人生觀はともに完全なる眞理として採るに足らぬ事を見出すのである、昔し二人の武士が一の巨像の前後に立ちて前なる武士は其像が鐵製なりといひ後なる武士は銅製なりといひ互に論じたる末決鬪に及た戰半ばにして或人が來りて其像が前半は鐵製後半は銅製なる事を敎へたから二武士は互に無益なる骨折をしたといふて笑

て別れたと言ふ話がある人生も亦此の如く兩面を有す前半は快樂にして後半は苦痛一面は光明の赫々たるものあり他の一面には黑雲暗憺として咫尺を辨せざるものがある、人生の此兩面を充分に認識して而して深遠なる樂天觀を開て行くのが基督敎の人生觀である。

體は一にして多の肢あり一體の凡ての肢は多けれども一の體なり
これ體のうち分事なく諸の肢たがひに相顧み扶けん爲なり、もし一の肢くるしまば諸の肢ともに苦み一の肢たふとばれなば諸の肢ともに喜ぶなり（哥林多前書十二章）

第三章　人生の解釋

前章に於ては人生の兩面に對する樂觀悲觀を叙述し兩觀がともに一方に偏したる僻見なる事を一言し進で基督敎が人生の事實……人生の光明面と暗黑面……に基きて人生の眞相を樂觀する深遠なる樂天說を敎ゆるものなる事に說き及んだ。

基督敎は如何にして人生を樂觀するか基督敎は人生の苦痛を無視するものではない、否充分に認め乍から樂天觀を開て行くのであるから、そこに詳しき理由がなければならぬ。

顧ふに深遠なる樂天觀は之れを兩面から究め到る事が出來る一は人類一体說、他は自我永存の信仰よりして說く事が出來る

人類一体說とは何ぞや、人間を個々別々に離れたるものとせず之れを皆一体と見るの說である此說を明瞭に領會せんと思はゞ先づ我てふものを研究して

見る事が必要である、蓋し如何にして此我てふ者が起り來りしか安くよりして出で來りしか吾人を形成し吾人の人格を決定するものは何ぞや等の問題を解釋すれば人類一体説の眞理は自ら明白となるべしと思はるゝからである

我とは我自身の人格の全体……我意識、我執意、我思想、我希望、我肉体……を指していふもの則ち吾人の獨自一個を謂ふもので、俗眼にては全く獨立し絶對的に離れたる一個人をいふのである、但し此我てふ觀念は極めて複雜なるもので其發達に三段階の區別ある事を記臆せねばならぬ、三段階とは(イ)肉體的自我、(ロ)心的自我、(ハ)理想的自我、是れである。

(イ)幼年の時代に於ては其我てふ意味は唯肉体の我を指して謂ふに過ぎぬ而して此肉体我なるものは種々の細胞より成り立てる組織体にして直接に父母より受け繼ぎたるものである、夫れ遺傳の問題は六ヶ敷問題なれば遺傳の作用を解明する事は困難であるが遺傳の事實が現に存在する事は疑なき事柄である、人の子は常に人にして馬ではない馬の子は常に馬にして他動物を產む

事は殆んどない而して子が親に似る者多きを思へば遺傳の事實は疑ふ可からざる事實である、去れば吾人の肉体が祖先の遺物なる事は言ふ迄もなき所である、勿論親の一代に獲たる所の性質が其子に遺傳するや否やは學者の異論ある所ならん然かも總ての科學者は遺傳が自然界の法則であり微細の點迄此遺傳を發見し得るといふ事に於ては一致して居るバウロケーラスの心理學たる『人の靈魂』に曰く

稀には他人種に近き兒の生るゝ事あり、こは其祖先に之れに類する者ありてそが時に至りて再現したるものとせらる

白人の嬰兒の生るゝや其頭髮は黑色或は蔗色或は赤色にして一定せず何人も其髮色を前知する能はず(但し黑人の縮髮を有する者なし)其理由如何にといふに黑色蔗色赤色は白人の髮色の普通性にして昔よりかゝる頭髮の人々が混合し居るが故に子孫皆其頭髮の孰れかを遺傳して生るゝなり但し遺傳とは父若くは母の摸型が其儘兒に再現するの謂ひに非ず或は此兩者の結合が兒に傳はると謂ふにも非ずして總ての祖先の混成的摸型が新らしき結合をなして再現するものを謂ふなり

遺傳は事實である祖先が獲たるものが其子孫に傳はり子孫は之れを種々に受繼で個人性を形成して居るのである、此故に祖先なしには吾人無く又祖先が曾てありしよりも他の有樣に於て生活せしならば吾人も亦今日の如き有樣には居らぬのである、此意味に於て一個人なるものは祖先が色々に結合して現はれて來たものと謂ふ事が出來る即ち個人は祖先の混合物である

個人の肉体我は祖先の肉体我が種々と新らしき結合をなして再現するものとして扨て此肉体なるものは其出生時に於て二つの遺傳を含で居る(一)は反射運動の遺傳にして(二)は性向若くは性癖の遺傳である、反射運動とは刺激に應じて無意識の運動をなす事である嬰兒が乳房を探がし日光の多寡に應じて眼球の薄膜の伸縮するの類である、反射運動は自動であるから筋肉神經の一定の組織が遺傳し居るより起るものである此反射運動に加へて性向の遺傳がある之れは能力若くは天性と稱するものでアリストートルが潛在の傾向と名けた所のものである、而して此能力若くは天性の發達および其性質如何は個

人の經驗の如何によりては定まるものである此最良の實例は人間には遺傳的傾向なれども動物には缺如して居る言語の能力である、勿論言語其物は遺傳せず然れども言語を習ひ覺ゆる性向は疑もなく人間の嬰兒の特質である、今試みに猿の兒を捕へて全く人間的に教育し人間の動作を教へ人間の言語に其耳を慣らし而して一國若くは數國の國語を教授したりとせんか彼は恐らく會話の能力の初歩だも得ることは出來ぬであらう、然かも人間の嬰兒は遺傳的性向として言語の能力を有して居る而して肉体の或る缺陷の爲め言語を學ぶ能はざる場合にも彼は手樣を以て其思想感情を同儔人類に傳ふるの能力を發達する、然し乍ら唯是れ性向の遺傳にして言語其物の遺傳ではない、英國人は遺傳によりて英語を知て居るのではない小兒が話す言語は其祖先の言語の遺傳したるものに非ずして其境遇と教育の然らしむる所である若し嬰兒の折りに交換せば英人の嬰兒は支那語を話し支那人の嬰兒は英語を話すのである

總ての性向亦此の如しである例せば音樂に對する能力が遺傳的性向なる事がある、然れども此性向を發達し得るや否やは境遇の如何にある、若し夫れが强勢なる心意中に發達せしならばビトーウインの大天才を生ずべくバックの如き大家をも出すべし、ストラウスの如き輕妙なる音譜家も產すべしである而してかく異なれる種々の人傑を產出するのは其個人の受くる敎育の如何に依るので能力其物の性質に始めよりして異同があるのではない

一言以て之を謂へば各個人は祖先の肉体と性向とを受け繼ぎ之れに自己の特質を印しつゝ之れを子孫に傳ゆるものである即ち此肉体と性向との遺傳は個人の生命をして其國民の歷史と結合せしむるものにして個人の全人格が依て以て建設せらるる基礎をなすものであるから前代未聞の發明に誇らんと欲する野心家は宜しく遺傳の理を學びて謙遜の德を養ふべしである畫し人が創作若くは創見と稱するものは其實創見にも非ず創作にも非ずして唯之れ祖先より代を重ねて築き上げたる結果に過ぎぬ但し創見創作に熱中する事は個人

の生涯に必ず一度は起る時期のあるもので言はゞこは精神的の痲疹の如きものである、ヂエンパウロリヒテルの言を以て之を謂へば「こは人の無分別時代に放蕩するが如きものである」而してゲーテは此病氣に對して劇烈なる醫藥を投じた其名高き句に曰く

予が堅固なる體格と行爲とは
父より享けたる遺物なり
予の歡樂たる小說の嗜好と
談話好きなる性質は母より來りぬ
こは今も猶ほ我心に出沒しつゝあり
予の祖母は寶玉を着くるを好みしが
予も彼女に似て虛飾にふけるなり
去れば予に存する複雜なる性質は
唯之れ是等の特質の總計に外ならず
何物か予若くは他人に
創始的なるものあるか

是れゲーテが創見創作てふ精神的疾病を自ら脱却したる時に歌ふたる詩にして彼が躬自ら自己の虚榮心を嘲笑した所の作である彼は自己に特有なる何物もなしと斷じ其有る所の總ては祖先より享受したるものなる事を明言した

(ロ)心的自我とは肉体的自我を離れて自覺せらるるものに非ずと雖自己の有らゆる意識的心狀を統一若くは貫通して知らるゝ所の自覺的生活である、人は種々なる境遇に處して種々なる經驗をなす而して幼より老に至る迄自己の經歷を統一するものは自我の觀念である、幼年の時は肉体の我あるを知りて我の靈的存在者なる事を知らぬ觀念の發達するに從て我の靈的存在者即ち人格者たる事を認識するに至るのである

顧ふに人格者なるものの特質は自己の生涯を統一して之れを自我の經歷として見る事能はざらんか心理學者は之れを「人格の疾病」と稱する

世に人格の疾病なるものが屢見受けらるゝ、或人は過去の記憶を全く失ひ或人は其一部分を失ふて仕舞ふた例に乏しくない斯の如き人々は過去の生涯を統一する事能はざるが故に過去の自己は消せ去りて自我の範圍が甚だ狹く成て來る、亦時としては二重人格と稱する精神病ありて二個の自我が一身に於て更る更る現はれて來る例がある而して此二個の自我は各獨立したる自我にして雙方とも何の交渉もなく亦何の知る所もないのである、此著明の例としてリボーが其『人格の疾病』(デゼースオフパルソナリチー)中にチャレントンの一婦人の事を記して居る

此一婦人は毎日其人格生活を變ずる其性すらも變ずる、一日は皇族の一少女となり一日は皇帝の婚約者とり一日は平民の一婦人となり一日は百姓の妻となり一日は男子となる而して各何等の記憶をも留めぬ

マクニッシが『睡眠哲學』(フヰロソヒーオフスリープ)中に擧げたる例に一婦人の記憶に富み思想に滿ちたる者があつたが此婦人が偶然思はざる時に熟睡する事がある而して其醒覺し來る時は全く別人となる即ち無學文盲の一婦人と成て目醒めるのである彼女は讀み書き算術を學んで初等の智識を得ねばならぬ然し數ケ月の後彼女が熟睡より醒覺し來る時には先の記憶に富み思想に滿ちたる婦人として醒めるのである而して彼女は自己の二重人格に就て意識する所はない二個の人格は全く別々に働くのである

此例より稽察すれば自己の生涯を統一して之れを自我の經歷として見る事

(即ち自我の同一)は腦髓の組織若くは形狀に關係ある事は明白である然らば心的自我の生活も亦之れ肉体と性向とが祖先の遺傳なるが如く祖先よりの遺傳に依るものたるは論なき所である然れども心的自我の要素は重に社會的生活から來るものである此故にパウロケーラスは其『人生問題』に於て

吾人は肉体と性向とを組織する要素に一も創刱的なるものなきを發見す、吾人は吾人の人格てふものの成分を分解して其依て出で來れる本源を知る事を得るや如何にして小兒の性格は形成せらるゝや如何にして其傳承的才能は發達せらるゝや

と言ひ、そが社會生活より來るの理を論じて教授ウェルニケの人の人格形成に關する說を引用して居る其言に曰く

兩親の家族的生活は疑もなく小兒の上に而して其靈的人格の上に嶄然たる性質を印す個人が有する人格の意識は(本能と同一なる法則によりて)彼が生長し亦生活する社會の境遇より起り來る總ての性質を包含す、

然り個人の心的生活を形成するものは社會的生活を外にして個人の心的生活なるものが何處にあるか、今夫れ個人が小兒時代に於て學ぶ言語は人格の形

成に必要なる要因と見ねばならぬものであるが教授ウェルニケは此事を論じて左の如くいふて居る

成人――個々別々の個人の謂に非ずして吾人の精神的祖先たる無數の代々の成人――の總ての智識は言語とともに一定の論理的順序および按排によりて小兒の腦髓に運搬せらる……

……種々の整然たる論理的思想も有ゆる精微なる心的動作も其根柢の言語の中に有するものなること疑ふ可からず而して此言語たるや吾人が其儘に傳承する所のものなりとす

言語學者に從へば言語は即ち思想にして思想は即ち言語である、言語を離れて思想なく思想を離れて言語はない果して然らば吾人の思想は言語にして吾人が幼時よりして傳承したるものではないか、果して然らば吾人の人格は亦社會の產物として見る外はない吾人の性格も習慣も思想の形狀も吾人の創刱に非ずして傳承に成るものである、若し全知者の眼を以て見んか吾人の心的生活は一々其因る所があるに相違ない此理を知らずして自己の多能多智に誇り若くは自己の獨自一個を高調せんと欲するのは誤謬である

ゲーテは元氣に滿ちたる人物にして其青年時代にありては創見家を以て天下

に名聲を博せんと試みたる人であるが思想熟するに至て此迷夢を一掃して彼の心的生活が毫も彼に特有のものなく單に社會傳說(フラデシヨン)の產物に過ぎざる事を公言して居る別言すれば彼の人格が過去の產物たるに過ぎざる事を明言して居る曰く

小兒が熱心もて四圍を見廻す時期にありてや
彼の住所は父の家にあり
彼の耳が言語を領解し始むるや
彼の生國の言語は彼に習得せらるゝなり」
彼自らの經驗は如何なるにもせよ
彼が聽く所のものは遙かに經驗の數に超過し
既成の摸範は彼を感化するなり、彼は强健に生長す
然かも世界は既に出來上り一指の加ふべきものなし」
一事は褒賞せられ他事は大なる稱讃を博す
彼は亦嶄然一頭地を拔かん事を希ふ
然かも彼が勞作し阿諛し戰鬪するは無用のみ

何となれば總ての事物は已に書かれ(大成し)居ればなり」
否更に惡しそは已に印刷して現はされたり
青年は唯暗示を得るに過ぎず
彼は漸次に彼自らが先きに生存したる人々と
異ならざる者なるを悟るのみ

かくゲーテは社會的生活を以て人格的生活の出所となし世に創刱的と稱すべきものあるなしと見做て居るが彼は他の詩に於て同じ思想を歌ふて居る曰く

過去の傳說(フラデシヨン)を脫せんことを欲し
かくて創始者たるを願ふか
かゝる大事業が予を失望せしめし事如何計ぞや
自創者たるの名譽は大なるものなるべし
然かも予は自白す予は不思議にも予自身が、即ち傳說(フラデシヨン)なることを

ゲーテに從へば自我なるものは自我として認むべき特質は殆んどない皆過去の傳說の結果(即ち社會的生活の結果)に過ぎぬ去ればゲーテは以爲らく自我

の眞相は自我獨存の妄想を一掃して始めて發見せらるべきものであると

(八)理想的自我、理想とは一面より見れば缺乏不滿足の感である缺乏不滿足の感は不便極まるものであるが、然し之れが人間を進歩發達せしむる刺激である饑餓は有感物をして四圍を見廻はさしめ亦先見豫想を得せしむる刺激ではないか「饑餓は智能を鋭敏にす」と云ふは實である、總ての生物は生存の必要よりして其智能を開發する而して人間の場合に於ては此缺乏不滿足は彼を刺激して將來の進歩を促成する動力である、リユーケルト曰く

理想は各人の心を靈動せしむ

理想にして實現せられざらんか靈魂は毫も平安なる事能はす

未だ所有せざる事物を所有せんと欲し、未だ達せざる所に達せんと仰ぎ、未だ知らざる所を知らんと望み未だ成就せざる所を成就せんと熱するは人心の活動の大部分を占めて居る、之れ人間に進歩ある所以である、但し其根源を尋ぬれば人間の理想なるものも亦祖先と社會とより各人に傳はり來りしもの

たるや疑なき所である實に如何なる時代にも理想程に大なる注意を以て青年の精神に印象せられ培養せらるゝものはない、其理想が道德上の理想にもせよ智力上の理想にもせよ感情上の理想にもせよ實に大なる盡力を以て教養されつゝあるを思へば理想が祖先と社會とに密接の關係ある事は明白である

理想は人間中に於ける最も强力なる最も抵抗す可かちざる勢力である之を譬へば猶ほ植物の種子將に發芽せんとする芽生、春時の嫩枝に比すべしである一哲人曰く

細小なる根が巖石を破碎する如く人の熱望宗教的熱望――にもあれ愛國的熱望にもあれ若くは個人的なるものにもあれ――は彼を刺激して有らゆる障礙に打ち勝ち其生命すらも抛つに吝ならざらしむるなり

見よ堅固なる城壁が其間隙に生長する樹木の爲めに崩されて仕舞ふではないか理想は生命であるから如何なる障礙にも打ち勝ちて自己を實現せずしては止まぬ

理想に種々ある、科學上の理想發明上の理想實世界に於ける成効の理想人生の愉快を增進し苦痛を減退せんとの理想美術上の理想社會改革の理想の如きである、此理想を實現するに於て人は世の先進者先覺者と成る事が出來る、然し此理想たるや決して其時代と飛び離れたるものに非ずして其時代に相當はしき理想であるケプレルは所謂ケプレルの三則を發見した之れケプレルが先覺者として誇るに足る所であるが然し嚴密に之を謂へば彼は前時代よりして彼に傳來し來れる智識を以て此眞理を發見したるに過ぎぬ、既に道は彼の前に開かれて居た彼は唯其行くべき道を行けるのみである、かの發明者と稱せらるゝ者も實は發明者に非ずして發見者である、車輪、針、槓杆、時計、蒸汽機關の如き皆發見である之れ皆前時代よりして少しづゝ考へ來たものが時に至りて熟したのである

詩人は最も創刱的なる者最も獨立したる天才の如くに見ゆる然し詩人の成効は彼が言出する感情が民衆の心胸に其反響を發見し得るや否やによりて定まるのである民衆の感情と飛び離れたる詩人の作は失敗に終るの外はない詩人の詩が民衆の感情を言出し各人の心に朦朧として存在するものに一定の形狀を與へたる時に民衆を感動せしむるのである去れば詩人は社會人心の感情の化身と稱する事が出來る

人は其祖先の產物として生存を始め教育（社會的生活）によりて其心理的生活の要素を吸收し遂に理想を追ふて之を實現せん事を勗むる、人は之れを離れたる個体として考ふる時は無意義のものである彼は總てものを祖先と社會とより受け繼で居る其理想とそが實現力すらも亦彼自身の產物ではない彼は前代の熱望を新舞臺に運び出す役者たるに過ぎぬ然し乍ら彼にして其享受せる能力を運用するに務めんか彼自身の幕は其處に開かれかくて自己の役割を盡し得るのである

人は己に祖先と社會の產物なれば個人は祖先の化身社會の縮寫と見る事が出來る、祖先は個人に再現し社會は個人として現はるゝと謂ふても差閊はない

此の點より見れば人類は則ち一体ではないか、人類社會が個々別々に離れたる個人の集合體なりとするは大なる誤謬である各個人は廣き意味に於ける社會生命の一部分である物質分子が相依て一の固体を形成するが如く古今東西の個人が相依て社會的生命なるものを組織して居る唯人間の場合に於ては各分子が皆自己の意識を有して居るの異同があるに過ぎぬ、去れば近時人類一体の理は哲學者の齊しく高調する所と成て近世の大思潮の一をなして居る

パウロケーラス曰く

絶對的意味に於ては獨自一個なるものある事なし、吾人は明白に亦本來分離せる生物に非ず、より大なる全体の一部分なり此大なる全体の中にありて過去併びに將來に亘る吾人の運命は抱擁せらる、個人に關する舊見を脱せざる人には自己の生命と他人の生命とを分離する境界を破壞するは怖ろしき害惡と見へん然れども眞を言へば吾人の靈性が吾人の個人的存在に限らるゝものに非ずして遙かに之れを超越する靈的生活（社會人類の昔よりの生活）に合体するものなる事を知るは吾人をして吾人自らは自己の思惟するよりも無限に大なる者たるを知らしめ非常なる喜を吾人に感ぜしむるものなり云々

人類は一体なるが故に古今の聖賢が倫理の極致とする所は人類全体と自己の一致である、彼等が狹隘なる自我の境界を脱して國家大、社會大、人類大の人物たるべしと勸むるのは人類一体の事實を隱約の間に認めて之れを倫理に實現せんと理想したものと思はるゝ人類一体は人の心的生活の事實にして同時に倫理の理想である人類の發達は肉体的自我の小範圍に始まり次に自己の人格者たるを意識し進で自己を人類と合一して自己を人類の爲めに捧ぐるのが發達の終局と言はねばならぬ

上來述べ來れる所によりて之れを見れば個人は個人に始まりしに非ずして其來るや深遠である、我は我のみの我に非ずして祖先と社會との産物である思想も感情も理想も我自身すらも祖先と社會の遺物である而して此我なるものは過去の連續のみならず亦將來に對して祖先が我等に有すると同じ關係を有して居る此を以て人類は一体である此人類一体の理よりして考ふる時は人生に存する苦痛は人類てふ大自我を向上進歩せしむるの刺激劑として感謝すべ

きものたる事が解せらるゝ、かの厭世觀は個人を個々別々に引離して其立場より宇宙人生を觀察するが故にこれの如く自然界の害惡を喋々し、ショウペンハベルの如く人生を呪はねばならぬ樣になる、抑も個人を別々に引離して考ゆるのが間違である人は決して離れたるものではない古今東西を通じて一体なる者である此一体の立場よりして宇宙人生を觀察すれば苦も我が爲め死も我が爲めである自然と人生に存する苦痛害惡は一さして大自我の發達進歩の爲めならざるはなし而して我なるものは此大自我が暫らく形をなして我として世に現はれたるものなる事を會得せば人生は樂觀すべきの理由がある

ではないか

從來の厭世家も樂天家も餘りに個人主義の思想に偏して居る其言ふ所皆個人の立場を基礎として居る然れども嚴密に言へば世に個人的なるものはない所謂個人的生活なるものは原始時代より始まれる人類の靈的生活の一權化に過ぎぬ此靈的生活を外にして一個人の意義安くにありやゲーテ曰く

人は言ふ「汝自らを認知せよ」と自己の認識は高き價を要す

蓋し予にして自我を認知せんか「自我」は直ちに消失し去らざる可からざるなり

（自我の特質として見るべきものなしとの意）

人類一体の眞理を提げて宇宙人生を達觀せんか自然界の苦患禍殃は幸福榮利と同じく人間進歩の要具たるを知るのである、ヘアブルンは其『基督教哲學』（フヰロソヒーオフアクリスチアンヒ、デオン）に於て自然界の害惡を論じて左の如く結論して居る其大意に曰く

自然界の破壞的動作を抑止し之をして平穩無事ならしめば人類の進歩と改善とは停止するなるべし……若しも暴風にして隨意に服從せしむるを得たらんには若しも電光にして任意に其進路を防止するを得たらんには吾人は海上に於ける破船若くは其他の慘事を聞く事なかるべしと雖然かも驚嘆すべき建築術と巨船を建造する大膽なる企圖と大洋を街道として人類を豐富ならしめ結合せしむる通商とは之れを見る事なかるべし、吾人は人の人格を傷ふものが慈善に如くものなきを知る吾人にして若しも怠慢者を待つ事勤勉者と同一ならしめば無思慮者に供する事思慮者と同一ならしめば浪費者に與ふる事節儉家と同樣ならんには人間の退歩は其結果として必然に生じ來るべきに非ずやかくの如く人間にして常に自然界の害惡を免かれ得たらんには彼は其人格を傷損せらるゝなるべし……自然界の

嚴酷は人間を敎育するものにして而して敎育は人間にとりて最上至尊のものなりとす云々

フリントが其「有神哲學」に於て生物界の苦痛を論じたる所大同小異である

曰く

苦痛は動物を驅て奮勵努力せしむる刺衝力なり而して諸能力が練磨せられて發達するは偏に奮勵努力に由るものとす各種の肉慾は缺乏を感ずるに起因す而して缺乏を感ずる事は一種の苦痛なり動物もし肉慾てふものなく亦肉慾に由て起る活動なくば如何ぞや其中なる許多の者が今然るごとく尙ほ果して美麗なるべきや兎もし怖を懷かずんば豈今日のごとく快捷ならんや人類もし此世にありて毫も鬪ふ者なくんば豈今日の如く活潑智巧技術に富み文明に進まんや苦痛は動物の發達を完全ならしむるに與りて力あり是れ善良なる目的を有す旣に善良なるが故に此目的たるや苦痛を之れが手段に用ゆるを可とす

是れはフリントが生物を個々別々に離れたるものと思惟し乍ら然かも自然界を樂觀せんと欲してなせる議論であるが彼は論歩を進むるに到りて個体は全体の一部分てふ眞理に到着して左の如く言ふた

「一切は唯一箇の絕大なる全体の衆部分なる而已」之れ許多の黯澹たるが如き事實の上に懇切快活なる光明を放つ所の眞理なりとす、請ふ試みに之を以て死をさへも照し見よ死自身すらも

此眞理の光に照らして見なば之を仁惠の證據ならずと言ひ得るか我は然らずと思ふ動物生産の法則は動物死亡の法則をして必要ならしむ若し動物の幸福をして最も多量ならしめんには是非とも然らざるを得ざるなり若し今よりも死少なかりしならば又今よりも生物少なかりしなるべし而して其在りたる生物は必ず今よりも貧しく且つ賤しかりしならん自然界の善生多產、動物種類の繁殖、世代の相續老少の同存等は一に死を以て其可能の要件とす而して是等の諸事は動物が幸福の量を莫大に增す者なること何人も道理上疑ふことを得ざる也

生物進化の理より見れば生物界の缺乏、生存競爭、競爭の苦難及び死は生物の諸の種類を形成し改良し裝飾する所以の手段なる事學理上疑なき事實であるから若し個体獨存の謬見を破し個体即全体、全体即個体の達觀をなして自然界と人生を査察せんか「萬事皆善し」と謂はざるを得ぬ

それ人は旣に草の如く其榮は凡ての草の花の如し草は枯れその花は落つ然れど主の道は窮なく存なり爾曹に宣傳ふる福音は乃ちこの道なり（彼得前書一章二四、二五、）

なんぢら心に憂ること勿れ神を信じ亦われを信ずべし（約翰傳十四章一）

第四章　人生の解釋

前章に於ては人類一体の理を述べて人生の苦患禍殃が樂觀すべきの理由ある事を說いた之れ一面の觀察法なれば本章に於ては自我永存說の方面より觀察したいと思ふ

自我永存說は吾人が前章に述べたる人類一体說と矛盾する樣に思はるゝ亦實際人類一体說を把持する學者輩は概ね自我永存說を人類一体說と相容れざるものとして排斥する、然し人類一体說が明白なる眞理なるが如く自我永存說も亦古今の大假定であるから必ずしも矛盾するものには非ざるべしと思ふ否吾人は此兩說は矛盾衝突すべき性質のものに非ざるべしと信ずる今其理由を述べんに

自我永存說とは所謂靈魂不滅の謂なれども之を靈魂不滅說と稱せざる所以は古今の靈魂不滅說は靈魂を一の個体即ち死後宇宙間に浮遊する一實体と見て

其不滅を唱ゆるもので靈魂の見解に於て吾人のと根本的の相違があるからである、靈魂を肉体の中に住する實体なりと考ふるは二元說である靈魂を肉体の作用に歸するは唯物論である此唯物論と二元說とは吾人の採る能はざる所のもので共に淺薄なる誤謬に過ぎぬ

吾人は心身不二、靈肉一体を唱ゆる、心身不二靈肉一体とは肉身を離れて心靈なしとの意に非ず肉身と心靈とがともに靈的のものにして靈的大實在の顯現なりとの謂である、吾人の見る所を以てすれば肉体は無形の大靈力が格段なる人格として現はるゝものであるから本來は無形なものである、生死の現象は此大靈海の波上の變化に過ぎぬ亦「個々の小我(個人)の生死は大我(在)の波上に浮べる泡沫の出沒」に譬へても差閊はない、かく言へば

は決して凡神論者ではない予の見解が凡神論と異なる所は凡神論

後其自我の存在を認めず死は即ち滅と考へて居るに反して予は

我の裡に自我の意識を留めて居るものと思惟する、予は世の

絶對(實在)は純然たる平等無差別のものなりとは思はぬ寧ろへゲルたる如く絶對中には種々差別を包有して差別は其儘永久の性質を有ものと思考する去れば個人は其大我に歸るの時必ずや自我の意識を保居るに相違ない英國の大科學者サーオリバーロッヂは予の如き唯心論者ないが然し自我と實在の關係に就て言ふ所は予の意を得たるものがある以爲らく

人は實在の海面に浮べる泡沫のみ而して其死するや實在中に復歸す唯だ人は其復歸したる後も自己の意識を失ふ事なかるべし

彼が『信仰の實質』(サブスタンスオフフエース)中に告白したる所は最も吾人の言はんと欲する所を言ふて居る其言に曰く

個々の心意が普遍なる心理的基礎若くは合同を有すとの事則ち個人は皆「世界心」の片々なりとの說に關しては中々に言說すべきもの少からず然し乍から大洋中の小波若くは氷塊の比喩は個人的存在の消失を意味するものとなす可からず……大洋の比喻は個人的存在が平等の大洋中に吸收せらるゝ事即ち涅槃寂滅を暗示するものとせらるゝが故に予は他

の比喻を用ひん、ヂエッリー(菓實を砂糖にて煮て汁となしたるもの)にありては各部分は全体として共に結合振蕩せらる然れども液の各小嚢は個体として區別せられ總ての他の個体と接觸し乍から夫れ自身の組織と色とを失はず

ロッヂは科學者の立場に立ち乍から自我永存の道理ある事を主張し實在と個人との關係を糖汁の全体と部分とに譬へたるは吾人が絶對中に種々の差別を包有して居ると唱ふるのと殆んど同じである

ゲーテが祖先と社會の感化を高調したる事は吾人既に之れを述べた然し彼は亦自我永存に就ても大なる確信を有して居た曰く

予や未來の生命を疑はん事に於ては世界中蓋し最後の人たらん歟、否予はロレンゾの如く自ら敢て言はんとす之れを信ぜざる者は今生に於てすらも既に已に死したる者なりと予は堅く信ず吾人の靈魂は不朽性の存在を有し其働や永遠より永遠に至ること宛も太陽の如し毎夕沒すとは見ゆれども其實は萬古不易なる光榮を以て永遠に輝きつゝある者とす、

肉体を陋塊なる物質と見るから唯物論も起り二元說も起るのである之れを宇宙に存在する一大靈の一時の顯現として見る時は唯物論の困難もなく二元說

の必要も見ない其所謂死滅の時は即ち大靈中に復歸するの時にして個別の自我として發達したる意識は永く大我の裡に其記憶を留むるに相違ない否啻に記憶を留むるのみならず個別の自我の意識も其儘遺るべしと思はるゝ蓋し個別の自我は本來絶對者(實在若くは大我)の中に存在する差別が時に到りて祖先と社會を要件として發現したるものであるから、そが一度發現したる以上は猶ほ更其差別を保存するであらうと思はるゝ

唯物論は心靈の現象を說明するに足るものではない心靈の現象を物的作用と見るの困難は物質を心靈の作用と見るの困難に幾百倍して居る、唯物論とは其文字の示すが如く宇宙萬象人間萬事を唯物質の結合及び作用に歸するのである、宇宙萬象の事は偖て置き人間萬事すらも之れを物質の作用と見るは極めて淺薄である

心的現象の最も單純なるものは感覺である、此感覺なるものは所謂身体の神經の末端に受くる刺激が腦髓に傳はりて其處で感覺てふ一種不思議なる心的

現象が起るのである此心的現象に先ちて若くは同時に腦髓中の物質に一種の波動若くは變化のある事は疑なき事實である、然し腦物質の波動若くは變化が如何にして感覺と成るやは之れ心理學者の大疑問である、蓋し感覺は物質の運動とは全く其性質を異にして居る、感覺は感覺にして運動に非ず運動は運動にして感覺ではない若し運動が感覺の原因なりと言はゞ運動が感覺に化するのであるから感覺の起る時は運動は止まねばならぬ筈である、例せば物質界に於て運動が熱と變じ熱が電氣と化し電氣は亦熱とも運動とも成るが如く神經の運動若し感覺と化するならば感覺の起る時は神經の運動は止まねばならぬ少くとも運動の分量を減ぜねばならぬ筈である、然るに心理學者の實驗に依れば腦神經の運動の起ると同時に感覺が加はるので感覺起ると雖も運動の分量を減ぜぬとの事である、換言すれば感覺は腦神經の運動に伴ふものにして原因結果の關係ではない此根本的の相違は唯物論が極めて單純なる心的作用すらも說明するに足らぬ事を證明するに足るものである

ライブニッツは腦髓の運動と智覺とが別種のものなる事を論じて左の言をなして居る曰く

吾人にして若しも思想感情智覺を製造する器械を想像し其各部分の割合を引延ばして其出入に自在なる事水車の大なるが如くならしむるも吾人は唯衆分子が互に撞推するを見るの外何物をも見ざるべく而して決して智覺の出所を説明する事能はざるべし

パウロケーラスも其『人生問題(ホエンスエントホイデー)』に於て同一の事を論じて左の如く言ふて居る

古風の哲學者は物質と運動とによりて感覺を説明せんと試みたれども然かも彼等は痛ましくも失敗したり、カバニス及びカールヲクトは思想は腦髓の分泌なりとなし之れを肝臟と腎臟の分泌物に比しぬ、若しも思想が腦髓の分泌ならば化學者は思想を分解するを得べき筈なり而して吾人は之れを硝子詰にし又鑵詰となして雜貨店に賣買するを得べき筈なり、然かも事實を言へば感覺智覺及び思想即ち一切の情感は全く物質には非ず物質と感覺とは二個の殊別なる觀念なり云々

ハックスレーは稀有の大科學者にして炭水酸窒素等を抱合せしめて生命を自

發的に生産せんと試みたる學者であるが彼すらも其『生命の物的基礎(フイヂカル ベーシスオフ ライフ)』てふ論文中に唯物論の立ち難きを明言して曰く

宇宙には物質と勢力と必然の三者のみにして他に一物も無しと主張する如き唯物論は全く妄斷不當の言にして其根據なき事神學上の獨斷説に讓らず

かく唯物論は極めて單純なる心的作用――感覺――をも説明する事能はざる妄斷不當の説なりと雖然かも幾多の眞理を含有して居る事は許さねばならぬ、肉体の健不健が精神の健不健に直接の影響を及ぼす事は昔より知れ切たる事實である腦髓に異狀ある者が白痴で腦髓の一部に缺陷ある者が或能力を缺失する事も疑ふ可からざる事實である精神病者は常に腦病者にしてヒステリー患者も亦腦髓の疾病に外ならざる事も今日病理學者の認むる所の事實である而して腦髓の大小が亦人の智愚を別ち社會の文野を定むる所以の重なる原因たる事も生理的心理學及び人類學に關係する者の公認する所の事實である

下等動物に就て稽察するに其神經組織の不完全なるものは其不完全なるの度に於て其感覺作用も不完全であるに反してそが組織の完全に近づくに從ひて其感覺作用も完全に近づくのである、有脊動物中に於ける四大區別は魚類爬蟲類鳥類哺乳類であるが此四類は其腦髓の發達の程度を異にし從て其心的作用の上に發達の相違を現はして居る例せば魚は其腦組織の複雜なる事鳥に如かざるが故に鳥の如き智力を有せぬ亦鳥は哺乳動物の如く複雜なる腦髓を有せざるが故に其智力は哺乳動物に及ばぬ哺乳動物中にありても腦量の相對的(クレーチーフ)大と複雜の程度の如何によりて其智力に各差等があるのである人類界にありても野蠻人の腦量は比較的に少なく文明人の腦量は比較的に多い同一人種中にありても智愚賢不肖の差は腦量の多寡に其原因を歸する場合が少なくない身心の關係はかく大体に於て親密なるのみならず微細の點に於ても親密なる關係を現はして居る、視覺神經の病失は即ち視覺の消失ではないか聽神經の破壞は即ち聽覺の壞滅である酒若くは亞片を飲むの結果が精神作用に異狀を

呈する事亦人の通常見る所の事實である而して現時は腦髓の各部分が各其職分を異にするといふ說が專ら行はれて居る則ち腦髓の部分の異なるによりてそが營む心的作用が異なると謂ふ說である例せばケーラスの『心理學』に從へば言語、音樂、言語の記臆、人の記臆、詩、摸倣、宗教等、各其中樞を異にして居るらしい故に其中樞の孰れかに疾病あらば其關係する能力に疾病若くは不能を來たすのである其著るしき例ごして言語不隨病の事が詳しく記るしてある言語不隨病とは言語を話す事若くは書く事の能力を失ふ厄介なる病氣である其中樞は腦の外膜の一小部分である此部分の損傷は如何なる場合にも言語の攪亂若くは言語の忘却を來たすのであるから心理學者は此部分を「言語の中樞」と稱して居る然し左利の言語中樞は右腦の方にあり右手の言語中樞は左腦の方にあるのは不思議なる事實である、予が前章に擧げたる二重人格の例は正しく腦髓に二個の自我の中樞が出來た爲めである事を證するに足るのである、例へばアルフレッドビネットが其『二重意識(ダブルコンシオスネス)』中に引用したる例證

にいふ

アザム博士の面白き觀察は一顧の價値を有すそはフエリダといふヒステリー患者の事なり、此婦人は二個の連續せる生活をなす、而して二者は異なれる性質を有し亦異なれる記憶を有す

こはアザムの『二重良心』(ダブルコンシエンス)中より引用したのであるがビネットの說にては此二重の意識(寧ろ人格)は腦髓中に二個の中樞が形ち造られて居るに因由するエムリボットが其『人格の疾病』(デシース オフ パルソナリチー)中に枚擧したる幾多の事實は腦髓の疾病が人格の疾病に終るものなる事を證し得て餘蘊なきが如く感ぜらるゝ

がく觀じ來れば心的作用なるものは物質の運動とは全く其性質を異にすれども然かも亦肉体の狀態と密接に相關係する事を見る、去れば心的作用を全く物質の作用と說き去る事も出來ねば亦全く無關係なりと論出する事も出來ぬ此故に獨逸の碩學ブントは心物併行說を唱へた、心物併行說とは物と心とは全然其性質を異にするものなれども心の働くには必ず物の運動の之れに伴ふを要すと說く一種の二元說である例せば腦髓中に一波動若くは一變化ある時

に之れに伴ふて心の作用があり心の作用がある時には夫れ相應に腦髓中に一波動若くは一變化を生ずると說くのである、勿論心身の關係は親密であるから必ず相互に其樣なる現象があるであらう、但しブントは其孰れをも原因となし結果と見做す事は出來ぬと考へて心物併行てふ二元說を結ぶに到たのであるが然し唯物論が淺薄なるが如く二元說も亦淺薄の謗を免かるゝ事は出來ぬ此故にヘツケルは其『宇宙謎』(ウツヴン オフ ザ ユニバルス)に於てブントを批評否誹謗してかく言ふて居る

ブントは一千八百九十二年を以て『人間及び動物の心理學』の第二版を出版したり……

……彼は其序文に曰く予は此書に於て第一版の根本的誤謬を除去したりと蓋し第一版は一元的唯物的なりしが第二版は二元的心靈的なり、即ち心物併行說にして總ての心的作用は物的變化(肉体の變化)と伴ふものなりと說くなり然れども此說たるや心身を全く異なれる別物なりとなす二元說に外ならず世の俗輩は見て以て欣喜雀躍し自家の俗見に對して大科學者の大賛成を得たりとなす……然れども予を以て見ればブントの變說は彼が老衰の結果のみ少壯の鋭氣何時しか沒して腦髓の漸次衰弱したる結果のみ云々

二元說は或は心身の現象を說明するに都合よきものならん然れども二元說は到底心身の最後の解決ではない、人心は心身を全く異なる別物と見て其相互關係を知るのみにて滿足するものではない、どうかして兩者の根本となる一大原理を發見し此兩者を統一して一元の解釋を試みたいとするのが人智の要求であるバウロケーラスは其著『根本問題』(フンダメンタルプロブレム)に於て人智の此傾向を言出して曰く

認識の性質は統一にあり而して認識によりて吾人の智覺概念および觀念は智識てふ一致体に組織せらるゝなり、吾人は種々の現象を統一する一概念を探求するを禁ずる能はず吾人の心意は少くとも吾人が之れを發見したりと感するに非ざれば安易なる事能はず人心の傾向はかくの如くにして一元哲學――宇宙の諸現象並びに物体の全体を單一なる普遍法若くは唯一の包容濶大なる原理によりて領解せんと欲する一元哲學――に導き到るものなり然り人心は本來一元的に形成せられたるものなり

唯物論は淺薄にして二元說は最後の解決に非ずとせば吾人は唯物論の淺薄を避け二元說の姑息を脫して眞乎の一元哲學を發見せねばならぬ、吾人の見る

所を以てすれば心物は共に一大理性の發現である靈的大實在の顯現である唯物論も二元說も共に肉体を目に見るが如き陋塊なる物質の集合体として見るから間違た見解を固執する樣に成るのである、有態に言へば世に物質と謂ふものはない人が物質と稱するものは實は一大理性の發現靈的大實在の顯現に外ならぬ、其本體を謂へば勢力に過ぎぬ宇宙間には大實在の外に物質と稱すべきものは何物もない而して人身なるものは大實在の胸間に潛める小自我(個人)が祖先と社會とを緣として世に顯現し來る時の暫假の假体に過ぎぬ若しくは身體は小自我と外物小自我と小自我とが交涉し合ふ時の關係に過ぎぬ換言すれば小自我と外物、小自我と小自我との相互關係を肉体と稱するので此の關係を外にしては肉体は有るものではない、今試みに之を說明せんに色は本來物体に固有するものではない唯だ物体より來る光線の波動が眼球を刺激し腦に傳はりて色と成て見ゆるのである決して物体に色があるのではない而して其光線の波動の緩急に從て種々雜多の色が見へるのである亦物体の形

は觸覺の關係する所之に視覺が加はつて物体の形を見るのであるが手が物体に觸るゝ時は唯だ抵抗を受くるに過ぎぬ抵抗の感覺と光線の波動とが相待て物体の形を認識するのである、決して物体が始めより物体として吾人に現はるゝのではない唯だ勢力の一形狀(抵抗波動)として吾人に現はるるのであるから物体を物体として見るは吾人の心である吾人の心が受動的に物体を見せらるゝに非ずして却て之を組み立てるのである、今夫れ色を外にして物体を想像し得るやと謂ふにそは出來ざる事である物あれば必ず色がある而して此色なるものは物的のものに非ずして心的のものでありとし物体の形が形として知らるゝに非ず抵抗の感として感知せらるゝものとすれば有色物体たる人身を組み立つるものは物に非ずして心である、心が肉体の造營者建築者である科學者は生命の「物的基礎」と謂ふ事を唱へて身体の組織を生命の基礎と見做し物質が先きで生命が後に出來た樣に說く癖があるが之れは大なる誤謬である、盖し事實を言へば生命が先きで組織は後である生命が有るから有機的

組織が始まるので生命なくんば有機的組織なるものが起る筈がない、人体は實に靈妙なる形体である而して何者が之れを作るやと謂ふに曰く生命が之を作るのである

醫師の言に依れば人の身體は約七年にして全く物質を一變すと云ふ物質は一變するも其人たるは依然たり、然らば物質意味あるに非ずして其人に意味あるなり、知るべし人の身体に存する生命は物質を吸收して自ら身体を組織するに於て力を作るの力たる事を此力若し犬の体に在らば之れに吸收せらるゝ物質は悉く犬の形を組織し、若し馬の体に在らば吸收せらるゝ物質は悉く馬の形と爲る、益々以て物質の無意味なると生命の有力なるとを知るべし

形体は末にして生命は本である生命有て而して後に形体が起るのである而して此生命力は則ち大實在が本來包有する所の力で之れが格段なる夫れ夫れの個体として現はるゝ時に始めて人に認識せらるゝものである

既に生命が本にして形体が末なりとせば人心の本にして人体の末なる所以も亦知り難きではない前にも云へる如く吾人が吾人の身体として知るものは心の作用の結果である心が種々の感覺を結合して構み立てたる建築物に外なら

ぬ然らば身体は決して陋塊なる物質の集合体ではない大實在の裡に無始の始より存在したる個別の自我が祖先と社會とを緣として實在の海面に出現し來る時の暫假体である詳しく言へば身体なるものは實在界裡に存在する小自我が外界と他の小自我とに對して交渉し合ふ時の關係である此關係を外にして身体なるものは有るものではない

身体を陋塊なる物質となし心を虛靈の体と見做すが故に二元說の不充分に陷るのであるが然し心を身内に住する靈体となさず身体を陋塊なる物質と見做さず、ともに之れ一大根本的勢力の發現にして合理的なるものと見なば決して二元說を假定して心物を解くの必要はない所謂物質は本來虛靈なるもので有形なるものではない、虛靈なるものが有形として現はるゝのは之れと我とが相對した時である即ち外界が心と相對した時に心が諸種の印象を結合して種々の有形的物体を組織するのであるから若し心なくば有形物はない筈である、カントは其大著『純理批判』の緒論に於て左の如き意味の言を言出して

居る曰へらく

予の哲學は之れを「超然的唯心說」と稱す之れ予の哲學が絶對的に心外無一物を唱ふる唯心論と異なり、心が五官の印象より得たるものを材料として宇宙を構成する事を主張すればなり但し外界に存じて吾人に印象を與ふる物の何物たるやは吾人の知る能はざる所なり

カントは心と外界とを對照して心が外界を組織する組織者なる事を主張した此點は於ては吾人と意見を同ふするものがある但し吾人は一歩を進めて吾人に印象を與ふる物を勢力と見たいのである盖し夫れが勢力に非ずんば吾人に交渉を及ぼす事が出來る筈がない例せば色は光線の波動として吾人に傳はり音は空氣の波動として吾人に傳はり觸覺亦抵抗力の感覺ではないか斯く勢力のみが吾人と交渉するものとすれば物の本体を勢力と見るのは物と力との二元說を主張する通俗物理學に比すれば遙かに眞とするに足る、物既に動力とすれば有形の諸物は此勢力と心との交渉の結果と見るの外はない故に有形の諸物は心が構造したる暫假の假体にして人の見るが如き陋塊なる物質の集合ではない

今夫れ我の身体なるものは外界と他の小自我とに對する我の交渉であるが此交渉が止むの時は之れ則ち死の時である此死たるや萬事の終はりに非ずして外界と他の小自我（他人）に對する自我の交渉が止みたるのみである然り唯交渉が止みたるのみにして自我は依然として存在するに相違ない、自我の歴史的發達は祖先と社會なる事は前章に述べたる如くであるが自我の本体を極むれば無始の始めより大實在の裡に存在するものであるから外界と他の小自我との交渉を滅したればとて寂滅虚無に歸する筈はない純然たる一個の自覺者として其存在を實在界に留むべきは當然なるべしと思はるゝ

從來の基督教にては創造説（クリエーションセオリー）を主張する論者が多かつた爲めに神が無より心靈を造つた樣に思ひ從て個人は現世に生るゝ時に始めて其存在を始たものと思惟せられたのであるが是れは大なる誤謬である何となれば本來自己に具備せざるものは全能者と雖も之れを創造する譯には行かぬ、全能者が自己に具備せざるものを創造するの難きは全能者が自己以上の者を創造するの難きと同

一般である、創造は無より有を出だすの謂に非ずして自己が包藏する者を發現するの意味である此意味に於て天地萬有は神の創造であるが無より出で來りたるものではない若し心靈が無より創造せられたりとすれば此無より出でたる心靈は亦無に歸するは當然であるから靈魂不滅説は立たなくなるのみならず理に於て無より出で來れりとなす能はざるが故に吾人は自我てふものが無始の始めより大實在の胸中に潛在したりと主張するのである而して一度祖先と社會とを緣として發達したる自我は此緣を絶ちて實在界に復歸したる後も自我の自覺を永續すべきは殆んど疑を容れざる所である蓋し自我は絶對者に創造せられたるものに非ずして絶對者の胸中に包藏せられたるもの若しくは絶對者の一部分であるから之れが虚無に歸す可からざるは自然の道理であるからである

古來自我の永存を唱へたる學者枚擧に暇あらず從て其論據とする所も多少異て居る或は道德の理想より（カントの如く）或は心靈現象の事實より（フレドリツクミヤーの如く）或は自我

の同一の點より（普通の靈魂不滅論者の如く）自我の永存を論證せんと企てた而して各賛同すべきの理由がある最も近世にありては進化説の大家ジョンフイスクが自我永存説を科學者の立場より公平に論じて居る彼は其小著『人間の歸趣（デスチニーオフマン）』の末章に於て「末來の生命」を論じ自我の永存が盖然的の眞理なる事を切言した其意味に曰く

肉体は土より出で丶土に歸し地球も亦遂に滅亡するの時あるべし、諸天は渦卷の如くにして消滅し萬物は烈火に溶解するの時來るべし……而して宇宙の創造力が其最上の目的物として産出したる人間の最高靈性も亦ともに消失し去るべきか、進化の行歩は終に虚無に歸すべきか、こは之れ暫假にして泡沫の水に歸するが如くなるべきか……否々吾人はか丶る見解を信ずるの理由を有せず盖し此見解に從へば宇宙の謎語は意味なきの謎語と成り終らんのみ

予は靈魂の不滅を信ず但しこは科學の證明的眞理を信ずるの意味と等しき意味に於て信ずるには非ず神の事業の合理的なるを信ずる信仰の最上行爲によりて信ずるなり……夫れ宇宙は不可思儀もて充滿す唯物論の不合理なるは喋々を要せず予は思ふ唯物論の淺

薄に比すればユーリピデスの見解――死は眞智識眞生命の曉天なりとの見解――は寧ろ信據するに足るものなる事を、かの近代の最大哲學者にして後代の進化學者の師表たる一學者（スペンセル）は自覺的靈魂が物質分子の集合に非ずして最も深き意味に於て神よりの流出物（エフルエンス）なる事を主張す……予は人類進化の或時期に於て神光が充分に集中固定して肉体壞滅の後も永久に存續すべきものたるを信ずるに大なる困難を感ぜず……而して此の靈魂不滅の見解たるや極めて少數の例外を外にしては人間の最高靈性の出現を以て自然界の目的なりと信ずる總ての人々によりて把持せらるゝ所のものなり、然り此の見解たるや科學上に於けるコパルニカスの革命に殘存し亦ダルウインの革命にも殘留し來りしなり云々

フイスクの此意見は科學者として公平なる議論であろフイスクの著書を熟讀する者は彼が心物併行説を把持する事猶ほブントの如きものがある事を知るであらう彼にして自我永存の眞理に近きを是認主張するを見れば自我永存説が科學の敵に非ざるを知るべきではないか、サーオリバーロッヂは頃日『科學と靈魂不滅（サイエンスエンドインモータリチー）』と題する大册を出版して靈魂不滅の爲めに萬丈の氣焔を吐て

居る彼が其小著『信仰の實質（サブスタンス オフ フエース）』中に叙述する所を見るに自我は肉体の滅後永存すべきものたるは科學上否定する能はざる所であるとなして居る而して現世と末來世との關係を戰爭に出陣したる村人の譬喩によりて説て居る

かくの如く補充兵として招集せられ戰場に送り出されたる村人の一人は國家に奉事し經驗を得彼が曾て夢想せざりし智見と精神とを得る事なるべし而して戰爭終了後彼が其家に歸るや彼は前の如く其村落に埋沒して亦世に知らるゝ所なかるべし然れども村落は彼の存在によりて其富を增し加ふるなり而して彼の獨自一個若くは人格は（仮令世界が彼を要せず從て彼の存在を見る事なきに至るも）實際には消失せられざるなり、個人の生と死と亦此の如し

ロッヂは現世を戰場に譬へ單純なる山出しの補充兵が此所で智識經驗を得任充ちて其出て來りし村落に歸るを死に譬へたのは面白き比喩であると思はるゝ、ヘンリーヂヨルヂは其傑作『進歩と貧乏（プログレス エンド パヴァーティー）』に於て社會進歩の法則を論じ遂に靈魂不滅の眞理に論及して倫理上靈魂の不朽なるべきを説き次に人間の靈魂が五十年七十年にして滅するものとしては餘りに規模が大き過ぎる事を述べて居る曰く

現世にありては（吾人の知る如く）心意の發達は唯だ僅かの行程を經るのみ心意が覺醒し始むるの時は肉体の力は衰滅に傾くの時なり心意は唯だ朦朧として自己の前に廣大なる馳場の横はるを自覺す然かも心意が自己の力量を知覺し之れを使用し始むるの時は肉体の死時なるを如何せん、若しも死後に個人的生命の存續するなくんばこは宇宙の缺陷にして亦失敗なりと言はざる可からず……若しも現世にありて發達したる心と性格とが此所に終るとせばそは目的なき無謀の事柄にして吾人が至る所に見る宇宙の連續てふものと抵觸矛盾するものたるを免かれず

生命の意味は何ぞや――死と全く結合して離る可からざる生命の意味は何ぞや――予を以て見ればそは唯他の生命に至るの通路および廊下に外ならず

ヘンリーヂヨルヂは現世の生命を他の生命に到るの通路或は廊下と見た而して此假定説によりての外は人の現世の生活を説き得ずとなして居る、ケヤードは其著『基督教の根本思想（ファンダメンタル アイデアス オフ クリスチアニティー）』第二卷の末條に自我の永存を論じて光彩陸離たるものがあるが結局神を信ずる人には確實なる豫想自然の信仰なる事を説き最後にかく言ふて居る

若しも神にして存在し給はんか而して若しも聖書が敎へ最深なる哲學思想が證明すると見ゆるが如く神にして靈的存在者總ての心靈の父にてましまさんか吾人は吾人が暫ばし土の器(肉体)に盛れる此至寶(生命)の消失し去るを恐るゝを要せず何となれば世界と其慾とは逝くされど神の旨を行ふ者は永遠に存在すべければなり

以上は科學者經濟學者哲學者を拉し來りて其所見の一端を述べしめたるに過ぎぬ、若し古今の學者詩人をして自我永存の理を述べしめんとせば之れ日も足らざる事である、若し自我にして彼等の主張するが如く存存するものならば現世は自我に對しては一の學校若くは家庭と見る事が出來る兒童が學校家庭に於て各其敎育經驗を得他日の準備に供するが如く人も亦祖先と社會とを緣として世に現はれ敎育經驗を得て自己の性格を作るのである而して作られたる性格はそが實在界に復歸する後も劃然として其意識を留存すといふは之れを消滅すと謂ふの說に比して寧ろ眞とするに足るものがある、但し之れは普通の靈魂不滅說の立場にして吾人唯心論者は更に深き論據を有して居る事は前に略ぼ述べたるが如くである則ち吾人は自我を以て大實在の胸中に永遠

の始めより包藏せられたるもので時に至て祖先と社會とを緣として發現し來りたるものなる事を主張する而して死は則ち自我の死に非ずして自我が他の小自我と外界との交渉を絶ち實在界に歸するの現象であると解するものである故に(神と人との關係たる)宇宙は滅するとも自我は滅せぬ事も從て論出するを得るのである

既に自我永存すとせば現世の不幸災厄は意とするに足らぬ廣く言へば人類我狹く言へば小自我の發達向上の爲めである此理を知らば有らゆる不幸災厄は寧ろ感謝すべきものである吾人はかく達觀して宇宙人生を査察せんか「萬事皆善し」と謂はざるを得ぬ

パウロは宗敎の立場より自己一身の場合に於て世の苦患禍殃が自己の生涯に感謝すべき祝福なる事を書て曰く

患難にも欣喜をなせり蓋患難は忍耐を生じ忍耐は練達を生じ練達は希望を生じ希望は羞を來らせざるを知る

孟子は人生の苦患禍殃が人間進歩の要具たるを斷じて曰へらく

天將降大任於是人也必先苦心志勞其筋骨饑其體膚空乏其身行拂亂其所爲入則無家法拂士出則無敵國外患者國恒亡然後知生於憂患而死於安樂也

斯く達觀し來れば世の不幸苦患なるものは實は不幸苦患に非ずして進歩向上の要件として甘受すべきものたる事が解せらるゝではないかフリント曰く

苦痛が身体に及ぼす影響よりも精神上に及ぼす勢力は著るしく大なるものたるを見るべし是れ靈魂を矯正し訓練するに於て其功最も大なり是れ心の剛愎なる者を柔け驕慢なる者を挫き勇氣と忍耐を生せしめ同情同感を擴め敬天の感情を働かしめ全性情を鍛錬し强堅にし且つ高尚にするに功あり、凡そ人は精金となりて出で來らんには必ず先づ苦難の爐を經ざるべからず苦を正しく受けたる人は未だ曾て苦の餘りに夥しきに過ぎたりと呟きしはあらず

わが父の家には第宅あほし（約翰傳十四章）

第五章　煩悶苦惱の原因

頃者我國に自殺者の多き驚くべき程なり統計の報ずる所に依れば年々一萬人を算するといふ事である、是れ實に國家民衆の爲めに憂ふべき大患ではないか、勿論自殺者の種類は種々雜多であらう或は家計の苦しきより或は試驗に落第したるより或は失戀の結果より來るもの等一々枚擧する事は出來ぬ程であらふ然し乍ら詮するに世の不如意に煩悶苦惱したる結果に外ならぬ、人生意の如くならざるもの十に八九、げに儘ならぬ浮世である、此儘ならぬ浮世に棲息し乍ら、我が思が儘に振舞はんと欲するのは少しく無理なる註文である而して此無理なる註文が叶ぬからといふて煩悶苦惱し甚だしきは淵川に身を投じ短銃自殺乃至鐵道往生を企つるといふのは餘りに愚に失して居る

顧ふに煩悶苦惱の因て來る所を稽察すれば其原因に二つある一は無知即ち迷

にして二は罪惡である前者に對しては佛教の解說が懇切を極め後者に對しては基督教の說明が其眞相を闡明して居る

佛教には苦集滅道の四聖諦てふ教がある苦諦とは此世界を觀じて非常なる苦痛の世の中であると見なすのである、人の此世に生るゝや病あり老あり死あり而して生死病老悉く苦みの種子である此外我愛する者に別れ憎む者に逢ひ求むる者が得られぬなどの苦みが多い而して亦人間意の如くならざるもの十に八九希望の星は墜ち失意の暗黑は時に身を掩ふ事もある人間一切の行ひ世界の萬物は終始變化して須臾も止まらず我が意志を以て如何ともなし能はざるの苦痛がある、かく世界を苦觀して行くのが原始佛教の出發點である釋迦は曾て左の如き意味の事を言ふたと佛學者の一人は書いて居る

我は實に非常なる富を持て非常なる榮華を極めて居つた然れども時に私かに思ふには無智の民は縱令老苦に襲はれ自らは夫れを脫すること能はざるに拘らず人の老いたるを見るとそを憎ばずそを嫌ひ憎む、而して其の嫌ひ憎むといふ力が必竟何時かは復自分に還り來たるといふことを知らぬ、我も何時か年を取つて其苦みに襲はれるは必然でドウしてもソレを脫することが出

來ぬ、それで他の人の老いたるを見ては之を憎ばず之を嫌ひ之を憎むといふことはドウしても我の爲し能はざる所である此老いるといふことが人間總ての者に何時かは環り來るものであるといふ事を考へて見ると少壯氣鋭の働きも忽ち挫けてしまふ、此世の中の無智の民は縱令自分では病の苦み死の苦みに襲はれ、それを脫することが到底出來ないにも關らず人の病み人の死するのを見るとソレを憎ばず之を嫌ひ之を憎む、それで自分が何時でも此生病老死といふ事を考へて見ると自分の一生の勇氣も頓に挫折してしまつた、それが爲めに自分は道を求め諸方に彷徨してサウして色々の苦行を積んで來たのであると斯ふいふ話を釋迦が曾てしたことがある

是れは明らかに此世の中は苦痛に充ちて居る事を言ひ現はしたるものである、去れば佛教は厭世觀を以て始まつて居る、既に世の中は苦いものであると觀じたる以上は其苦みの由て來る原因を明らかにせねばならぬ、則ち世の煩悶苦惱は安づくよりして起り來るか其本源は何ぞやの問題に移て來る、そこで佛教に從へば苦痛の起る原因は諸の慾である、此事を解說するのが集諦である、人の慾は之を三種に分つことが出來る一は快樂を欲するの慾、二は生を欲するの慾、三は現世を愛するの慾である、此三通りの慾がある爲めに

一切の悪といふものが出來ると云ふのが集諦の立論である、釋迦の說ける所に依れば一切の苦悶、諸惡は皆人の慾より生じ來るもの慾が其根本をなして居る、今夫れ世の中の人は皆其技術に從て自ら生存しようと務めて居る、或は田を耕し或は物品を製造し或は文學を學び學術を研究し或は軍人となり其他色々なる業務に從事して其生存を全ふせんと務めて居る、之れが爲めには寒暑を厭はず困難に堪へ飢渴困憊すらも耐へ忍んで居る而して若し生存に必要なる錢財を得ざらんか非常なる心配をなし、夫れが爲めに全く馬鹿者の樣に成て仕舞ふこともある、若又錢財を得れば之れを吝んで容易に出さず、其得たる財を奪はれんことを恐れて種々に保存の道に苦心をする、或は盜賊の難を免かれんことを計り或は火に燒かれ或は腐るなどの爲めに夫れぞれの準備をする、而して若しも一朝にして其錢財が何にかの災禍の爲めに烏有に歸する事あらば忽ち憂を生じ泣悲んで苦悶するのである、かく觀じ來れば人生の苦痛は多くは慾が本と成て居る事が分かる、啻に夫れのみならず慾が本と

成て親子兄弟の間にも互に相爭ふ事もあり衝突する事もあり朋友も利害の相反するより讎敵と化する事がある、國と國とは互に利を爭ひ民と民とは互に其肉を食ふ樣なる淺間敷有樣を演ずる、時には干戈に訴へて相殺傷し合ふ事も少なくない而して皆孰れも慾が本で色々の苦痛を受くるのである、其他心口意一切の惡業は悉く此慾といふ事が土臺となつて起つて來る、去れば世の中の苦痛は人慾が本である事は明白である、然らば今一歩を進めて此人慾なるものは何より起るぞと其根本を調ぶれば佛敎は之れを無明に歸する無明とは無智の事である、無智が本となつて人慾が起るとは如何なる意味なるかと云ふに凡そ執着する金錢、女人、美衣美食の類は本來空なるもので一も定相を有するものはない若しも自然其物より觀ぜんか物は皆平等にして貴もなく賤もなく美もなく醜もない、貴しと思ふ物も貴くなく賤しと思ふ物も賤しくなく、美なりと考へた者も美でなく醜なりと考へた者も必ずしも醜ではない唯だ人間がそれに迷ふて自分で美と思ひ貴しと考へそれを求め戀ふて此に慾

こいふものが起て來るのである、物の本体より考ふれば物は皆平等である金錢を形造くる物質分子も土塊を形造くる物質分子も其本体は同じではないか、醜美も人により時代により人種によりて大なる異同がある而かも之れを組織する根本は平等にして差別あるではない、唯だ人が自分勝手に差別をつけて物の假相に執着する所より醜美貴賤の別を生じて來るのである、此道理に暗い所から唯だ自分の執着を起してあれが欲しい是れが欲しいこいふ慾念を起し又之を得れば之れを失ふまじと苦心する、去れば世の中の一切の平等に對して無智なるの結果執着を起して玆に慾念が起ると云ふのは面白き解説と見ねばならぬ、

佛教に十二因縁の説がある是れは此慾の起り苦みの起り世界の起りを説明したものであつて一切の苦痛こいふものが悉く人慾を土臺として生し而して人慾は無明から起つて來るこいふ事を説いたものである十二因縁とは無明、行、識、名色、六處、觸、受、取、有、生、老死、の十二である、即ち釋迦は此世の苦

の原因を無明に歸し無明から一切顯象が十二段となつて起るこいふ事を説明したのである、既に苦痛の原因が無智にして無智より苦痛が起るとせば此苦痛を絶滅するの法は唯だ人間の智慧を開いて眞理を諦觀し業に由て之を養ひ往くにある、かくすれば一切の苦痛は無くなり世の中の嫌らはしい厭ふべき事も滅して仕舞ふ之れを佛教では滅諦と名くる、而して其之れを滅するの道を教ゆるものが道諦である道諦は之れを八正道に分つ即ち正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八つである、此八正道によりて人間の正道を蹈み行ひ諸慾を斷滅して一切の苦痛を脱却せん事を務むるのが道諦の教ゆる所である今夫れ此四聖諦たるや釋迦自身の言に依れば前人の未だ曾て言はざる所、釋迦が始めて之を觀之を知り之を解し之を明らかにした所のものであつて釋迦も未だ此四聖諦を純粋圓滿に知觀せざりし時には此人間世界、婆羅門界其他一切の者の間に於て決して無上最勝覺を得たと言へなかつたが然し一度此四聖諦を明らかにしてからは大なる正見を啓き天地の間には能く自

分に及ぶ者無き事を知ることが出來たと說てある、是れに由て見ると此四聖諦は佛敎に取りて非常に大切なる眞理第一の根本義であるといふ事が認められる、佛敎の一學者松本文學博士は其『宗敎と哲學』中に曰へらく

要するに佛敎の第一の敎義は無明即ち無智を以て迷誤世界の根本となしそれから慾が生じそれから一切の惡事惡行が起るといふにある夫れを救濟する道として無我無常といふ道理によりて其無明の根源を滅して仕舞ふのである是が即ち正しい智慧であつて正見正智である、それを助くるに定念を以てし語、行、命、此三つのものに由て之を養ひ之れを習ふやうに務めしむるのである、それで佛敎の敎といふものが成立つて居るのであつて其他に佛敎の根本義は更に無いと云つても差支はない

リチヤードカルブ(ロッヒーオフエエンエントインヂア)も其『古代印度哲學』に於て佛敎の根本義が無智を以て諸惡衆苦の基本とするものなる事を說いて居る曰へらく

佛敎は此の世の生命の呵責より人を救はんと欲するものにして此の世の不幸害惡の根本が無智に存するとなすものなり云々

今何故に人は無智の執着を起すやと謂ふに、そは概ね肉体あるが爲めである故

に佛敎にありては肉体を非常に嫌惡し之れを蛇蝎視する事すらあるのである、法句經曰く

天下苦莫過(レ)有(レ)身、飢渴寒熱、忿怒驚怖、色慾怨禍、皆由(ニ)於夫(レ)身者衆苦之本、禍患之源
吾羣縛着生(シテ)死、不息皆由(ニ)于身(ニ)故欲(ノ)離(シテ)世、當(シ)求(レ)寂滅(チ)――――――是最爲(レ)樂

起信論にも亦曰へらく

世間一切有身悉皆不淨種々(ニ)汚穢无(ニ)一可(モ)樂

涅槃經にも左の意を演べてある

觀ずるに此身は四大の毒蛇の如し、此身は無常にして常に無量の諸蟲に噬食せらる此身は臭穢にして貪欲に獄縛せらる、其畏る可きは死狗の如し、此身不淨にして九孔常に汚穢を流出す、是身は城の如し血肉筋骨ありて皮其上を裹み手足は敵を却くる樓櫓たり目を孔竅と爲し、頭を殿堂と爲して心王其中に處るなり、是の如き身城は諸佛世尊の棄捨する所の者にて凡夫愚人の常に味着する所なり、貪淫嗔恚愚癡羅刹其中に止住す、是身の堅固ならざる事は蘆葦、伊蘭、水沫、芭蕉之樹の如し、是身は無常にて念々住まらず、猶電光暴水幻炎の如し、亦水に畫くに隨ふて滅合して片時も住まらざるに均し、是身の壞れ易きは河岸に生ひて深きに臨む大樹の如し是

身は久からぬ間に虎狼鴟梟鵰鷲餓狗の食ふ所となる可し、誰か智慧ある者此身を樂む可けん、假令牛の跡に大海の水を盛ることを能くするも具さに此身の無常、不淨、臭穢等を說くを得ず設使大地を團めて小塊と爲し漸々に小さくなして芥子の如く爲し、又は微塵の如くするも具さに此身の過患を說く可らず、此身をば涕唾の如く捨つ可し

聖書にも之れと等しき思想が現はれて居る、パウロは人慾の一方面に過ぎざれども然かも人慾中の强者たる財貨の慾が衆惡の源なるを名狀して謂ふ

富まんことを欲する者は患難と罟また人を滅亡と沈淪に溺らす所の愚にして害ある萬殊の慾に陷るなり、財を慕ふは諸の惡事の根なり或人これを慕ひ迷て信仰の道を離れ多くの苦患を以て自ら己を刺せり（提摩太前書）

パウロは亦肉体を「死の身体」と稱した而して肉体の中に罪の伏在する事を明言して「我肢体の中にをる罪の法」といふ事を書て居る、雅各は人慾が有らゆる世の中の禍害の源たるを名狀して「爾曹の中の戰鬪と爭競は何より來りしや爾曹の百体の中に戰ふ所の慾より來りしに非ずや」と謂ふて居る

既に無智が人慾の原因たり人慾が苦痛の原因ならば人生の苦痛を免かるゝの

方法は智慧を啓ひて人慾を去るの外はない、而して此智慧を啓き人慾を去るは人生の無常變遷の理を知るに如く事はない、之れ佛敎の無常觀が人生の煩悶苦惱を療醫するに有効なる所以である、盖し人生の無常憑み難きを知らば人慾の私を去ること易く人慾の私を去らば人慾を根據として起る一切の苦痛は自ら雲散するからである、此故に釋迦は修德の要訣として無常の常に觀ずべきを敎へて居る四十二章經中に曰く

觀天地念無常視山川念無常視萬物形體豊熾念無常熱心如此得道疾矣

修證義には亦左の言辭がある

無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身己に私に非ず命は光陰に移されて暫くも停め難し紅顏のいづこにか去りにし尋ねんとするも蹤跡なし

天地萬有は常に變遷しつゝある一として定住するものはない山川も草木も皆變化しつゝあるではないか、水は流れて海に入り海水は亦蒸發して雲と成り亦雨と成り亦流れて海に入る草木は生長しては枯れ、枯れては亦生長する山

も亦曾ては海底に潜める底地が隆起したるもので亦海底に潜むべき運命を有して居るものである、況んや無常啻ならざる人生をや見よ人生の變遷は時々刻々に行はれて居る旦には紅顏の美少年夕には白骨と化するではないか實に「命は光陰に移されて暫くも停め難し」人間暫かに五十年七十年は古來稀なり而して五十年七十年は頃刻の間のみである、去れば天地人生は一として定相を有して居ない皆假相を現しつゝあるものに過ぎぬ、無常變遷の假相に執着して憑み難きを憑むのは愚の到りである此理を知らば人は自ら人慾の迷妄に遠ざかる事が出來る、例せば「花は咲くも散るも假相である人は生るゝも死するも假相である然るを咲ける花を散らすまじと思ひ生れたる人を死なすまじと希ふのは事物の假相に執着したる背理の迷情である」

天地人生の眞相は實に此の如くであるから若し此無常變遷の理に悟入せば吾人は煩悶苦惱する事はない筈である

吾人は前來佛敎の敎理を提げ來りて煩悶苦惱の依て來る所を明らかにし迷を

排ひて苦痛を減却するの方法を明らかにしたるが故に今は進で基督敎の罪惡觀によりて苦悶を斷滅するの理を說明しよう、人間の煩悶苦惱が全く無智のみに根柢するものならば正智を啓けば夫れにて苦痛は全く除去せらるべき筈であるが然し人間の苦悶は必ずしも無智計りに根柢するのではない、亦罪惡から來るものも少なくない罪惡とは惡の惡たるを知りて猶ほ之れを行ふ事である、顧ふに人生の苦痛の半ばを迷ひに原因すとせば殘る半ばは罪惡に原因して居る、否迷と罪惡とが經緯と成て苦痛を織り成しつゝあるのである、例せば或人々は金錢の憑むに足らざるものなる事を知て居る而して自己の生命も朝露の如き果敢なきものなる事も承知して居る而して猶ほ此迷妄に執着して貪婪飽く所を知らず樣々の惡念を恣にして浮きたる夢を追ふのである而して其胸中常に慾火に燃されて煩惱の苦痛にもがく有樣である昔の一書に猩々の話が記されて居る取て以て罪惡を說明するに足るものがある其大意に曰く

猩々といふ獸は海底に住む者なるが或時猩々どもが會議をした其時其重なる一匹の猩々は發言

して曰く我々猩々は年々歳々人間に獲られて既に眷族も亡びなんとして居る之を救ふの道を講せねばならぬ、顧ふに人間が猩々を獲るの唯一の方法は酒を飲ましむるにある、去れば若し我等にして斷然禁酒する事あらば人間如何に智なりとも我等を獲るの道なかるべし、今日の事禁酒に如く事なしと論じた、他の猩々どもは異口同音に禁酒の然るべきを贊し誓約をなした誓約の終ると間もなく上の方より芳はしき酒の香ひがプンプンと鼻を衝ひた一匹の猩々はフワフワと上の方に浮び出でゝ酒の瓶に近いた他の猩々も相次ひで瓶に近づき一口又一口遂に醉ひ倒れて人に獲れて仕舞つた

之れ卑近の譬喩であるが人慾の害惡を認識し乍から其迷謬を脱却する能はずして罪惡を犯すに譬ふべきである、悟れる者必ずしも無惡の人に非ず、諸法皆空を唱へて猶ほ假相暫假の快樂に惑溺する者があるではないか、智力上の悟は意志の力を動かす能はずして徒らに虹を追ふが如き場合に乏しくない、罪惡は智の悟りありて意志の實行の之れに伴はざる所に存する、何故に人は諸法皆空と悟り無常變遷の理を辨へながら空虛無常の快樂を求むるや其理由如何といふに人慾はよしや暫假のものにもせよ暫ばし快感を感ずるからであ

る、花の咲くも散るも假相に相違ない人の生るゝも死するも假相に相違ないも然れども散らざる間は花は美である死せざる間は生命は愉快と思はれて居る窈窕たる美女もと之れ血肉の集合に過ぎずとするも其美女として目に映ずる間は久米仙人も魂を奪はれざるを得ない、されば智に於て諸法皆空無常變遷の道理を會得したればこて實行の之れに伴はざれば聖俗を分つ事は出來ぬ、否迷謬の迷謬たるを悟つて猶ほ其迷謬を追ふのは則ち罪惡である、釋迦が苦集滅の三聖諦を說き最後に道諦の一つを加へて意志の實行を督勵したのは此罪惡より人を救はんとしたものに相違ない、道諦は分かれて八正道となる則ち正見、正思、正語、正行、正命、正精進、正念、正定の八つである

正見とは偏見に陷らず正しき見解を保つ事、正思とは正しき思慮觀察なり、正語とは僞りを言はざる事、正行とは身口意の三つの働きに於て正しく行ふ事、正命とは正しき生活を維持して往く事、正精進とは絶間なく勇氣を振つて進む事、正念とは佛法を觀念して須臾も忘れざる事、正定とは心を散亂せしめずして修行する事

孔子が「造次必於是顚沛必於是」と謂はれたのは之れ亦修行の工夫を說かれた

ものに相違ない、盍し前にも言へる如く人慾は暫假の假相に過ぎずと雖之れを遂ぐるは兎も角も愉快であるから智に於て事物の眞相を辨へたる智者も煩惱の巷に罪惡を犯すの恐がある故に釋迦も孔子もかくは修行の工夫を說かれたものゝ見へる、

古來聖賢と稱せらるゝ人々は概ね皆自己の罪惡に煩悶し救濟の道を探求した る人々である、顧ふに人間の苦痛の甚大なるものは天地人生の無常にして幸福の得難きに存するではない寧ろ願ふ所の善を行はず願はざる所の惡を行ふより來る悔恨の情である、即ち罪惡感である、

アウガスチンは其『懺悔錄』に於て縷々娓々自己の罪惡を懺悔して痛切を極めて居る彼が十六歲の時より壯年に至る迄の罪惡を痛悔して腸九回するの趣ある事は紙面に躍如として同感に堪へざるものがある、彼が靑年時代の罪惡を懺悔する懺悔文の發端に曰く

予は放蕩によりて寸々に切り離なされたり。予が三一の爾(神)を離れ去れる時予は世上の事物に自己を埋沒し去りぬ、予は靑年時代にありて地上の事物もて滿足を獲得せんと焦心したり而して予は種々の而して影の如き愛慾もて野卑なる者となり果てたり「我の美は消耗し去りぬ」而して爾の目に汚穢なる者となれり自己の快樂を貪りつゝ而して人の目を喜ばせんと欲しつゝ

彼はかく懺悔して一々自己の罪惡を敎へ悔恨止む能はざるものある事を叙述して居る、イリングチルスは其著『人と神と(パルソナリテーとユーマンエンドヂヴィン)この人格』中に罪惡悔恨の情が人間の意志の自由を證驗するものなる事を論して居るが其一節にかくいふて居る

人類は代々世々如何なる代價を拂ふとも悔恨てふものを脫せんと試みたり、然かも悔恨は猶ほ嚴然として吾人を睨視し吾人の心情をば悲歎の雲もて掩ふなり而して悔恨が餌食に供する無數の犧牲者は發狂、自殺、失望及び來世の恐るべき刑罰の豫想に追ひ遣らるゝなり、願ふに人は若し出來得べくんば此悔恨てふ惡靈をば秡ひ去るを欲せざるはなけん、然かも彼等は能はざるを如何せん而して悔恨は人が自ら意志の自由を有すてふ確信に對する暗憺たる別名に外ならず

實に人は罪惡の痛悔よりして發狂し自殺もする而して恐怖措く能はざる感覺すらも持つに至るのである、パウロは自己の罪惡に對して痛恨止まず長大息

して曰く

われ願ふ所の善は之れを行はず反て願ざる所の惡は之れを行へり若しわれ願ざる所を行ふときは之を行ふ者は我に非ず我に居るところの罪なり、此故に我善を行はんと欲ふときに惡の我にをる此一の法あるを覺ゆ。蓋われ內なる人に就ては神の律法を樂めども、わが肢體に他の法ありて我心の法と戰ひ我を擄にして我が肢體の中にをる罪の法に從はするを悟れり噫われ困苦人なる哉この死の體より我を救はん者は誰ぞや

孔子が「德之不」修、學之不」講、聞」義不」能」從、不善不」能」改、是吾憂也」と歎息されたのは此の消息を洩らすものと解せらるゝ

ダビデが大罪を犯して預言者ナタンに詰責せられた時に歌ふた歌にも

あゝ神よねがわくばなんぢの仁慈によりて我をあはれみ、なんぢの憐憫のおほきによりてわがもろもろの愆をけしたまへ、わが不義をことごとくあらひさり我をわが罪よりきよめたまへ、われは我愆を知る我が罪はつねに我が前にあり、我はなんぢにむかひて獨なんぢに罪ををかし聖前にあしきことを行へり云々

かく罪惡の感は人をして痛恨止む能はざらしむるものである、勿論無智迷妄

より罪惡を犯す事もあらう罪惡より無智迷妄に陷に事もあらう或は無智と罪惡とが經緯となりて苦痛の生涯を織り成す事もあるであらう、兎も角も人生の苦痛が一面、迷より來り一面罪惡より來る事は事實である去れば人生を苦痛の裡より救はんとせば人をして事物の眞相を知らしめ諸法皆空の眞理を知らしむると同時に人をして罪惡を脫する道を開ひて遣らねばならぬ、蓋し之れ苦痛の兩面より藥を配劑するの完全療法であるからである

顧ふに印度思想は人生の苦痛が迷より來る事を闡明するに妙を得て居るが罪惡てふ事實に至ては之れを閑却視し去て居た、西洋思想は罪惡を見る事深きに過ぎて迷の方面を會得しなかつた　然れども現時の基督教は此兩面の事實を充分に認知し兩面よりして人生の救につとむるものである、迷を去るは智である、故に基督教は人慾の迷妄を懇說して單純なる生活に滿足すべきを敎へて居る

神を敬ひて足ことを知は大なる利なり、われら何をも携へて世に來らず亦何をも携へて往くこ

と能はざるは明かなりそれ衣食あらば之をもて足とすべし云々

それ人は既に草の如く其榮は凡ての草花の如し草は枯れ其花は落つ云々

然し乍ら基督教の高調する所のものは罪惡よりの救拯である、罪惡は宛かも癩病の如し人の全心は罪惡によりて腐敗しつゝある而して刻一刻死に瀕しつゝある、如何にして此罪惡の疾病苦痛より救はるべきか之れ古今の大問題ではないか、「我救はれん爲めに何を爲すべきか」とは人類一般の哀聲ではあるまいか、世界に種々雜多の宗教的儀式があるのは多くは皆人類が自己の罪惡を自認し罪惡より救はるゝの道を講究したる結果ではないか、昔者猶太國には神を祭つるの禮式として燔祭（燒き祭）素祭（野菜にて神を祭つる事）を献ぐるの習慣があつた波斯國の拜火教も亦稍や之に似たる習慣を有して居つた之れ皆罪惡の懺悔および赦罪哀求の表號に外ならぬ

蓋し人類は之れを精神的に觀察すれば海中に溺死せんとする人の如し、罪惡の海深くして身は海底の藻屑と成り果てなんとする、噫此死の海より我を救

はん者は誰ぞやとは獨りパウロやアウガスチンやルーテルの輩のみの歎聲ではない實に萬人の歎聲である而して罪惡の海より吾人を救出する者はナザレの耶蘇基督であると謂ふのが基督教の精髄として教ゆる所のものである

基督が人間を罪惡の煩悶及び罪惡の力より救ひ出し給ふ方法に二つある一は神の慈愛を闡明し給ふ事二は其犧牲の生涯である、獨逸の碩學フライデレルは其廣澣なる『宗教哲學』に於て基督の救を基督が神の愛にして父なる事即ち「神の父情」を人類に明白に顯彰した所に存すとなして居る、蓋し人生の不安苦惱は大實在者の仁慈を信ぜざるに歸因するではないか疑ひあり煩悶あるは畢竟するに愛の神を信ぜざるに因由するのである、而して人間が自己の罪惡に苦み泣き失望自殺するのは神が父情を有して悔改する者には赦罪を與へ給ふといふ事を知らざるが爲めである、基督は神を父と呼び滿腹の信賴もて自己の運命を父に委ね悠々として優々自適せられた而して此神の父なりてふ大確信は其教の根本原理をなして居る、路加傳十五章に記されたる一匹の迷

羊、失はれたる銀貨、放蕩息子の話は如何に神が愛にして人間を救はんと焦心し給ふかを敎へて明白痛切である(十五章一―二四)、パウロは「罪の增す所には慈惠も亦いや增す」といふて神が罪人をも愛し給ふの切なるを明言して居る既に神が愛ならば罪人たる人類は最早罪惡に失望し苦悶するの必要はない、此眞理の光明を提げて暗憺たる罪惡に臨まんか、暗きは光に勝たず、今迄我を苦めし暗鬼は忽ちにして消失し去るのである、フライデレル神愛の悟りを以て基督の救となしたのは大なる眞理と謂はねばならぬ、然し乍ら基督の救は之に盡くるに非ず其犧牲獻身の生涯は亦救の一要素をなして居る、彼が「普く巡ぐりて善行をなし」終に十字架上に犧牲獻身し給ふたのは人間の罪惡に對して大關係を有して居る吾人が十字架を冥想し罪惡に對する基督の同情を思ふ時吾人の胸中一種の靈力の油然として湧出するを覺へ奮然として罪惡の支配を脫する事が出來る、パウロは此間の消息を發露して自己の靈力の出所を言出して「基督の愛、われらを勵ませり」と叫んで居る

前來述べ來れる所之を要するに人生の煩悶苦惱は迷と罪惡との二つより來り又此二つが經緯となりて人生の苦痛を織り出す所以を說き、迷に對しては智を啓き罪惡に對しては基督に依れる天父の聖旨を會得して迷を離れ罪惡を脫すべき事を略述した、而して基督敎が此智と救とを具有し居る事をも一言して置いた、去れば殘る問題は此世界(寧ろ宇宙)は苦界か樂界かの問題である吾人の所見に從へば世界は本來は樂界であるが各人の智と信との異同に從ふて苦界ともなり樂界ともなるのである、智なく信なき者は現世を苦界と思惟せざるを得ぬ佛者の所謂火宅と思はざるを得ぬ、煩惱の犬常に胸中に吠へ罪惡の烈火心頭を燒く者誰れか世を樂觀し得んや彼等に對しては世は苦界である、然し乍ら事物變遷の理に安住し罪惡の慾火の滅したる人には世界は大實在者(神)の顯現にして吾人の樂園である、禽獸草木一として神の大能を顯現せざるものなく日月星辰亦神の榮を吾人に傳ゆる神の聖工である詩篇に曰く

もろもろの天は神のえいくわうをあらわし穹蒼(おほぞら)はその手のわざをしめす、この日ことばをかの

日につたへ、このよ智識をかの夜にをくる、語らずいはずその聲きこえざるに、そのひゞきは全地にゝのまねくそのことばは地のはてにまでをよぶ神はかしこに帷幄を日のためにまうけたまへり、日は新郎がいはひの殿をいづるごとく勇士がきそひはしるをよろこぶに似たり、そのいでたつや天の涯よりしその運りゆくや天のはてにいたる物としてその和煦をかうぶらざるはなし、

基督が其靈眼もて野の花、空の鳥に天父の支配の透徹せる事を敎へ給ふた語に

なんぢら天空の鳥を見よ稼ことなく穡ことを爲ず倉に蓄ふることなし然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり爾曹之よりも大に勝るゝ者ならずや……野の百合花は如何にして長かを思へ勞ず紡がさる也、われ爾曹に告げんソロモンの榮華の極の時だにも其裝この花の一に及ざりき、神は今日野に在りて明日爐に投入らるゝ草をも如此よそはせ給へば況て爾曹をや云々

實に宇宙は神の顯現である此理を明白に敎へ自然界の信賴すべきを敎へたる者は基督に如くものはない博士グラントは其著『世界の諸宗敎』の末章に於

てイエスを論じ此事に說き及びて曰へらく

イエスにとりては世界は外部的超自然の神受造物に非ずして天父の意志を反射したるもの亦包藏するものなり、彼(イエス)は子が父の書ける書物、父の畫ける繪畫、父の搆み立てたる音樂を愛するが如くに世界を愛しぬ、蓋し此等數者は父を顯現するものにして子は心より之れを愛好す、イエスが世界に對する實に此の如くにてありき、イエスは田舍に生活して都市には稀れに寄寓するに過ぎざりき、其エルサレムに上るの時すらも夕にはオリブ山に登りゲッセマネの園に遊びベタニヤに親しき家庭を見舞ひぬ、彼は其弟子等をば或は田甫に或は小川のほとりに或は湖畔に或は百合花の生ずる廣野に或は鳥類の舞ひ歌ふ彼所に、或は山腹に或は微風そよ吹く丘上に或は巖窟に滿てる谷間に導くをもて其習慣とはなしぬ、而して是等の光景は一々イエスの敎にそが基礎を供給し若しくは之れが說明を與へたり即ち言へらく「野の百合花を見よ」「かの草を見よ」「空の鳥を見よ」と彼は實に此の如くにして其最も福音的なる敎訓――――爾の敵を愛せよてふ敎訓――――をば神が爲し給ふ尋常一樣の事柄の中に發見したり曰く「天の父は其日を善者にも惡者にも照し雨を義き者にも義からざるものにも降らせ給へり」と願ふに此の如き世界觀は之れ眞に物質界を聖化するものにして前代未だ曾て見る能はざりし所なり

既に宇宙が神の顯現ならば吾人は宇宙を觀じて之を一大樂園と見る事が出來

る況んや人生の苦痛が智を啓き靈力の發達に資する所あらば之れも善し是も善しと樂觀する事が出來る

神を敬て足ることを知るは大なる利なり、われら何をも携へて世に來らず亦何をも携へて往くこと能はざるは明かなり、それ衣食あらば之をもて足りとすべし富むことを欲する者は患難と罟(わな)また人を滅亡と沈淪に溺らす所の愚にして害ある萬殊の慾に陷るなり(提摩太前書六章)

第六章　宇宙の本体

晴夜天を仰げば無數の星が榮を競ふて輝ひて居る而して其數の無數なるヘルシェルの望遠鏡に映ずる星は一億萬にしてロッゼの望遠鏡に映ずるものは十億萬を算すると云ふ事である、而して望遠鏡の進歩するに從ひて彌々益々星の數が多きを加ふるのである宇宙はかく廣大無邊なるものであるが今如何にして此宇宙が形成せられたかと謂ふに科學は日月星辰の起源を流星にありと敎ゆるのである流星とは吾人が晴夜に天に見る所の飛ぶ星の事である、流星の事に關して多年研究したる天文學者の記錄に依れば月なき晴夜に一ヶ所より一人の目に映ずる流星の數は一時間十四位であるといふ事である此計算に從へば全地球上より見らるゝ流星の數は一日平均二千萬位である然し乍ら地球上から見らるゝ流星の數は空間に飛び廻る流星の最小部分に過ぎぬ然かも一年間に七十億萬の流星に出遇ふとすれば空間に飛行する流星全体の數は

如何にも莫大なるものと見ねばならぬ、加之太陽は太陽系の諸星を引率して一秒二十哩計りの速力を以て空間を奔りつゝある一秒二十哩の速力とすれば一年にザット六億哩の割合である而して到る處流星に出遇ふのであるから流星の數は殆んど無限と謂はねばならぬ今若し各流星の大きさは甚だ小なるものにして平均一オンスの重量に過ぎずとするも而して相互の距離は流星の河の塲合に於て各二百哩隔つと假定するも空間に於ける流星の全体の分量は實際無限と謂はざるを得ざる程である

既に流星の數が空間に無限にして天文學者の教ゆるが如く流星が集合して河をなす事ありとすれば彼等が衝突したる塲合には亦無限の熱力を起す事は明白である、衝突によりて起た熱力は衝突の力が變形したるものなる事は言ふ迄もなき事であるが偖て此力および力の結果たる熱力は速力の多少に準じて增減するものである例せば暴風が一時間百哩の速力を以て動いて樹木を倒し家屋を破壞すこせんか同じ分量の空氣が若し一秒三十三哩半の速力にて走り

たらんには其力は一億四千四百萬倍の多きを加ふるのである、ダイナマイトが如何にしてかゝる破壞力を有するかといふに瓦斯が非常なる速力を以て膨漲するからである此理由があるから非常なる速力を以て空間を飛行する流星は地球に接近すれば假令空氣の極めて稀薄なる所に來るも空氣と衝突して多くは燃燒し去るのである今若し天地開闢前に於て無數の流星が空間を滿たし非常なる速力をもて四方八方に飛行し流星の河となり而して互に衝突したりとせよ太陽恒星惑星雲彗星を形ち造るの基礎は充分に此處に得らるゝのである

サムエルレーングが其『將來の問題』(プロブレムス オブザフユーチユア)に於て此事に說き及びてかくいふて居る曰く

流星の稀薄なる集合は衝突する事も少なく從て熱力も少なきが故に彗星および星雲と成り流星の二大流の衝突はシリアスの如き劇甚なる熱度の恒星を產出したりシリアスの如き恒星が其熱力を發散して收縮するに至れば我が太陽の如き程度に冷却し……其冷却の進むに從て遂には死星と成り終るべし

然れども死星も永久に死星ではない何時かは此數多き死星と死星とが衝突し

て其少壯の氣鋭を挽回し再び其新生涯を始むるの時がある

今一歩を進めて流星なるものは何物であるか、如何にして存在するに至りしかと謂ふにそは地球上に墮ち來る流星(即ち所謂隕石)を試驗して知る事が出來る今此試驗に依るに地球上に墮ち來れる流星は皆衝突若くは爆發によりてより大なる体より分裂したる斷片たるの有樣を呈して居る、博士クロールは此事實よりして「衝突説」を主張した彼が『星の進化』(エターラーエヤルーシヨン)に説く所の大体の説は是れである

殆んど無限時の間、殆んど無限數の暗星即ち冷たく黑き固形の塁が非常なる速力もて八方に無限の空間を突進しつゝありさ時としては彼等は衝突したり而して(機械力の源理が示す如く)劇甚なる熱を生じたり其熱度の劇甚なる事は星の全体を瓦斯体に變ずるに充分なるものなり唯だ爆發瓦斯が突然に發生せらるゝ結果として星体の表面に存在したる物質の斷片が幾分か飛散する事を免かれず

此飛散したる斷片が即ち流星其物である果してクロールの謂ふが如き衆多の暗星が空間に存在し亦突進しつゝありやといふに、そは吾人が見うる星に關

して知る所のものから推[illegible]して確實なりと認めざるを得ぬ、夫れ見ゆる星は其熱度に多少の異がある事は人の克く知る所である例せばシリアスの如き白星は非常なる高熱を有しアルデバランの如き深赤星は低熱を有して居る而して太陽はシリアスとアルデバランとの中間に位する熱度を有して居る月に到ては死星の適例である、月が死星と成たのは言ふ迄もなく其形の小なるが爲めに早く熱が發散し去たからである、月が死星となりしが如く赤色の諸星は幾百萬年後には亦死星と成るべきは當然の事である而してそが死星と成りて人目に見へずなつても以前の運行を繼續して一秒時間に早きは四百哩の速力もて(多くは圓形を稀には直線を)進行する事も疑ひなき所である盖し物理學の法則に從へば物体の運動は若し之を妨ぐるものなかりせば永久に其以前の運動を繼續すべきものであるからである

かく種々の方向に突進する幾多の暗星の間には時としては衝突が起る筈である而して其衝突によりて生ずる熱力は如何に之れを少なく見るも新らしき太

陽星雲を生じ且つ現に見るが如き森羅萬象を起すに充分なるものである而して近世の天文學者は暗星の數が明星の數に比して遙かに多數なるべき事を思惟する樣に成て居る

斯く記述し來れば宇宙の廣大無邊なる事は自ら明らかであるが更に恒星の事を稽ふれば宇宙の大を一目瞭然たらしむる事が出來る天文學の敎ゆる所に依れば恒星の最も近きものはセントール座のアルファ星である而して此アルファ星は一年僅かに一分計りを動くのみであるが其地球との距離は殆んど百萬哩の二千萬倍即ち二〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、哩である、光線は一秒時間に十八萬六千哩を奔るものであるが此速力を以てしてもアルファ星より地球に達するには三年と八十三日の日數を要するのである而して此距離は恒星としては最も近い方である若し强力なる望遠鏡に非ざれば見へぬ幾百萬の他の恒星に至てば其距離は是れよりも遙かに遠いのである、天文學者の計算したる所に依れば一年僅かに半秒以下を動く恒星が八つ計りある、而して

其距離はセントル座のアルファ星に比して二倍乃至十倍でなければならぬ、斯かる遠距離より地球上に送り來る光の度より推察すれば其熱度は我が太陽に比して更に幾層倍するものと思はるゝのである、サムエルレーングが其『近世科學』中に叙述する所に依れば

アルファ星(第一星)の熱度は太陽の熱度に比して二倍半シリアス(天体中最も光輝ある恒星)の熱度は三百九十倍なり

勿論こは正確に其形大と熱度とを表はすものに非ずと假定するも宇宙の大を認知する事が出來る」

アルファ星より來る光線は一秒時間に十八萬六千哩を走りつゝ地球に達するに三年と八十三日を要するとせば吾人が見るアルファ星は三年以前のアルファ星にして現在のアルファ星ではない、シリアスは其光線を地球に送るにアルファ星の殆んど六倍を要する、去れば吾人が見るシリアス星は二十年前のシリアス星にして今日のシリアス星ではない第十八級の恒星の光線が地球に

達するには實に二千年計りを要する割合であるから吾人が見る第十八級恒星は二千年前のものである

宇宙の廣大なる事は之れに盡くるに非ず此外如何に强力なる望遠鏡を以てしても別々の星体として見へず唯雲の如く見ゆる星の集合が遙かの向ふに見らるゝのであるが之れは其距離が餘まりに遠隔であるから其星体を別々に見る事は出來ぬのである而して此星雲の形は圓形なるあり花束形なるあり螺線狀をなすあり、其他種々の形狀をなして天の彼所此所に散在して居る是等の星雲の或物は近時望遠鏡の進歩とゝもに無數の恒星の集合にして別種の宇宙を形造るものなる事を知るに至た而して星雲の他の者は分光鏡の示す所に依れば燃ゆる瓦斯の大塊にして他の宇宙を構成しつゝある最中にあると云ふ事である

宇宙の大は略ぼ領會し得られたとすれば吾人は更に諸星体の本質の何物たるやを知らねばならぬ而して現時人智の進歩は斯く幾千萬哩若くは幾十億萬哩

を隔てたる諸星の本体が何物なるやを知る事を得る樣に成て居る、之れは分光鏡(クトロスコープ)を用ひて天体より來る光線を分解して其成分を知るのである一科學者は分光鏡を說明して曰く

此驚くべき器具は吾人をして有らゆる光体より來る光線を分解して（其光体の成分が如何に複雜なりとも如何に遠隔なりとも）其成分を確實に闡明する事宛かも其一部分を地球上に持ち來り試驗室にて分解するが如し

吾人は分光鏡によりて天体が各瓦斯体なりや流動体なりや固形体なりや亦そは自己の光熱によりて輝くや反射によりて然るやを知る事が出來る而して其光線を分解して地球上の諸元素が各發射する光線と比較對照して各星の成分が地球上の元素と同じきや或は地球上に知られざるものによりて構成せるゝかを確知する事が出來るのである而して分光鏡が發見したる第一の事は太陽恒星星雲彗星流星を構造する原質が地球上の物質と同じものであるといふ事である別言すれば諸天体の成分は地球を構成する物質と同じ元素なる事を確

かむる事であつた、サーエスロックヤー氏の試驗に依れば太陽恒星彗星流星が發射する光線の性質は地球上に墮ち來る流星(即ち隕石)が試驗室にて發射する光線の性質に同じである然らば天の諸体は隕石と同じ物質によりて成るものにして地球の成分と殆んど同じものなる事を推斷する事が出來るのである偖而宇宙の諸星体が地球と同じく物質によりて成るものとすれば次に起る問題は物質とは何ぞやといふ事である、科學者は物質が分子(モレクル)より成り分子が亦微分子(アトム)より成る事を説明する、然らば微分子とは何ぞや現時知られたる元素の數は一百に近い然し何人も此一百計りの元素が物質の終極なりと想像する事は出來ぬ此元素には必ずや亦其元子があり結局一百の數は漸次減じて唯一元素に歸するを得る事を見出すの時が來るに相違ない否今其時に到着して居る實際古くより諸微分子を一元素に歸せんと欲するの企圖即ち諸微分子の基礎たる一元子を發見せんとの企圖は斷へず行はれて居たのである、プロウトといふ化學者は諸微分子の元子を水素であると主唱した盖し水素は元子中の

最も輕きものにして他の元子の重量の割合が水素元子の重さを幾倍かしたるものに等しいからである然し乍がらサーダブリユークルークスはヒリアムが水素よりも輕き元子である事を見從て是れが終極の元子にして之れから諸微分子が製造せられたと主張した露國のミンデレヂエフは諸微分子の特殊の熱親和力等の昇降が鋸齒狀をなす事を發見して一元の解決に一歩を進めた」學者が諸微分子の奥に立ち入て諸微分子の基礎たるべき一元子を發見せんと苦心するのは無理ならぬ事である盖し人心は到底多元を以て滿足し得るものではない、どうしても多元の根本たる一元を發見せずしては止む事は出來ぬ故に科學者は必ずや諸微分子の間には共同の基礎を有するなるべしと思惟して其研究を進めたのである啻に一元は人心の要求なるのみならず實際諸微分子は一元子が種々に其結合の有樣を異にせるものに過ぎざるなるべしと思はる、事實に乏しくない、パウロケ、ーラスは其『根本問題』(ファンダメンタル プロブレム)に於て左の事實を擧げて一元説の助となして居る

金剛石、墨鉛、純石炭、および煤は其實質より謂へば同一なり則ち皆炭素なり然かも是等は猶ほ異なれる性質を有する根本的の異物なり金剛石は水の如く清白にして空氣の如く透明なり而して自然界の最硬なるものなり石炭墨鉛および煤は最も黑きものにして紙面に黑痕を遺す程柔かなるものなり金剛石は稀有貴重のものなれども炭素の他の結合物（石炭等）は自然界に充滿す、而して是等の單純なる物体の異同は全く（分子）結合の形狀の異なるに起因す

實に同一元素の結合の有樣の相異は物体の異同を生ずるの起因らしく思はるゝ例せば $C_2H_4O_2$ は醋酸幷びに蟻酸のメシール依的兒を示す記號であるが前者は酸であり後者は中和物である而して醋酸の沸騰點は蟻酸のメシール依的兒に比して殆んど九十度高いのである同じ元素の結合したるものも其結合の有樣の異なるに依りてかゝる相異を生ずる葡萄糖は $C_6H_{12}O_6$ であるから前二者と同じ元素によりて成り立ち結合の割合も同じ事である然かも其性質は前二者とは全く異なり甘味にして結晶し醱酵するものである

既に同一元素が同一の割合に結合したるものが全く異なれる物体を生ずとせば諸元素も亦同一の根本的元子が種々と其結合の有樣を異にして生じたるも

のに過ぎざるものではあるまいか之れ當然思ひ浮ぶべき疑問であるが前に一言せるプロウトクルークス、メンデルヂェフ、の一元的解釋は此疑問に答へんとしたる企圖である而して近時の科學者は此疑問を殆んど完全に解決するに至た、夫れはかの有名なる電子（エレクトロン）說である電子說とは諸微分子の根本的元子は電氣の分子則ち電子（エレクトロン）と稱する極々微細なる元子にして此元子が種々に結合して諸微分子（アトム）を形造つたのであると云ふ說である、是れは或電氣的試驗の結果微分子（アトム）が幾個にも截碎せらるゝ事を發見したのとラヂユムの發見及びラヂユムと同じ種類の動作を他の物質内に幾分か發見したるとによりて微分子も之れを分割若くは分解する事が出來るものである事を認識したるに始まつたのである而して微分子より分割若くは分解せらるゝ此微細なるものは即ち電氣の元素にして電子と稱せらるゝ所のものである、此電子なるものが諸元素の根にして終局の元子であると云ふのが今日科學者の學說である而して此元子の微細なる言語の外にあるものにして元素中最も小なる水素の一微分子中

には殆んど一千の電子が含まれ曹胃毋の微分子中には一萬六千、ラヂユムの微分子中には十六萬の電子が含まれてあるといふ事である而して其大さを言へば一電子の大さは微分子の平均の大さの十萬分の一以下に過ぎぬ實に驚くに堪へたるものであるが更に驚くべき事はかく微細なる電子が微分子の中を大宇宙となして四方八方に活動しつゝある事である英國の大科學者サーオリバーロッヂが其ローマ子ス講義の『近世の物質觀』中に電子の事を說て左の如く言ふて居る

> 微分子は電子と稱するものの集合体なり而して此電子たるや微分子中にありて迅速なる運動をなしつゝあるものなりとす、去れば此電子が總ての物質の根柢を組織するものなりと推斷するは實に似是なる事柄なりとす……此見解に從へば物界の全体を組成する成分は則ち電氣に外ならず
>
> 而して微分子を組織する電子間の空間は之れを電子の大きに比すれば廣大なるものにして太陽系の諸惑星が相互に有する空間の割合に讓らず

電子が如何に微細なるものなるかを領會せんが爲めに分子の小を一言して置

かふ、學者の謂ふ所に依れば亞鉛若くは銅は之れを一インチの七億萬分の一の厚きに分割するも依然として其亞鉛若くは銅たるの性質を失はず則ち分子に復歸する事はないそうである石鹼水の薄皮は厚さに於て一ミリメートルの百萬分の一迄は其石鹼たるを失はぬといふ事である而して水の分子の大きさは直經に於て殆んど一インチの五億萬分の一である、詳しく言へば若し水の一滴(小豆大の一滴)を地球の大きに膨脹せしめたならば之れを組織する分子の大さは大なる護謨毬位に相當するに過ぎぬ實に小なるものではないか、一インチの千分の一の立方體に相當する蛋白質内に含む分子の數は七十一兆萬である、ソルビー氏が一千八百七十六年に英國顯微鏡學會に於てなせる當撰の演說に曰く

> 哺乳動物の卵子は平均の直徑一インチの百五十分の一に過ぎざるものなれども、そが含有する分子の數は莫大なるものにして若し一時間毎に一つゝつ消滅すとせば其全体(一卵子を組成する分子の全体)が消滅し終るには實に五千六百年の歳月を要す

分子にして既に然かく小なり之れを組成する微分子の微細なる事も亦微分子を組成する電子の小も略ぼ想像がつくではないか

宇宙は斯の大は何處迄も無限であり小は亦何處迄も無限である而して此大宇宙も小宇宙も共に電氣の元素たる電子が其基礎をなして居るとすれば此電子はオリバーロッヂの謂ふが如く宇宙の根柢である果して然らば此電子こそ實に怪物と謂はねばならぬ、去れば吾人は更に一歩を進めて此電子の何物なるやを考究するの情勃々として禁ずる事は出來ぬ

勿論科學者は電子の本體を矢張物質なりといふ彼等は物質と勢力とは相待つものにして物質あれば勢力あり勢力あれば物質ありと見て物質と勢力との共存を主張する然し乍がら之れは吾人の滿足し能はざる二元說である吾人の知らんと欲する所は若しも物質と勢力とが共存すとせば物質が勢力を含有するものであるか勢力が物質を所有するものであるかの問題である即ち孰れを以て根本の存在となすべきかの問題である、唯物的なる科學者は多くは物質を

以て根本的の存在と認むる樣である彼等は人間の場合に於て身體を根本的存在と認め心的作用を其附屬性(即ち腦神經の作用)と見做すが如く物質の場合に於ても物質を根本的存在と認め勢力を其附屬性と見做すのである、然し乍がら物質とは何物であるか物質を說明するに分子を以てし分子を說明するに微分子を以てし微分子を說明するに電子を以てし、かくて電子とは何物ぞやの問に對し電子は則ち物質なりと答ゆるのは說明の當を得たるものではない蓋し吾人の今此處に知らんと欲する所のものは物質其物の本體にして物質の組織ではない

唯物論は物質を以て究竟の存在となし物質及び之れに附屬する勢力を以て宇宙萬象人間萬事を說明せんとする然し乍がら唯物論は其所謂物質を靈化(靈的のものと見做す事)するに非ざれば何物をも解く事は出來ぬ時代と成て來た何となれば今日の科學は宇宙の萬象が唯物論の主張する如く唯物質分子が偶然に結合したる結果に成るに非ずして本來整然たる秩序を有する宇宙なる事を如何なる邊に

も發見したからである何故に宇宙は「秩序整然たる全体」にして混沌無秩序に非ざるかは單純なる唯物論の到底説明する能はざる所である、今試みに近代の發見たる電子の有様を觀察せんに之れは元素中の最輕元素たる水素の一微分子を形成するに七百乃至一千を要しラヂユムの一微分子を形成するに十六萬を要する程微細なるものであるが科學者の謂ふ所に依れば其結合たるや秩序整然たるもので太陽系が太陽を中心として規則正しく運行するが如く微分子内を太陽系として規則正しく運行するのである諸天体の運行と電子の運行とは全く同一の法則によるので星界の法則は直ちに取て電子の法則として見る事が出來るのである今日迄人智が闡明したる所に於て安くにか混沌無秩序の跡を見出し得たか物質の在る所其處に必ず秩序がある秩序を離れて物質は存在するものではない、一元哲學の一學者ケーラスは其『根本問題』に於て左の如く言ふて居る

吾人は秩序の無所不在にして永久なるものなるを知る秩序は實に宇宙に遍滿す、こは之れ決して偶然に起り來りしには非ず自然の本性によりて然るなり

此故に唯物論は物質の説明を一變して之れを靈化するに非ざれば從來主張せられたる如き單純なる物質論を以ては到底宇宙萬象人間萬事を説明する事は出來ぬ樣に成た此故にハックスレーは吾人が前にも記したる如く其『生命の物的基礎』てふ論文中にかくいふて居る

宇宙には物質と勢力と必然の三者のみにして他に一物も無しと主張する如き唯物論は全く妄斷不當の言にして其根據なきや神學上の獨斷説と伯仲すと謂はざる可からず

夫れは兎も角も唯物論は物質の本体即ち電子の本体を説明して宇宙萬象人間萬事に終局の斷案を下す事は出來ぬ去れば吾人は更に一歩を進めて物質の本体の何物たるやを稽察せねばならぬ、吾人を以て見れば物質の本体は勢力である、ある物質が勢力を含有するに非ずして勢力が物質として現はるゝのである、今其理由を述べんに吾人が外物として知る所のものは皆感覺に因るのである感覺が基礎となりて外界に對する種々の智識が得らるゝのである今若し生れ

乍がらにして五官を缺如したる人間ありとせんか彼は外界の智識は毫頭有たぬのである五官が傳ふる所の感覺が基礎と成て外界の智識が得らるゝのであるから此意味に於て感覺を經驗と稱する（カントに依れば經驗てふ語は五官の智覺を意味す予も此處にては此意味に用ゆ）目なき者は色を知らず耳なき者は聲を知らず目なく觸覺なき者は形を知らず、之れが自然の數なるを思へば吾人の外界の智識が五官の經驗に原由することも自ら明白であらうと思はるゝ

但し此所に注意すべきは五官の經驗が其儘直ちに智識と成るに非ざる事なり、ロックは人心の
は空室白紙の如しと唱へて感覺が其儘智識と成る事を主張したれども、カントは人の心には本
來或法則を有すとなし此法則に從て感覺より得たる經驗を處理すと唱へたり別言すれば五官の
經驗は材料にして此材料を取捨して智識を組立つるものは人の心に本來固有する法則（カント
は之れを範疇と稱しぬ）なり去れば智識は五官の材料と主觀の法則とが相待ちて生じたるもの
となすべしと敎へたり

ロックに從へば感覺が其儘智識と成るのであるがカントに依れば感覺は智識の材料である孰れにしても外界の智識は感覺に始まるものなることは疑なき

事實である然らば一歩を進めて感覺とは何ぞやと問はゞそは外物が五官に接觸して一種の單純なる心的作用を惹起するを謂ふ然し五官が受くるものは外物其物に非ずして外物より來る勢力である此勢力が感覺神經を傳ふて腦髓に波及し玆に外物の印象を留むるのである若し外物に五官に觸るべき勢力なしとせば五官に感覺の起り樣がない、物と物との關係は唯だ力の關係である一物が他物に觸れて其力を及ぼせばこそ他物も活動し始むるのである若し相互に及ぼすべき勢力なくば永久に無關係にして共に其存在を知らぬ譯である故に吾人が外物の存在を感覺するのは外物の勢力が五官に觸るゝからである別言すれば五官が外物の勢力を受くる所から感覺が起るのである決して外物其物が腦髓中に入り來る譯ではない、吾人が雀を見る時に其雀が吾人の腦中に飛び込み來るに非ずして雀なる生物が吾人の五官に及ぼす勢力の印象を見るのである事は申す迄もなし花の麗はしきを愛づるも同じ花が眼中に飛込み來るに非ずして花の勢力が視覺に觸るゝのである

更に之れを説明せんに物体は色を離れて見る事は出來ぬ即ち物体あれば必ず夫れには色がある色なき物体は想像する事たに出來ぬ而して此色なるものは物体に固有するものではない、物体より來る光線の波動の多寡によりて各異なりたる色が見へるのである則ち物体の色は色として吾人に傳はるに非ずして光線の波動として吾人に來るのである此物体に不可離の色が物体其物に存するものに非ずして光線の勢力が吾人の五官に與へたる印象の結果に過ぎずとせば物体其物の正体が少々怪しく成て來る、物体の立方体は觸覺と視覺とが相待ちて知るに至たものであるが觸覺は抵抗の感覺に外ならぬ而して抵抗は外物の勢力が觸官に觸るる事ではないか、果して然らば吾人が知るものは勢力のみにして物質ではない、かく言へばとて吾人はカントが其『哲學序論』(プロロゴメナ)中に略論したる如く

智識の材料は之を感覺に仰ぐ五官が與ふる印象是れなり然れども五官に印象を與ふる原因たる外物の本体に至りては吾人は之れを知る事能はず蓋し人智は現象を知るに止まりて本体(ノーメナ)を知る

事能はざればなり

と唱へて不可思議論の轍を蹈む者ではない蓋し吾人の知る限りに於ては五官に影響を及ぼすものは勢力であるから吾人は外物の本體を勢力なりと見るの外はない何を苦で此知り得たる勢力を棄てゝ物質を喋々するのであるか吾人は物質の存在を一度も見た事はない吾人の知るものは勢力のみである然るに此知り得る勢力の原因を有無の分からざる物質に歸するのは愚の至である、故に吾人は外物の本體を矢張勢力と主張するのである、而して個々の物体は勢力が吾人に現はるゝ格段なる形狀である之れを通俗的に謂へば個々の物体は勢力が現はるゝ有樣の異ふのである則ち勢力が物体として現はるゝのである譬へば勢力は俳優の如く個々の物体は俳優の假裝したるが如きものである俳優は一なれども假裝は千變萬化する勢力は平等なるものなれども之れが差別として現はるゝ時は千變萬化する、一例を擧げんに光線の波動が一インチ内に三萬九千あれば目に映じて赤色となり四萬二千あれば橙色となり四萬四

千は黄色四萬七千は綠色五萬一千は青色五萬四千は青黛色五萬七千は紫色となる若し之を一秒時間内に於ける波動の數より謂へば赤色は四七七、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、橙色は五〇六、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、黄色は五三五、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、綠色は五七五、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、青色は六二二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、紫色六九九、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、である而して之れは皆白色の光線が其波動を異にするものに過ぬ、此の如く物質の本体は勢力なれども其勢力の現はるゝ有樣の異同によりて物に異同を生ずるのである換言すれば物体の異同は勢力が現はるゝ形狀（モード）の異同ある而して其本体を極むれば一勢力に歸するのである

通俗の見に從へば物質が基礎にして勢力は附屬物である物質が勢力を含有して居るのであるが之れは非常なる間違である、吾人の見に依れば勢力が基礎にして物質は勢力が現はるゝ形狀若くは有樣である物質が勢力を含有するに

非ずして勢力が物質として現はるゝのである之れ前來の説明によりて略ぼ明らかなるべしと思はるゝのであるが更に電子の例によりて一言せんに先きにも言へる如く電子の微細なる最輕の元素たる水素の一微子を組成するに七百乃至一千を要し最重の元素たるラヂユムの一微分子を組成するに十六萬を要すと謂ふを以て考ふるに電子は既に物質と稱し難き程のものである而して斯く多數の電子が一微分子内を一大宇宙として飛躍運行すと謂ふに至ては益々其本体の勢力なるべきを想はしむるものと謂はねばならぬ而して電子が一大宇宙とする微分子は一分子を形造くるに電子が微分子を組成するに讓らざる程多數を要し亦分子は顯微鏡的の一物――例せば直經一インチの千分の一に過ぎざる立方体――を形成するに七十一兆億を要すとせば之れが最終の基本をなせる電子の微細なる想像の外にして吾人は其本体の勢力なるべきを想定せざるを得ざるを感する

若しも電子の本体廣く謂へば宇宙の本体が勢力なりとせば然らば此勢力は如

何なる勢力なるか、盲動無法の勢力なるか抑も亦合理的なる明智の勢力なりやを研究せねばならぬ

元始に神天地を創造たまへり、地は定形なく曠空くして黑暗淵の面にあり神の靈水の面を覆たりき（創世記第一章）

第七章　宇宙と神の關係

古來宇宙の實体の何物たるやは哲學上の大問題である謙遜なる科學者は概ね之を不可知の事となして居る、サムエルレーングは公平なる科學者であるが彼は其『將來の問題』（プロブレムオフザユーチユア）の第三章の終りに此事に論及して左の如く謂ふて居る

予は幼時に於て諸星を仰視して其意味は何ぞや、そは安くより來りしや其向ふには何物が存在するやと自問したり而して其が唯一の答は暗中に眼を見張るが如くに痛ましき頭痛の類に過ぎざりき、而して感謝す近世科學の發見は予をして見ゆる諸星の向ふを夥だしく窺知せしめ無限の大と無限の小と無限の過去とを領會せしむ然りと雖最終の問題（宇宙の實体）に對しては予は今も猶ほ幼時の感覺を一歩たりとも超脱するものに非ず、予は見張りたる眼もて不可知を睇視す而して其睇視や徒勞のみ、人は不變の法則によりて結合せる宇宙の可知的現象の後に何物をか見若くは見たりと想像するならん即ち或人は人格的神を或人は人の意匠の如き意匠を或人は生ける全体を或人は普遍の心靈を或人は幻象を或人は涅槃を見たりとなす、然かも予に於ては若しも正直に自己の所信を告白せば予はテニソンと丶もに

見よ、予は何物をも知らず（實体に關しては）と謂ひ得るのみ

これ則ち不可思議論者の態度である、今不可思議論てふ語の起源を稽ふるにそは殆ど一千八百六十九年頃教授ハックスレーが造り出した語である、ハックスレーが一千八百八十四年に書ける論文中に不可思議論に就き左の興味ある事柄を記してある

殆んど二十年前予は予自身の如く物質の根柢――――哲學者や神學者が其正統異端派を問はず等しく知れりと公言する物質の根柢――――を全く知らずと告白する人々を指すの言辭として不可思議論者てふ語を發明したり、而して此語及び其關係語たる不可思議論（アグノジズム）てふ詞が漸次一般に採用せらるゝを見るは予にとりて稍快心の事なりとす――――かくの如くんば予は「不可思議論者」てふ語に對して或る特許權を有する事明かなり、こは是れ予の商標なり而して予は「不可思議論」とは本來何を意味せしやを正當に記述するを得といふの特權を有す、不可思議論は古今科學の精髄にして人は知り若しくは信ずと公言するに相當はしき科學的根據を有せざる事物を知り若くは信ずと言明すべからずといふの意味なり、――――不可思議論は單に現象の向ふに存在する事物は何物も知らずと公言するものなり

不可思議論に從へば人間の智力は本來現象を知るのみに限られて居るもので現象以外の事柄例せば宇宙の實体靈魂の滅不滅、神の存否の如き問題は人智の外にある不可知の事柄であると斷定するのである別言すれば不可思議論は宇宙を可知界と不可知界とに區別し現象を可知界となし實在を不可知界となし人智を現象界のみに限らんとするのである、ハックスレーが現象の向ふに存在する事物は何物も知らずと公言するのは此意味である、

ハルバルトスペンサーは不可思議論の泰斗にして不可思議論に高尚なる哲理を與へたる人なるが彼も矢張人智の現象界以外に出づる能はざるを極言して居る彼の『哲學原理（フラルストプリンシプルス）』は此道理を說明したるものであるが其前篇には實在に關する信仰が啻に人智の外にあるのみならず之を思念する事すら能はざるものである事を論じて居る曰く

宇宙が吾人に顯現する勢力は全く不可思議なり

吾人は……現象の奥に横はる實在が全く且つ永久に思料す可からざるものたるを知る、然

かも吾人は亦吾人の智力の性質を探求して何故に其然るかを知らざる可からず

スペンサーはかくして人智が相對的のものにして絶對に關しては何をも知り又考ふる能はざるものなる事を醇々として述べ立てた、カントも稍々之れと同一の結論に達した、予が前章に引用せるカントの『哲學序論』中に亦左の言をなして居る

認識の材料は之れを五官の感覺に待たざる可からず悟性は唯反省するのみ而して吾人に與へらるゝものは物夫れ自身にあらずして唯其外見のみ……外界に存在して吾人の感覺の目的となる物あるは疑なしと雖其物の果して何物たるやは吾人の毫も知らざる所なり然し吾人は唯其外見を知るのみ

果して人の智力は相對的のものにして物の外見を知るのみに止まり其本体たる實在(絶對)に就ては何をも知る事は出來ぬものであるとすれば人は五官の奴隷である吾人は不可思議論に滿足して五官の奴隷と自ら諦らむる事は出來ぬ、且つ人智の進歩は日新月歩にして昔不可思議なりしもの今は平常普通の知り切つたる事と成て居る例證は枚擧に遑あらざる程である、實驗哲學者たりしオーガスト、コントは不可思議論者以前の不可思議論者であるが彼は或る事物は永久に不可知として殘らざる可からずと主張し其例として恒星の化學的成分は人の永久に知り能はざる所なりと論じた、コントの此意見は其時代にありては至極道理ある事と思はれた、何となればシリアス及び他の恒星の一片を地球上に採り來りて分拆するなどの事は化學者にとりて全く不可能の事と思はれたからである然し乍ら此全く不可知と思はれた事が今は分光鏡の作用によりて容易に知り得らるゝのである、茲に面白き事はコントが星体不可知説を述べたと丁度同時代に獨逸の二學者は分光鏡を發明して恒星の光線を分拆しつゝあつた事である　分光鏡とは光線を分拆して其光線を發する物体の成分を確實に知る事の出來る三稜鏡であるかくの如く人智は日に月に進歩して殆んど際涯がない、

然れども不可思議論者は曰くそは現象に關する智識の進歩にして實在其物の大体に關する智識ではない科學の進歩は現象に關する智識進歩たるに過ぎず

して本体に關しては何等知る所あるものではない去れば實在界は永久に不可知であると成程一應道理ある言であるが、然し乍がら人は現象の現象たる所以を知らんが爲めには幾分か實在の智識ある事を要するのである換言すれば實在の智識なしには現象を現象として見る事は出來ぬ、例せば物を見て醜を感ずるのは幾分か美の觀念あるを要するのである、美を知らざる者は醜をも知る筈がない盖し醜は美に對した時に始めて醜の醜なる事が分かるのである花を見て赤なりと知るは赤に非ざる色を知て居るからである始めより赤のみを見て居る者は赤の赤たる事が分らぬ盖し赤を赤と知るは之れを他の色と比較して後に知り得らるゝ事であるからである、現象と實在との關係も亦此の如し現象を現象として知るは幾分か實在の智識を有せねばならぬ若し人智が現象のみに限らるゝものならば現象の現象たる事が分からぬ筈である事は宛かも赤のみを見て居る者が其赤たるを知らず醜のみを見て居る者が其醜たるを知らざると同一般である此故にスペンセルは人智を現象界のみに限れりと

極論し乍がら實在の性質を喋々して居る例せば其「哲學原理」第九十九頁には實在を無所不在と謂ふて居る曰く

各現象は之れを吾人の上に働く或る勢力の顯現と見做さゞるを得ず、假令遍在てふ事は思想し能はざるも現象に限りなきを見れば此勢力に際限ありと思ふこと能はず

又第九十六頁には實在が存在し居る事を謂ひ第百六十一頁には實在の發現といふ言を用ひ又時には實在は無始無終にして諸現象の原因たる事をも承認して居る、果して然らば不可思議論は純然たる不可思議論として徹底論出し難き事は明らかである、盖し人智が現象界のみに限らるゝものならば實在の存在する事たに知る譯がなく從て不可思議論が唱へ出さるゝ筈もない、不可思議論の在るは即ち人智が現象界のみに限られざるの證據である、

已に實在の勢力が無所不在にして無始無終萬有の原因にして現象の本体なりといふ所迄知り得るものならば更に一歩を進めて今少しく實在の性質を知られない筈はない、此故に獨逸の碩學ショウペンハベルは勢力の本体を意志と

立てた但し盲目なる意志にして人間の意志の如き意志ではない彼が一千八百十九年に出版したる『意志及觀念(ヲールドアスウイールエンドアヘアイヂア)としての世界』は此事を詳細に論述してある彼が何故に實在の勢力を物力とせずして意力と見做したかと謂ふに彼は宇宙の本体を知るには現衆の外觀に依らずして自己の内觀に依るべしとなしたからである以爲らく

宇宙の勢力の何物たるを知らんと欲せば外界の現象の觀察に依頼せずして内界の心を反省すべし

と別言すれば内界の心理を反省すれば宇宙の勢力が物力に非ずして意力なる事が分かるといふのである蓋し吾人が直接に知る勢力は自己内心の意力ではないか坐作進退の力は則ち意志の力である饑えたる時に食を求め渇したる時に水を飲むのは矢張意力の作用ではないか己に自己の意力を自覺して居るから物体が動き若しくは變化するのを見て之れを勢力あるが爲めであると知るのである、若し我れにして自己の意力の經驗なくば物体の變化し若しくは動

くを見ても之れを勢力の作用と思ふ事は出來ぬ筈である、然らば外界の勢力は自己の意力の經驗から類推して間接に知るのである唯物論者が物力を萬物萬事の基礎となし人の心意も物力の一變化に過ぎざるが如く唱ふるのは本末を顚倒したる淺薄の論である、何となれば吾人が直接に知る力は意力にして物力ではない、意力の自覺より推して物力を假定するのであるから意力は本にして物力は末であるされば事の順序よりすれば意力を以て物力の本源と見做さねばならぬ譯である、ショウペンハベルが物力を措き意力を以て宇宙の本体と立てたのは確かに卓見と謂はねばならぬ、然し乍からショウペンハベルが宇宙の本体とする意力は盲目なるもの無意識なるものである、盲目無意識なれども矢張物力とは異なれる意力であるフエーアベルンが其著『基督教哲學(フヰロソヒーオブザクリスチヤンレリヂオン)』中に厭世主義を論じたる條下にショウペンハベルの意力を名狀して左の如くいふて居る

ショウペンハベルの意志は物理學の範圍若しくは力としてよりも心理學の範圍若しくは執意と

して解釋せらるべきものなりこは之れ器械力よりも寧ろ動機力なりこは唯一普遍のものにして時間空間の外に超立し萬有によりて自己を客觀的に顯現しつゝあるものなり、一個人は則ち意力の本体を享けたるものにして意力は其全身に活躍しつゝあり……吾人の生存するは此意力の然らしむる所にして意力は則ち生存せんと執意するを以て其本質となす、吾人は生存せんと欲するの執意によりて生命を創造す……此意力たるや實に自我の本体にして總ての生命の根柢をなすものなり……但し此意力や無覺にして唯だ生存せんと欲する外何等の意匠をも有せざるものなり云々

盲目無覺の意力は宇宙萬象人間萬事を說明するに足らぬ、萬有が顯現するものは意力のみに非ずして此意力が明智の意力なる事を現はして居るではないか、宇宙間孰れを尋ねても勢力のみ在て智慧の現はれざる所はない勢力の現はるゝや必ず其現はれ方に秩序あり法則がある、無秩序無法則の勢力は何處にも見出す事が出來ぬ。去れば宇宙の本体たる意力は必ずや明智の意力ならざる可からざる事は理の見易き所である、此故にショウペンハベルの學系を承けて思想界に雄飛したるハートマンはショウペンハベルの「無覺意志」を以

て足りとせず「智識を兼ねたる無覺意志」を以て宇宙萬象人間萬事の基本とし て居る別言すれば無覺の實在は意力のみならず亦智慧をも含有するものなることを主張した彼は其『無覺哲學』に於て無覺意志が智識を兼有するものなる事を丁寧に論證して居る而して彼が之れを論證する爲めに眼球の構造の精緻なる事實を引用して無覺の實在が決して意力のみに非ずして智慧を有する者ならざる可からずと懇說する所は殆んど有神論者ではないかと疑はるゝ計りである蓋し一眼球の例に稽ふるも之れが本源たる大實在者は驚くべき智慧を有する者なることが分かるのである眼球が自然の進化によりて偶然に出來たものであることは唯物論者の說であるが之れは思はざるの甚だしき淺薄論である、成程眼球は眼球に非ざる單純なる神經中樞より進化したるに相違なき事は生物學の證明の如しである、然し乍ら之は決して偶然ではない自然の進化によりて眼球を生ずべきの觀念(アイデア)は眼球以前に大實在者の胸中に備はつて居たのである其觀念が自然の進化を待ちて實現せられて來るのであつて決し

て偶然に然るのではない啻に眼球のみならず萬物の進化は皆其通り大實在者の胸中に蘊蓄せられて居る思想が實現する道行である、故に總ての進化には目的がある無目的の進化は何處にもないラッド氏が其『認識論』(フヰロソヒーオフ、ーレッヂ)の第十六章を結ぶの言に曰く

今日の科學は昔日の人が信仰せしよりも一層明白に萬物に目的の存ずることを明示すといふも妨なし萬物は皆其內在的目的に向て絕へず進行しつゝあるものなる事は近世の科學研究に於ける結果が明證する所なり

既に進化と謂ふ以上は高等のもの若しくは高等の狀態を目的として向上發展するの意味ではないか、進化は則ち大實在者の營む所である、眼球の精緻を構成するものは大實在者であるからハートマンは大實在者が意力に加へて智識を有する事を唱へたのである之れハートマンがショウペンハベルに一歩を進めた所の點である

宇宙の本源が意力にして又智識を兼有するものなる事は餘り大した議論のない所であるが基督教は更に一歩を進めて大實在者に道德性のある事即ち正義

仁愛の神なる事を敎ゆるものである此處に至れば議論湧くが如く甲論乙駁隨分火花を散らすのである、ショウペンハベルもハートマンも吾人と手を絕ちて全く反對の側に立つのである、ショウペンハベルは世界を呪ふて「害惡の府」となし一分一厘も仁愛正義の跡なしと極言して居る或は

生命は連續せる欺騙なり大小の事柄に於て皆然り見よ生命は約束す而して履行することを爲さず

といひ或は世に幸福と稱すべきものなしといひ、或は生命を斷滅し生類を一燼して跡なからしむべしと唱へて世界には正義仁愛なるものある事なしと主張したのであるミルが世界の害惡を縱橫に枚擧して自然界の殘忍酷薄なる事ニイロドミシアンの奸智以上であると なした事は第二章に記述した通りである、ハックスレーも自然界には道義法の支配を見出す事能はずとなし左の言をなして居る

道德家の立場より見れば動物界は比武者(羅馬の演劇場に於て決鬪せし擊劍家)の演技に彷彿たり、諸動物は公平に取扱はれ又爭鬪せしめらる、而して其結果たるや最强最迅最奸なる者戰勝者として生存す……

……人間の生活に現はるゝ現象界にありて（之を支配する）道德的目的てふものを見出す能はざる事は猶ほ狼及び鹿の生活に道德的目的を見出す能はざると同一般なりとす……動物界に於けるが如く原人の間にありても最弱者最鈍者は失敗し最强者最猾者――――即ち其境遇に最も良く適當したる者――――が其道德上の善惡の如何に拘らず戰勝者として殘存したり

實に自然界に正義仁愛の支配を見出す能はずとの說は一應道理ある說である

天災地變疫癘疾病數へ來れば大實在者の善惡を疑はざる可からざる場合に乏しくない、然し乍ら之れ世界に於ける一面の事實にして事實の全体ではない、世界は一面は苦患禍殃の世界なれども他面は歡樂福喜の樂境なる事は第二章に述べたるが如しである、基督敎は人生の此一面のみを高調して大實在者の道德性を云々するものではない、若し快樂若くは幸福を目標として世界を吟味するならばショウペンハベル一流の厭世說が勝利と見ゆるかも知れぬ

盃し快樂と苦痛とはショウペハベルの謂へる如く分數の分子と分母の關係の如しである分子を增せば分母を增さねばならぬ如く快樂を增さんが爲めには苦痛をも增さねばならぬ心理上の關係に成て居る、去れば世に絕對の快樂な

く絕對の苦痛なし苦樂が經緯をなして人生を織り成して居るのである故に苦も樂もともに人生の目的と見る事は出來ぬ、人生の目的は進步にある向上にある進步向上が即ち吾人人類が世に棲息する所以である、之れは歷史や生物進化の事實が證明する所の事實にして科學者も多くは之れを是認して居る、

パウロケーラスは其『根本問題』（ファンダメンタルプロブレムス）に於て此事に說き及びて曰く

吾人は何の然めに生存するや吾人は何の爲めに奮鬪し又苦惱するや……曰く吾人は唯だ幸福を獲得せんが爲めに生存するに非ず吾人の理想を追ひ求め之れを實現せんが爲めのみ

人生は進步に對する間斷なき奮鬪なり、理想及び無限の向上に對する奮勵なり、こは之れ宇宙進化の法則にして宇宙全体に活躍する所のものなり

實に人生は樂まんが爲めの人生ではない進步發達せんが爲めの人生である見よ宇宙は絕へず進步しつゝあるではないか人生固とより進步發達を目的として居る、シルレル曰へらく「世の悲劇は人をして向上發展して苦樂以上に位する宇宙の道義法に一致調諧せしめんが爲めなり」と、若し人生の目的を進步向上と見る時は世界は善美の世界と謂はねばならぬ「萬事皆善し」と稱讃せ

ねばならぬ、吾人が第三章に叙述せる人類一体説第四章に説明せる自我永存説の光明に照して世界を觀察すれば大實在者は決して無道德者と見る事は出來ぬ、蓋し個人を全体より離れたる個別の者として見ればこそ世の悲劇は唯だ悲劇のみに終る樣なものゝ人類を一体として見れば悲劇は進歩を生ずるの母である、假令個人が全体の爲めに犧牲となるの苦患あるも全体の一部分として發達したる自我は大實在者の裡に永く其存在を繼續すべきを思へば世の悲劇は悲劇に非ずして進歩發達の手段たる事が明白である、之れ吾人が世の萬事を皆善しと觀ずる所以である、

ミル、ハックスレーの徒は自然界に毫も道德的支配の跡なしと謂ふと雖若し巨細に人の世を觀察せんか道義法の行はれつゝある事は歴々として見るべしである一哲人曰く

吾人にして深遠なる鑿穿を遂げんか不正の利益は最後には有害なるものたるを證するを見るべし且つ不正の利益が往々にして滅亡の始めなる事を見る事すらあり、眞理と正義とは生存競爭に於ける最も有力なる兵器なり、眞理と正義とは常に最後の勝利者たり、但し眞理の勝利を見るには一代以上の年月を費やす事も少しとせず然れども吾人は確證す假令眞理と正義の擁護者は死逝し彼等が不道德の敵に蹂躙せらるゝ場合にも眞理と正義とは殘存すと

此故にヒフテは宇宙間には道義法が支配すとなし嚴然として人生を審判して居ると主張した彼の所謂「宇宙の道義法」と稱するものは此事をいふのである顧ふに人類を一体と見做し人生の目的を向上進歩にありとして考ふる時は人生が道義法に支配せられつゝある事は之れを見るに難き事はあるまじと思はるゝパウロケーラスが倫理と科學を論じたる文中に曰く

智慧は生存競爭に於て狡猾よりも有力なる武器なり何となれば智慧は道德を欠如せざればなり、こはより多く宇宙の秩序に合一すればなり……野蠻人中にありて其生存競爭に殘存したる者は最も狡猾なる種族に非ずして最も智慧ある種族なりき

孰れの地方にありても道德に欠くる所あるの種族は假令そが最猾最强なる時すらも失敗に終はり更に道德的なる種族が終に勝利者として殘留したるは否む可からざる事實なり

パウロケーラスは有神論者ではない其標榜する如く一元論者（モニスト）である然かも人

生の事實を公平に觀察して說をなす所事物の正鴻を穿つものがある

今一歩を轉じて人間の性情を思ひ見よ人は愛を以て其性となして居るではないか君臣父子夫婦兄弟明友の愛は社會を織り成す經緯ではないか加賀の千代は我が亡兒を追想して

蜻蛉つり今日は何處迄行たやら

との名句を口吟んで居る、人情の美、此處に到て極まつて居る顧ふに人情美は古今の詩人文學者の絕好の題目として歌ひ且つ賞する所のものである傳へ謂ふ石川五右衛門は其釜入の時死ぬる迄我子を差上げて居たとの事である、天下萬人を敵としたる石川五右衛門も我子を愛するの情は常人と異なる所はない、然れども吾人は人情の例證を遠く又廣く求むる必要はない吾人は皆各仁愛の何者たるやを解して居る、此仁愛は其發達に如何なる進化の徑路を取り來れるにもせよ仁愛と迄に發達したる以上は人情の美として稱讃せざるを得ぬ、然らば自然界にはショウペンハベル、ミル、ハックスレー等の學者が唱ふる

如く仁愛の跡絕へてなしとするも人間界には之れが實現せられて居るではないか即ち大實在者が人間を通して自己を顯現する時に仁愛が現はれて來るのである、宇宙萬象人間萬事皆大實在者の營む所とすれば人間界の仁愛は大實在者の道德性の顯現と見るの外はない、去れば大實在者の正義仁愛を知らんと欲せば其最高の顯現たる歷史と人生を見ねばならぬ自然界は唯其智能と勢力とを窺ふに足るものである此故に歷史と人生を離れて大實在者の正義仁愛を知らん事は至難の業と謂ふべしである

自然界には大實在者の勢力と智能が現はれ人間界に其正義仁愛の現はるゝ事此の如しと雖基督敎が大實在者の正義仁愛を主張するのは人間界の事實のみに依るのではない、基督を通して其然る所以を確信するのである、蓋し基督は其品性の高潔崇高なる其人物の圓滿なる其至誠の熱烈なる其智力の絕高なる其敎の世界無比なる點より考ふれば確かに大實在者に近き御方である、近時神學界の研究眼目たる「基督學」の研究は基督が眞に「神の獨子」なる事を明

示しつゝある、基督教は此基督といふ人物の上に建てられたる宗教である、別言すれば基督教は基督を通して神を見、基督を通して神に近づく宗教である、而して基督に依りて現はれたる大實在者は即ち神――正義仁愛の實在者――である神は父なり愛なりとは基督が人類に顯彰せられたる大眞理である、基督教は此大眞理を大眞理として確信するものである而して此大眞理の光明を提げて宇宙人生を觀ずるものである、且つ基督の生涯は之れを神の正義仁愛の顯彰として見る事が出來るのである、其犧牲獻身なる生活は大實在者の心底を其儘發現し得たるものと見るの外はないされば基督教は何處迄も基督を教の根柢若くは中心として居る、

偖而大實在者が勢力智能の實在なるのみならず正義仁愛の存在者なる事を知るの論理は略ぼ說きたりとして更に進で重要なる問題に移らう、それは大實在者は有覺か無覺かの問題である、ショウペンハベル及びハートマンに從へばこは無覺の存在者にして人間の意識の如きものは決してない蓋し意識とは

何ぞや之を心理學上より考察すれば意識は主觀客觀の二要素より成るものである即ち主觀が客觀に對したる時に始めて意識といふものが有り得るのである、ラッド氏此理を其宗教哲學に關する講演中に述べて曰く

> 意識の作用ある時は自己以外に他物ありと云ふ客觀的の存在あるを要す、少くとも心中に意識の目的たるものなくんば其働を爲す能はず……意識が其作用を起すや己と他物と相對せざる可からず

ラッド氏又『認識論』(フヰロソヒーオフノーレッヂ)中にも此事を說明して曰く

> 認識とは認識する者即ち主觀と認識せらるゝもの即ち客觀との兩者が含有し居るものなり此兩者にして存せざれば認識は成り立つ能はず而して其兩者の關係を最も適當に言ひ表はす語は交通てふ語なり

認識とは意識を智的に見た名稱である、意識に主觀客觀の二要素を含む事は少しく心理學を學べるものが知る所の事柄であるから說明を玆に止むる事とし直ちに無覺論者の言ひ分を窺はんに曰く實在者は絕對である絕對は獨立である然るに意識の作用は自己と他物則ち主觀と客觀と相待ちて起るものであ

るから絶對者には意識がある筈がないといふにある、ショウペンハベルは絶對者（大實在者）が有覺者と成るのは人間と成て現はるゝの時丈けで其他は一切無覺盲目であると論じて居る、彼は無覺意志が人間と成て現はるゝ場合を睡眠より醒めて來る樣に謂ふて居る即ち曰く

意志は無覺の暗夜より生命に醒覺し來りて際限なき世界に於ける無數の個人とはなるなり

成程意識は主觀と客觀と相對した時のみ起るものであるから主觀のみありて客觀なき大實在者即ち絶對者には意識の生じ樣がないと云ふのは一應道理なる議論であるが然し人間の場合に於て意識が主觀客觀の二要素を要すといふのは之れ人間が獨立なき依立の存在者であるからではあるまいかラッド氏曰く

論者は絶對とは獨立なるものなり然るに意識の作用は自己と他物となかる可からず故に絶對者は意識なきものと論定するも余之に答へて言はん意識の自己と他物の二者を要するは人間の謂なり之れ即ち人間は獨立なきものにして我にあらざる實在者に依るものなればなり云々と

人間は獨立なきものであるから從て其意識にも主觀と客觀を要する別言すれ

ば人間は有限であるから其意識も相對的である然れども絶對者は獨立無限なるが故に其意識も亦絶對完全なるものと見る事が出來るヰッセは有覺哲學の泰斗である其精到なる議論の結論を約言して謂へば

人間は有限なるが故に其有する意識も從て有限不完全なり然れども絶對者は絶對なるが故に其意識は從て完全無缺ならざる可からず完全なる有心者は如何にしても絶對ならざる可からず人間の有心者たるは不完全なり

かくショウペンハベル派とロッセ派とは兩々相對して大實在者の人格、非人格（有意識無意識）を主張するのである、即ち一方は大實在者は絶對なるが故に無意識なりとなし一方は大實在者は絶對なるが故に有意識ならざる可からずとなし今日に至るまで哲學界の嶄然たる兩派を形成して居る

然し乍からロッセの説こそ眞を穿てるものに相違ない此絶大なる宇宙此精美なる萬物、行くとして秩序なきはなく法則なきはなく大は天体小は微分子の構造に到る迄一貫の大思想を以て經營する宇宙の本体たる大實在者が有意識

なるべきは殆んど疑を容れざる所であるロッセが謂へる如く大實在者は絶對なるが故に有意識ならざる可からずことは公平なる學者の結論である、ラッド氏はロッセの此點に論及して謂へらく

ロッセの說は此點に於て動かす可からざるものあり、人間は有限なり然れども是れ自覺あるが故に有限なるに非ず人間は有限なるが故に其意識も亦有限なり意識の作用は主觀客觀を要す然れども絶對者は其意識に於て凡ての他物を知り其他物に在る變化を知る然れども是等の他物及其變化は皆自己の意志によりて存し一つとして己れに依らざるなきを知るなり故に絶對者の意識に於て客觀となるものは人間の意識に於て客觀となるものゝ如く主觀に獨立對存するものに非ず故に絶對者の意識は人間の意識の如く他物に依賴し他物に制限せらるゝが如き有限の意識ならざる事を考ふるを得べし

大實在者が果して勢力智能、正義仁愛、にして而かも意識ある存在者とすれば基督教の信仰の根據は哲學上是認せられたものと稱するを得べきが如くに見ゆる然し乍がら更に重要なる問題が殘て居る夫れは萬有對神の關係である勿論萬有を直ちに神となす凡神說は神を無意識と認定するのであるから神を

有意識の人格者と立つる時は夫れで有神論は確定した樣なものであるが然し乍がら有神論にも種々あり凡神論にも色々あるから萬有對神の問題を明白に解して置かざれば一方には自然神教の樣な誤謬に陷り一方には純然たる凡神說と區別する所なきに至り從て基督教を破壞するが如き意外の結果に立ち至る恐れがある

萬有を神に創造せられたる獨立の体即ち神と離れたる存在物と見るのは自然神教の立場である然れども萬有と神との關係は時計師が時計を造つて之れに螺旋釘(チジ)をくれて置く樣な關係ではない萬有は機械的に動くものに非ずして有機的に動いて居る、萬有は死物に非ずして活物である、活物なるが故に進化がある、進化は生物にあるべきものにして死物にあるべきものではない、されば ダルウインの進化論が唱道せられたる以來自然神教は俄然として其立場を失ひ萬有を機械死物視する有神說は影を收むるに至つた然し乍がら現時にありても基督教徒の中には天地創造を字義の儘に解し神と萬有を全く別物の如

く考ふるものが少なくない、之れ第十八世紀代に於ける自然神教の幽靈たるに過ぎない、教授ワットソンは其『哲學大綱』中にかゝる思想を

舊思想の幽靈

と稱して居る、蓋し萬有に生々活潑なる生命は神自身の生命に非ずして何であるか神に賦與せられたる力に依るに非ずして神自身の生命である事は今日の有神哲學者が齊しく承認する所の事である、故に基督は野の百合花を飾り空の鳥を養ふものは神自身の直接の働に因る事を教へられた

然し乍ら吾人は萬有を以て直ちに神なりと思惟するの誤謬に陷てはならぬ萬有即神と唱ふるのは萬有神教即ち凡神教である、萬法是眞如、眞如是萬法とは佛教の教ゆる凡神説ではないか詳しく云へば萬有の全体は即ち神神の全体即ち萬有であると教ゆるのが凡神説であるが、吾人は此凡神説に與する事は出來ぬ、何となれば神は萬有よりも大なるものに相違ない即ち神は無限絶對であるのに萬有は有限相對である、有限相對のものゝ全体を捕へて之を絶

對無限と稱するの非理なる事は申す迄もなき事である、且つ萬有の本体は勢力である智識を兼ねたる意力であるから吾人は萬有を以て神の意力の顯現と見る外はない、詳しく言へば萬有は神と離れたる別個の体に非ず亦神と同一体にも非ずして神の意力の顯現である寧ろ神自身の顯現である、神が其意力を通して自己を顯現し給ふのが即ち萬有である、此故に萬有は神と人との交渉にして人を外にして萬有は存在するものではない萬有は人が、神を外觀するのである、然し萬有は神自身ではない神の顯現である、此理は予が第六章に叙述したる宇宙の本体が勢力にして吾人と直接の交渉を有するものは勢力の外何物もなしと謂ふ事を思ひ合はすれば自ら領解が出來ると思ふ、蓋し萬有は吾人が目に見るが如きものに非ずして唯だ勢力としてのみ吾人に影響するに過ぎぬ而して此勢力の影響を我心が種々に構造し之れを萬有として認識するのであるから之れが原因たる勢力は我以外にあれども萬有は我心内に形成する所のものである、故に人を離れて萬有はないのである、而して萬有の

起源が人間に交渉する勢力にありとし此勢力に智能ありとし我が心内に現はるゝ勢力が仁愛正義なりとすれば此勢力の本体は則ち神なりと斷ずるのは當然至極の事である、但し神の蘊蓄は萬有に盡くるのではない、萬有は唯神の無限性の有限の度に於て顯現しつゝあるに過ぎぬ、而して萬有の進化は着々として神の中に蘊蓄せらるゝ智德を顯現しつゝある、故にヘゲルは

宇宙は創造せられつゝあり

と謂ふて、宇宙が年と共に層一層神の智德を顯現する事を說て居る則ち宇宙は創造の途中にあるものであるから宇宙完成の曉には或は神の性德が圓滿に萬有に現はるゝやも知れぬ、

要するに吾人は萬有を神と別個の体となさず又神の自体となさず神の意力の發現と見るのである之れ最も學理に合するの見解である、

もろ〳〵の天は神のえいゝわうをあらはし穹蒼はその手のわざをしめす、この日ことばをかの日につたへ、このよ知識をかの夜におくる、語らずいはずその聲きこえざるに、そのひゞきは全地にあまねくそのことばは地のはてにまでおよぶ　（詩十九篇）

第八章　人類の起源

人類が何時頃から此地球上に棲息したものであるかを探求する事は實に面白い研究である、而して此探求をなすに二方面よりする事が出來る、則ち一は歴史的方面、他は科學的方面（地質學考古學および人類學等の方面）である、今歴史的方面より見んに人類は太古の昔より地球上に住居して居た、かの東洋の古國たる埃及カルデヤ、アシリヤ、亞剌比亞等の如き隨分古くより文明に達したる國柄であつた、先づ埃及の事を謂はんに吾人が正確に知り得る歴史的人物はマネソー（紀元前三百年代に生存したる僧侶および歴史家にして埃及王トレミーフキラデルフヤスの命によりて埃及國の歴史を編纂したる人なりマネゾーが編纂したる埃及史は概して正確なるものなりしならんも不幸にしてそが納めありしアレキサンドリヤ書籍館の燒失とともに烏有に歸し去りぬ、然しそが斷片はヂヨセフアスユーセビアス、ヂユリアスアフリカナス、シンセラス等の書中に引用せらるゝものありて埃及史の穿鑿は其大体に於て正確なるを證す）が上下埃及を統一したる最初の王として記錄するメネス王であるが其年代は歴山大帝が埃及を征服したる年たる紀元前三百三十二年に先づ事實に五千五百年計である、サムエルレーング

は其著『人類の起源』に於て

メネスが埃及國に一統的王國を建設せしはマネゾーの年代記に徴すれば紀元前五千八百六十七年となる

と謂ふて居る、教授フリンダーペトリー氏は埃及史學の大家であるが此は

メネスが即位せしは紀元前四千七百七十七年なりしならん此計算は當らずとするも百年は相違せざるべし

と斷言して居る、今假りにメネス王の治世を紀元前四千七百七十七年代とするもメネス王が實際埃及王朝に於ける最初の王なりしやは疑問であるが教授フリンダーペトリー氏が古代の埃及王の墓を發掘したるの結果メネス王は古代埃及の最初の王に非ずしてメネス王の前に少くとも五人の王が有た事が分つたのである、而して今後埃及の諸所を發掘して確かなる史料が發見せらるゝに至らば更に夫れよりも古い歴史が明亮となるかも知れぬ、教授ペトリー氏の信ずる所に依ればメネス王以前にありても埃及は著るしき文明に進で居た、夫れが唯だ百年か二百年以前と謂ふのではなく「幾百年以前」である、今